



089131-000-5

特10-459

浮牡丹全伝

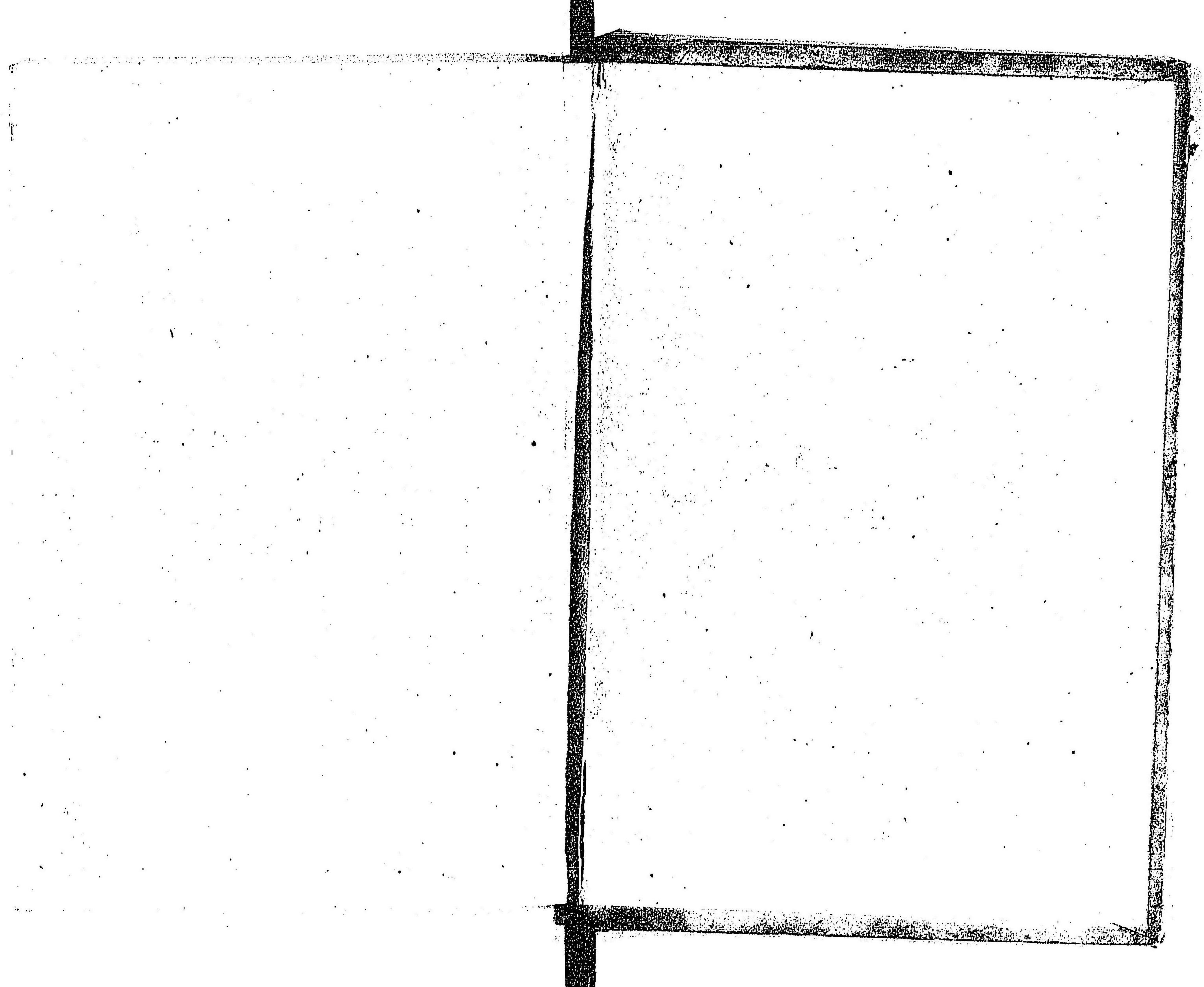
山東 京伝/著

M25

DBM-0129





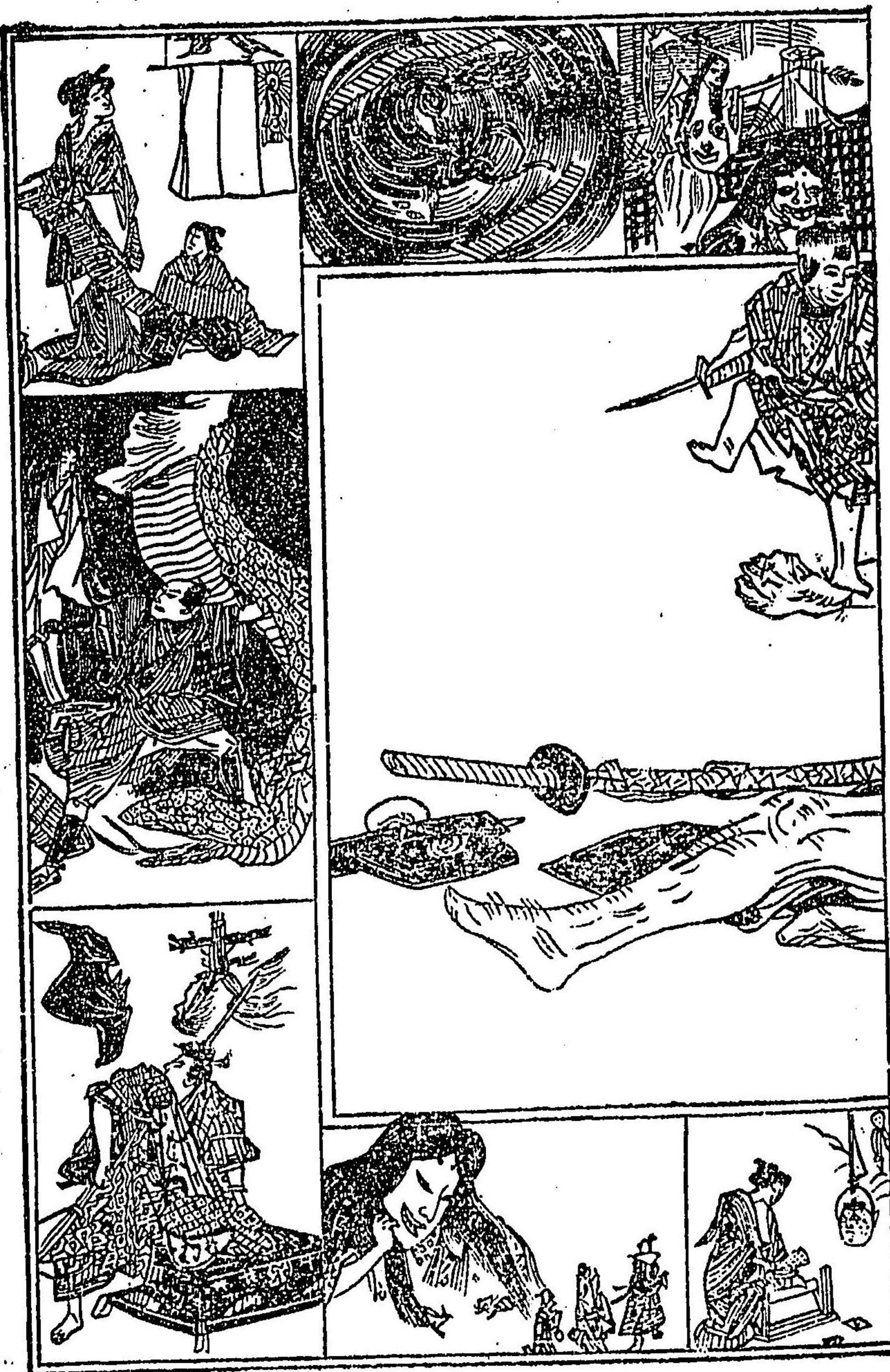




叙自  
 甚哉世人之好奇也不啻僞筆覆窳以奪人之目  
 桃李梅杏之花養之於窖中焜火而促其信先時以出之以使  
 人喫一露有雖異邦亦復爾々故滯人有十月月中旬進牡丹之  
 句吁々凡夫拙劣之手焉能得奪造化微妙之功乎其梅英果  
 不精神矣其李花果不潔密矣雖然梅也李也時賞之可以枯  
 瘦而不可以富麗則己若夫牡丹則不然色不國色則非也香  
 不天香則非也不富不麗則吾向何處而施王后之稱焉加之  
 何養之於窖中以驚人可為乎好奇亦甚矣今春予有所據以  
 擲浮牡丹全傳者始其起草也嘗肆風來堂早認以為己之有  
 時女來促之亦好奇之事也予同待時而可也嘗肆不敢允促  
 之殊急則予亦倉卒走筆以授之且謂之曰是此浮牡丹其非  
 前係牡丹則浮亦私信之唯恐未免堂牡丹之謗是之為憾矣  
 文苑花長花朝於綠竹深處

醒醒齊主人撰







小引

早咲の室の梅は造化の自然にあらざれば色香も深からず稗史を作るも思を凝し氣を練ざれば清淺の水に影をうつし黄昏の月に香をどゞむるの妙に到る事あたはず何爲買等南枝北枝の逸速をあらそひ春風の到るを俟て唐花の速を好む也るにれのづから色香を貯るに違わらず凡兒女子稗史の備像を見るにひたすら新奇を好む繪櫛の奇に泥い文面理をなさず文面理をなさずれバ勤懲の意を失ふ其故に此傳文而繪櫛と齟齬する事鮮からず瑤島の奇計は有磯海の話と暗合せり古畫の怪は山海經の畫精妖をなせしと云水晶燈の説を翻案せり頼廬女郎花の事は正史に見えざれども女郎花物語と云草紙はあつから舊傳れり牡丹灯籠を附會えて一回をなせり義婦の魂魚籠に還着せし事は續因果物語に見ゆ化石谷の一條は造化の最知べからざるを示す金藏の奇病の夏子益が奇疾方に見ゆ石野觀音粉は本草綱目食物本食等に出せり蛤蜊觀音の利益は觀音感應傳に詳なり觀音經蛇に化す事之宇治拾遺に例あり都其根はありながら原接枝のつくるにまうけあそらどどの書にしあればあのがさまく咲分て造化の自然にあらぬかの室咲の花なれば色も香もなく味るに堪えといへども若直と曲との人の心の枝ぶりをためなはん便ともならば編者の幸甚とせん

文化五年戊辰夷則

山東京傳再識

小説浮牡丹全傳

江戸 山東京傳 著

第一回 錦鉦號

小説人皇百三代御花園院の御宇長祿年間足利義政公の時代伯耆國を領せし名和左衛門長知といへるは後醍醐天皇隱岐を逃れたまひて伯州船の上山に還幸の刻忠烈の志を奉りたる名和又太郎長年の末孫にて有けるが其頃伯州會見郡文川に瑤島豹太夫と云ふ郷土ありけり性質寫實柔和にして横書を好みあまねく群書を涉獵し詩を作り歌をよみ其頃都にて専ら此なはれつる香茶の技までもわきまへて邊鄙にまれなる雅人なりざるうちにもわきて兵學は通達し六韜三略にれもひをこらして軍略の妙處をさばむ武藝も頗る曉ぬれども文學に比ていすこしくれどれも所あり父母はずてに身まかり其身年紀は初老に過妻は八雲といひて男女二人の兒をもてりその兒兄は磯之函といひて十八歳にたり妹は八重垣となつて十四歳になれり祖父より三代當郡に住父の代には耕夫織婦などもあまためしつかひ牛馬の數もればかりけるが豹太夫が代に到て農業のわづらはしきを以とひ所持の田畠を人にあつけ置き其物成を取て衣食の料とし十分に富すといへども曾て質素を専とすれば足る所もなし扱磯之函は學文武藝を修行のため三歳前心きたる家僕弓助といふ者をつけて都にの除せて今はかの地に寓居せしむ八重垣の國の守名和の館に出て内室の心にれもひよく仕へぬよりて寮小居者と唯豹太夫夫婦と召仕の男女兩三人のみなり扱豹太夫が譜代の寮の子に石生團七といふ若者ありけり妻子を持隨子といふ者のことく主人の措の裏に別宅を造て住豹太夫が扶持をかうふりて妻子を養ひぬその妻を阿桐といふ幼年の男子ありて市松と云いひける此阿桐が身のうへふこきてハッの説話あり 阿桐は當



六 國名和の邊に住し鶴平次といふ貧者の娘なりしが七國の時父の爲に阿曾比の種に賣るべきを  
豹太夫が父丹下その事を聞て不便に取もひ鶴平次に身價はどの金を與へて阿提を親しらす子し  
らすに貰受て養育しけるが其後丹下も身まかり鶴平次も行方しれずなりける阿提太夫が代にな  
りて年ころも似あはしければ阿提を團七につかとし妻となさしむ此事を能記應して此書に讀ま  
れば末に到て解がたき事ありさるあひた團七夫婦ともに格別に大恩なる主人なれば方に心をも  
ちひ誠心を盡してそ仕へける團七曾て武藝を好み劍術柔術を學殊更大力にて角力の上手なり然  
も欲氣ありけるにそ村々の腕こ、若者等瑤島の團七とてれそれあひぬ文人に仕ふるあ似ず書を  
讀事は好まりけり豹太夫は團七が无慾にして酒はぬ氣質と愛しけるが唯酒癖ありて短氣なる事  
彼が一ツの疵なりとて常々戒をくはへけり夫は扱れき愛にまた同國汗入郡武谷に大島嵯峨  
右衛門といふ武士の浪人ありけり其出身は何方の人といふ事をしらす近頃當地に來り武藝の指  
南してたつさどす曾其業にふどり我諸國を免くり武者修行きてこころみつるに世界廣しといへ  
ども我に敵する者一人もなまを廣言を吐かにもえて國のかみ名和の館のからへとなり高祿に  
ありつきて威勢をふるひ榮花をさい免んものとかねて思ふ所あれば名和の家臣と見れば媚諂  
てしたしみけるにぞたのづから彼がこどばを信じて名和の家臣等門人となるものあまたいでさ  
ぬ又名和の港に鳩八堂九郎といふ兩人の惡漢ありけるを家來の機にして我家にやしなひたき彼  
等にあちびかせて近郷の惡漢等を過半門人となしどかく威風のまさんことをもどめ何がなるの  
目醒すやどの手柄して高祿にありつくよすがにせんものと思ひつゝ討過ぬさて常國船の上山に  
粘華寺といふ古寺あり此山はそのかみ後醍醐天皇かりあ玉座をまふけ給ひし所なるにより天皇  
崩御の後追福のために名和の一族等一字の禪院を建立して夢窓國師を開山とし寄附の田地は

く僧衆あまたありて繁昌の寺なりけるがはるかの年月をすぎて後何のゆゑやありけん空寺とな  
り僧衆すべて退散し莊嚴美觀をつくしたる山門殿宇盡く破損して今唯孤島のそみかなれり  
近來此寺に妖怪すみ夜にいたれば異類異形のものあらはれて人をねぢろかしむる也茲に山かせ  
ぎする者あるをれて山にのほらす衣食の地をうしなひて甚難儀にたよぶよしを嵯峨右衛門にかた  
る者あり嵯峨右衛門これをききてはくそある自己膽氣の猛武藝の秀たるをあらとすべき時こそ  
いたりつれ速に其變化を退治きて諸人の睡を覺すべしといひ心中には一手柄して高祿にあり  
つく便にせばやと思ひつゝ一日身上おそそかに打扮彼鳩八堂九郎等兩人の者を召具し夕日かた  
ふくころより家を立出て彼山に登ける抑遣船の上山といふ北之大山つゞき時三方は地  
下にして根は地角に盤頂は天心に接遠望ば雲痕を磨斷し近看ば月魄を平吞す深嶺幽  
谷のうちに常に雲霧をこえて奥の隈をしるべからず實に希有の高山なりさるはぎに嵯峨右衛門  
等三人此山にのぼりゆくにかさまにも人の往來たたると見えて尾花刈萱のたくひの草ども  
人のたけよりも高くたひのびたるうちを左右に押分て道ともどめ木の下露に袖をぬらしつゝゆ  
くにたまだ初秋なれど寒氣凝たる深山なれば山越の風いどさむく吹わたりて笹のくまびなりさ  
やぎ谷の水音とるかにさこゆとれもへばめぐり下りて死けなる岨をつたひ峯の松風は雲井に  
とれもへばえくり上りて岩根はひいでたる所を越などし幸してかの古寺につき明松をふりて  
らして見るに山門くづれて扉左右にたふれものすさまじく荒まきふ裏にいたりてこまやかに見  
るに鐘樓はすべて替たひかすり經閣のむなしく苔蒸枯蘆釋迦佛の膝を穿て雪嶺にありし時のこ  
とく荆棘觀世音の身を纏て香山をまもる日に似たり諸天の懷中に鳥鵲巢を營み帝釋の口中に  
脚朱綱を結び没頭羅漢遺法身も災をまねかれず折背金剛神通なれどもはごこしがたし天井



の書籠なれば朽て筆勢と失ひ欄間の尺八地に落てのぼらんとするに衣なき体なりけり殿宇方丈  
 廊房庖厨すべて破損し壁落床くちて燕子の糞坐禪の床をうつめ落葉のうちには狐兔の踪を印ま  
 凄涼寂莫としていかさまにも變化のかくれ住べき光景なり嵯峨右衛門鳩八堂九郎等三人佛殿の  
 中央お坐をつらね刀の鏢元をぞくつろげ袖まくりをて四邊をにらまはしつゝ變化のいづるを  
 ぞほそくまこゆるものにて何のあやしみもなし廿日あまりの月もいでてくづれたる部をもりた  
 るに夜のふかさをしりて嵯峨右衛門いひけるはかく時うつるまで變化のいでざる人のものか  
 たるどころいつなりなるかあるひは狐狸野猫のたぐひの所爲にて我勇氣おれられていであはさ  
 るか何にもわれ手をむなしかくらん事本意なしといひける折しも方丈より佛殿へ通ふ行廊の  
 床の下に物音して何にかあらんあやしげなるものつと飛いでぬすはいでたるをといひて三人ひ  
 としくちかつきて見ぬに大なる魍魎を追て出たるなれば打笑つゝもどの所にかへり又しはら  
 く時うつりけるに客殿の方お火の光りかやきわたり人のものいふ聲さこえけるにぞ彼はまさ  
 しく變化ならめと三人ともにかしこに到り壁のくづれたる所より其裏を見れば山賊とねはしき  
 もの四五人いづくよりか尋ひ來けん禪院にはあるべしとねばねば詩摩檀の鉢のうち古き木  
 佛を打入焼火して尻頭をあふり居たりかたはうに一人經匣を魚盤となして 齧を斬居たりたの  
 く月代の毛長く生のび鬘かちめて眼するそく身材たかき者どもなり嵯峨右衛門等これを  
 見て儲は變化にはあらで山城等のかくれ住けるなりとねもひつゝなほ一間へたちたる奥の方を  
 うかひ見れば破れたる翠簾かけたる所に錦襦袢縷を身にまどひ濃くれなわの袴をはき丈なる  
 袴の髪をふりみだし太眉あかねぐるなる上臈色青ざめ 顔あそりたるがすびたる下臈の丸

襦をたて唐錦の袴をしき螺鈿の脇息に身を寄て居たりいとうつくしき女の素薄衣着たるを二人  
 まで高手小手にくくり頭に灯燭をいたゞかしめ灯臺鬼といふ者の如くにして左右にそゑれさつ  
 しばしありて折戸を打開て出来る者を見れば類能そらさまにかへし眼ざし 狼のごとくなるが  
 萌黄蕪の腰巻の上に段尉斗目の小袖を著し丹地の錦の袴をいさ 銅作の太刀をおびたる者摺箔  
 の小袖を着たる手弱女の年と二八ばかりとねはしく美蓉の眼尻楊柳の貌たをやかにしてかつら  
 の眉みざりの髪あざやかなるを情氣もなく襟首つかみて引立いできたりてかの上臈の面前に押  
 伏氷なす太刀を抜て女のむなさかをさし通しけるにあなやと叫てもだへ苦しみ血鮮さとぞば  
 しりてあたりを紅に染なせり上臈はこれを見ていと與わりげお打笑ふ時に怪哉女の胸もと  
 より一道の心火閃々ともけわがり黄白の 螺あまた 群いでし外のかたへ飛去ぬ嵯峨右衛門此  
 光景を見てかの上臈何ものを鬚男は山賊の首長ならめ彼等此所にかくれ住變化に扮作て人を  
 れぞし財寶をかすめ婦女を奪なぞすなるべし此所にかゝる賊人のあるべしとこおもひもよらざ  
 ることなり彼等を斬つくまたらんに變化を退治したるにもゆるかにまざる手柄なり我輩小勢  
 なれども彼奴等何ばかりの手段かあるべきと大膽不敵の嵯峨右衛門鳩八堂九郎お耳口三人ひと  
 しく刀を抜稻妻のごとくにひらめかしれめささげびて斬込けるに盗人等これを見て一同おどつ  
 とらひ忽異類異形の變化となるまづかの上臈の顔は蝦蟇のごとくに變し兩眼に光を放て鏡に  
 朱を濺ぎたるにひとしく鼻は失て唇をらさまおひるがへる灯臺となりし女ひとりは蚊のご  
 とさかほとなりひとり夜刃のごとき顔となる死したるを見せし手弱女もむくくと起上り扇  
 を顔にねりひ象のやうなる長き鼻を扇のやぶれたる所よりいたせり盗人見えし者どもは鬼とな  
 りて鮮もるてありくもあか枯木に目鼻つけたるやうになりて 踵もわり又鼻の顔になりて 兩笠



かより覆面をたるもわり箱の顔になりて木の葉の鳥帽子を若殿もちたるもわりかしら椀尾螺の  
ごときもあり手足河童のごときもあり或い手足ありて頭なきあり或は片手片足のものあり胸の  
あたりにかけてある所のありける額砕谷のはとりの元たるあり見るく變化の數はくなんちら  
のさむかれたる能ろかさよといひて手を打ならしあさ笑つ、奥の方へ走りゆく嵯峨右衛門  
等三人は中にもあれのかすまじと刀を打振て追ゆくに變化ともは奥深くくらす一間のうちに走  
り入ぬ嵯峨右衛門等此一間のくちまで追ひけるにたちまち濕臭ひや、かなる風さど吹いたま  
て三人の鼻口に入どひどしく三人どもに五休すくして此奥に入ことあたわすせんすべなれば  
くちねしなからもどの佛殿にひきかへして總身の汗をぬぐい息をつき居たる折しも行廊の方  
り素布を身おまどひ頭に灯燭をいた、さ手に鐵槌をもち丑のとさまわりていふ者のごとく打掛  
たる女高足下はきこひとしくと歩來此女の顔をつらく見れば彌體のごとし其跡に續て驚もて  
造る人形毛鎗を打ふり炎をふみていできたる嵯峨右衛門しかと心をさだめ氣をくだして改等  
化らるはご化よといひて見て居たりけるがせめてこれを打むべしと思ひやがて立あがりまつ  
高足下の女を目にかけて唯一打と斬つけたるに手ごたへだにせず、忽かきけしてうせ鬚人形も  
ともあうせたり又あざむかれしくちをまよと拳をにぎり牙をかみならし空をにらして居たる  
時まも鳥飛きたりて鳴聞し東方や、しらみけるにぞ朝日の陽氣にあひてはとも變化のいづる  
ことあるへからずかくれ住ところは彼れくまりたる所にさはまりつれば再び人敷をまじきたり  
彼一間を破却して正休を見あらはし退治すべしといひ三人つひに山をくたりて家に飯りぬさて  
瑤島鏡太夫人のものがたりにて嵯峨右衛門船の上山の變化を退治せんとしてゆき手をむなうじ  
て飯しど聞そうく、れもひけるは彼拈華寺は後醍醐天皇玉座の跡に建立したる寺といひそのか

を活佛とよばれたり夢窓國師の開基なれば尋常のもの、あやしきをなすべきにあらざかならず  
いはれある變化ならめ何にまれ山持する者の愁となるとのびがたき事なりれのれゆきてこ、  
ろむべし夜は妖怪の勢を得時なり變化をこ、ろむるには日中にしかじとて一日圓七を具して彼  
寺に到り山門經閣佛殿客殿食堂浴室のくまぐにいたるまでめぐり見れども爰を變化のかくれ  
住所とを祈しきなしな此所彼所を見たりてかのれくまりたる一間の口にいたりけるに忽一  
陣の妖氣を生じてあたりを盤旋けるに瑤太夫屹と眼を明けつけ、かにか圓七かれを見よ此一室の裏  
よりかのごとき妖氣を發するは此ところこそまさしく變化の在所なれといへば圓七左は、拙  
者此裏に入鬼にもあれ蛇にもあれ眼にさへさるものあらばかいつかみていでいべしよき一興あ  
こそいなれどこともなげにいふ釣太夫いな、白日に形をあらはすべき變化にあらじ何にも  
あれ仔細に見と、けて參れといふにかしこみいと袖まくりし腕をさすりつううちにいりて見  
るに暗々としてもの、あやれもつかず唯冷氣身をたかまて恰も氷を抱が如し兩手をのへて四邊  
を探りみるに手にさはる物もなくたちまちささりたる床の板を踏抜て一ツの穴のうちに落いり  
ぬ此所は格別に冷て八寒地獄といふはか、る所にやどおもはれて齒の根もあはず時に唐櫃のこ  
どき物手にさはりぬればこれ何ものぞとれもひつ、小脇にかき抱て穴をいで外のかたに出てこ  
れを見るに是乃ふるき經櫃なり釣太夫打むかひ櫃のうちをあらため見るに濕氣にあたりてく  
さりた、れたる經卷あまたあるなかに一軸の巻物ありてもてに百鬼夜行圖どかさたる昔風古代  
めきたりいそがはしく開見るにさま／＼の妖怪の形を彩色をくこへてかきたる筆意はなは古  
雅にして絶妙なりあまた年を経たると見えて或は紙魚のはみだる所ろあり或くさり破れたる處  
あり奥の方を見るに藤原信實の繪なるよまの奥ありこれに記せしと見ゆさては此繪の繪



夜なく形をあらはすに疑なしとあもふ折しも大鳥嵯峨右衛門腹巻を着きたし雙手驕驍をつけ  
 ていかめしく打粉弓をとり箭をねひ手銚をつきならし門人のうち膳ふときものどもを七八人相  
 したがへてふた、ひ此所に来り思ひかけず豹太夫にあひかねてある人なればたがひに言をかは  
 し豹太夫は變化の用所を探んたために来しといひ嵯峨右衛門は退治せんために来しといふ時に豹  
 太夫かの繪巻物を嵯峨右衛門に見せ足下の見とゞけたまひま變化のかたちと此繪巻とはいかあ  
 といふ嵯峨右衛門これを熟覽し前夜拙者が見たる異形此繪にすこも異なることなし頭なき者  
 片手片足の者胸にかけたる處ある者額谷の元たるものと見しに今これを見れば都是紙魚のは  
 またる處なり黄白の蝶と見えしも金銀の砂子なりといひてうちれきろくに豹太夫果して然とれ  
 もひ一室の床の下より探り出せしといふ事をくはまかたり變化は此畫精の所爲にうたがひな  
 しといふに嵯峨右衛門此畫者藤原の信實といふはいつれの時代いつれの人乎足下は定て知たま  
 ふらめといふ豹太夫いとくそも、此信實といへると藤原隆信の子なり曾て和歌をたくみにし  
 繪圖をよくす尤人の像を似せ壽ことに妙を得たり諸書も又よくかきぬ後鳥羽順徳兩朝につか  
 へて琴を時にあらはせり後鳥羽院御幸あらんとて且供奉人をねらはせ玉ひしあらまし此定に御  
 幸あらばやとて信實をゆめて其行粧を三卷の絹繪あか、せられけり又四條院の御時似繪を御好  
 ありけるに此面下晴御隨身などの影を信實にか、せて興せられたることあり是傳のこと着聞集  
 に載たり又平義時後鳥羽院を隱岐國に遷し奉りし時に御出家あるべきよしを申入れれば則御  
 ぐしをみろさせたまひたちまち御姿のかけらせたまひたるを信實とゆめて似せ繪に寫させられ  
 て七條院にねくりたまひし事承久記に見たり信實生前手つからるのれが像をまがく死後に如  
 圓法師其像に對し歌を詠して悲歎の思ひを寄其歌に

思ひいて見るもかなしき面影を何なかへにうつしにさけん

是新拾遺集哀傷部に見たり如圓法師疑是信實が子にやと思へる、なり父隆信も又名畫の  
 きこえ高し然則此繪巻物は今長祿の時にいたりて二百七十余年を経たる古畫なり畫神抜出  
 て形をあらとせしこと河漢に例多し吳子僧房の壁にゑがきたる驢馬夜中抜出て僧房の家具を  
 踏やぶりたる事盧氏雜記にゑるせり安朝金剛の畫の如いはずも人のしる温なりさらぬだお鏡刻  
 のたくひすべて古物の精怪をなせし例擧つくすべうもあらず夏馬王の圖したる山前經の畫神  
 形をあらはしたる例もわり此古畫の怪をなすもさるたぐひならんれもふに此繪巻物は正しく是  
 後醍醐天皇の御遺物にて當寺に祀さめありし物なるべしと息もつがてはふに嵯峨右衛門これを  
 聞いか先しく打粉手に把たる餘弓箭の用にもた、ねばはと手持なく臂をれしはりて握つめたる  
 拳の力もたのつからうせて彼奴に功を奪ひれたる残念さよと心のうちにはれもひながら豹太夫  
 に對ひ變化の出所古畫の以これをしる事全く足下の博識によれりといふにいな、前に變化の  
 形を見ど、け玉ひまゆゑにれのつから其出處もえれたり全く足下の武勇によれりともものにはこ  
 らぬ豹太夫その功をもつりけるに圖七傍にありて前に見と、め給ふは嵯峨右衛門殿の功なり後  
 に出處をわきらめたるい僕が主人の功なり文武の兩士會らすんははかてかかくの如きとあるべ  
 きやといふ豹太夫いとく各畫を失ふはれまむへきとなれども妖をなすうへはせんすべなま焼  
 すつるにまぐべからずとて圖七に命して枯技葉木を築させ火をくれして彼繪巻物を焼失ひける  
 にむら、と立のはる烟の裏に百鬼夜行の異類のかたち鬚鬚とあらはれいで、空天に放てきえ  
 うせ其餘烟二道に且かれ一道は嵯峨右衛門が懐に入一道は豹太夫が懐に入りし是乃、災  
 の神壽妖に乘して兩人のあひたに一つの災をねこさしめて希代の珍事を隠したし後世の話柄



第二回 鳧鉏號

去程に文武の両士相會して船の上山の變化を退たるといふうはさ専らなりけるにそ國守名和左衛門長知の耳にいりかねて友人にもわれ武人にもわれ其業に達したるはを得た條しくはな居られたるをりふしなれば召抱給はん心ありて彼等兩人が爲人たよひ其業の淺深いかにとたつね給ふに家臣のうち嵯峨右衛門が武藝をたつとみて門人となりてものどもよき折と心ひさまくりに取繕ひてひたすら吹學まけり又長知の夫人は豹太夫か娘八重垣を待女にめしつかひ給ふによりてかねて豹太夫が兵學に達したるを聞かよび給ひ詠したる詩歌なども見たまひて尋常ならずとばはされけるにそ彼を召抱給はんことしかるへしとさこへ玉ひけりこれによつて長知の心決し且家臣の中嵯峨右衛門が門人どもを召て彼に此内意をいたしたくべしと命じ玉ふ夫人は八重垣を去て豹太夫に内意を告め玉ふ嵯峨右衛門は内意を聞てかねての端且其一端をどげしと大に喜び我名和の家臣とならば媚諂て長知の心になひつひには執權職となり京都の管領濱名入道に賄賂を用彼が疆域をかりて名和の家を亂れ我を奪ひて其勢に乗じ雲州の尼子を亡き兩國の主となりて榮花をさばめんと獨笑しつゝ万のこゝろ支度して表向より使者の到るを待居けり豹太夫の娘のもとより告越せし内意を聞て思ひけるは我祖父より三代仕へずして當地に住郷士となりて思のまゝに世を經ねれば仕官の望更になし死して骨を留て貴れんよりと生て尾を中にも曳んにしかか文縷を衣とし藪菽を食として郊祭の驢牛どならん事をいかでか好べき商山の紫芝鑪山の綠葉以て饑を療すべし國守の内命はたれもこといへども多病に託きて御免を願ふにしかと妻八雲にもたのれが思ふ所を語りけるに八雲いひけるはさかぬはすはさばめて

理なれと娘が越せし文を見はべるお此度のことば御夫人の厚きればしめえにせず、ゆあび玉ひぬる事の上しなれば若し辭退ありては娘か首尾合も取のづからあまくなりなりぬるべし兒子磯之丞には仕官さすべされはしめしにして已に京へのばせて物學させ玉ふなれば御舟仕玉はいかれが立身の便ともなりはへらん他國のさみに仕ふるにはあらず此國守に仕へ玉ひて家名を輝し玉ふは御先祖への孝養にもなりはべらんなどいひてす、もる言葉も又理なきにあらざれば豹太夫心躊躇とどかく一決せざりけりそれはさておきこゝに又石生團七一日私用ありて鹿伏といふ所へゆきけるに比しも初秋のすえなれども殘暑つよくことに此日は熱かりければ茂林のかけに立よりてやすらひ居たるに鍛鍛治の鐵平といふ者ゑるかに團七を見つけちかづきていひけるは團七殿こはよき所にて出合ぬそれがし近日に和殿をむかへて前の日の勞をいさ、か謝し中さんどれもひ居たる折節なるに此であひしは幸なり彼所の酒家にて一盃とすしめ申したくいなくといふ此者のかくいふ前の日倭文明神の神事角力の時此者米子の鮑取鬘斗むきさきと口論して打合けるを團七がどりあつかひにて事にならずまてをみける其勞を謝せんた然なり時に團七いひけるは其志は過分なれども我比日は酒を飲ことを好まず殊更和主に錢を費さしむるも我意にあらねばそれは休いへ志の厚さの百盃を酌たるに等しくうけられさむるなりといふ鐵平これに聞和殿は日來人にすぐれて酒を好み玉ひしに何ゆゑさばかり休いやと問ぬれば團七はく我かねて酒の癖あしく酔にすぎては前後をかへり見ずや、もすれば事をひき出そにより主人度々教戒をくはへ玉ふそのゆゑに我比日心に誓ひて酒を飲さることいふ鐵平打筈ひ和殿酒をおはく飲玉ふはあしかるへし少しく飲たまはんお何とて事をひき出し玉とんや酒を飲飲さるはともかくも唯小人が志をはこぶのとなれば枉て歩みへさなくしては小人が心すませさるなりいさ



くど袖をひきてあながちにすも免けるに手圍七やむことを得ずおおくながらいざなこれ  
 て那酒家にいたりて見るに背後は高き岩壁にて屏風をたてまことしたることく前ふは溝川あり舟  
 板を渡して橋とす窓のあたりに破れたる蘆の簾を掛けたま軒端かたふきて朽目に垣衣あひしけ  
 れりまぼらにかこひたる垣のもどに王蜀黍たかく生のひ鶏頭 花炙花などの咲たるも見るも  
 けに茂林の陰に隠して寒蟬の聲凄急に鳴立家鴨の子の鳴連てかけめくるなど聞もうるさし唯  
 昔非に清水のしたるのみあづかに涼しさまなり鐵平圍七を導て酒家の裏に入賢子に尻かく  
 れば圍七は諸 祖て汗をぬしのこひ扇づかひして居たり籠の煙たちみちて奥の方と見分がたさ  
 程なれとも柴刈男獵者鳥粘のたぐひにやあらん高やかなる聲して話しつゝ酒飲飯食て居けり籠  
 の邊よりあるじの翁抄手まつゝ出来て何まゐらすべきといふに鐵平よき酒よきさかなもて來よ  
 といふ翁いこ酒と諸白をまゐらすべし肴と出善の友島の鰯の味を魚軒に調じてまゐらせんこ  
 しは煙籠ていふせくおるされん彼處は日陰にて涼風の通ふなり彼方へ來ませといひて竟どり  
 來て籠籠の下にすゑ兩人を此お居らしめて暫ありて酒肴取そゑて持來ぬ鐵平 盃をとりて  
 圍七にすゝむ圍七いへく前にもいふごとく我酒を望まされども和主の 志もたまがたければ此  
 までは來つるなり唯三盃を限として其餘をすゝむることなかれといひつゝ盃をうけ飲はえて鐵  
 平にさす鐵平飲て又圍七に與ふ圍七再これを飲に此酒案外に美酒なりければさても氣味よしと  
 以ひて舌打して飲けるに世の常言に始て人酒を飲中比の酒酒を飲終には酒人を飲といふ 宜哉  
 圍七比日禁酒して酒に渴したる時といひ生得酒の香を聞は腹中の虫鳴咽なりて 自製しがたき  
 はどの酒好なれば此時に到て堪しのふことあたはず始の言にたがひ鐵平がすゝむるに應じれば  
 はず數盃を傾て大に亂醉を腰刀をとりたき高平跨かきて高話の裏に前の日の神事角力のとを語

りいたし和主彼時の角力かならず勝べき所なるを負つる角力の手をしらざるゆゑなり我すこ  
 しく教てんといひて惟子を脱捨裸になりて竟を飛下りまづ掌を打力足をふもならしけるが元來  
 身丈六尺に近く總身の色素して書をつかねたることく唇くれなゐにきて脚お首さ鬘あり角力の  
 關取といふともはづかしからぬ骨柄なりかくて圍七いひけるい 抑角力の四十八手といふと原  
 反捻投掛の四手より出るなり頭を以てするを反といふ手をもつてするを捻といふ腰をもつてす  
 るを投といふ足を以てするを掛といふ此四手十二手づゝにわかれて四十八手となるぞかし鐵平  
 こゝへ來いへ我仕方して教べしといひて鐵平をよびて相手とし組合てかくするを枕腕といふ  
 これ反よりいづる手なりかくするを片手變とよふこれ捻よりいづる手なりかくするを擦技とい  
 ふこれ投よりいづる手なりかくするを掛技といふこれ掛よりいづる手なりといひつゝ仕方して  
 教へければ奥に酒飲飯食て居たる者等與わることこれにもひみなたち出て見物しけりしはあり  
 て圍七これを休今一盃とて大 盃を乞とりて又連飲ぬ數盃をかたふけこゝちよしとひひつ  
 ゝ扇をせわしくつかひ居たるに鐵平も酒興お乗じていひけるは和殿は角力の上手のみにあらず  
 武藝も通達し給ふよし一捧つかひて見せ玉ふまじやといふ圍七打點頭腹こなしにつかふて見す  
 べしとて傍邊にありける猪ねひ棒をねつとりて地上に立まつ棒を頭より高くさし上げて風車ので  
 どく轉し大當勢小當勢 倒 頭上刺閃腰 下 穿なごいへるさまゝの手をつかひて見せければ鐵  
 平これを見て傳感嘆す見物の者追集りて奇妙の上手哉とほむる聲暫休すしかるに見物の背  
 後のかたにていひけるを誰なるらんどねもひしに文川の圍七にてあるか彼がつかふ棒とすべ  
 法にかならず樂賣のつかふ棒のどとく只樂手につかひて人の目を惹くのみ眞の棒法にもあらざ  
 るを漫あつかふかたをらいたさよといひてあざ笑ぬ圍七これを聞どがめ何奴そどかへり見れば



是乃ち嗟峨右衛門が家來鳩八堂九郎等兩人なり圓七これを見て元來の酒癖大に癪し聲はげしくよぼしりけるは今我棒法を誹りたるは鳩八堂九郎よな汝等舌ばかり動すことなけれ我棒法の實を論せんには自出で勝負を決せよ汝等ごとき風張りもは棒をもちうるにたよはず只我拳をもつて一打に打殺すべきぞと晋棒をからりと投擲て腕を撫つしいざ來れといひけるに鳩八堂九郎も前程より奥の間にありて酒を飲十分に酒氣をかひ居たればこれを聞て大に怒り兩人ともにありあふ楯棒を杖つとりて躍出鳩八之肩間をのそみて打かゝるを圓七閃りと身をひねりてこれを避れば堂九郎は向股をなきたふさんどはらひうちお打を早足をおわけてをざりこゑなほ透間もなく左右ひとしく打かゝるをどく身を沈て背後に立ば兩人の棒たがひにみづから頭を打合て眼くらみ俊巡所を圓七環臂を伸し鳩八が襟首つかみてなげいだし足を飛して堂九郎を撰め蹴たりけるに鳩八の四五間飛て前なる滑川へまつさかしまに落り堂九郎之傍邊の菅井の裏にたちたりけり此兩人日來此邊に來り无理いひかけて人を打擲などして狂破けるゆゑ前程よりこれを見物して居たる者等も此酒家の翁もかねて彼等を惡み居けるに誰一人これをどゞむる者なく彼等が幸目見たる休を見て心中に快しどもひねばばばす咄と笑ひけり時に鳩八は泥まみれになり堂九郎は濡風のやうになりて這上り數箇の人前にてかく恥辱をうけたるからと益堪忍なりがたし此上と眞劍の勝負を決すべしとよはたりて兩人ひとしく刀をぬきはなち只一打と斬つけたり圓七も手ばやく一刀を抜て丁どうけとめまやこしやくなりとよぼしりつし丁々はつしと打合しが見物の人々は驚て逃去只酒家の翁のみかなる難儀かかするべしとぞおそるく見居たりけり彼等兩人は命をさめに戦ひけるがつひに敵する事わたはす鳩八は頼堂九郎は眉先に鐵手を取ひもるも朱に染りて倒れたり圓七之前後不覺の醉狂なれば息の根をとむべしとな

彼刀をふり上つるを鐵平あはてふためき走よりて後抱に抱とゞめ前程語り給ひぬる主人の教戒を忘れまたひしかといそかしくいへば圓七醉中なれども主人の二字をいねれていかさまと心づきやうく手をとゞめけるに鳩八堂九郎等は面目なくやれもひけん起上りて疵口をたさへつ逸足にだまて逃去ぬ圓七はこれを見て扱も口に似ぬ未熟なる奴原かなといひて阿々と打笑ふ此時しも入相の鐘ひびきて日は西山にたち入ぬ鐵平と酒量あさけれと取なく飲す殊に前程よりさまなく心をつかひけるにぞ酒氣全く醒ければとゞめ圓七をかへさばやといろくくにいひこまらへけるお圓七いひけるは今日は思ひがけず和主の懇なる餐應に預て大に興を催しぬ酒錢は恥のれ償べしといふを鐵平とゞめてもづから酒錢を酒家の翁につかはし酒器などをそねたるもあらば償をどらすべしといふにすこしも損じたる物いひはすといふさて衣服をとりて圓七に着せ帶しめさせ兩刀をかひさせ懷紙手巾など忘れ給ふな扇は把ひか小人途中まで送ひべし夕月夜こそ幸なれといひて腰を抱て出ればさても臆病なる奴原かなといまだ彼等を瞥り休す頭れもく足かろく東に倒れ西に歪としばく嘔吐まつし涙々踏々ときて飯り去ぬ酒家の翁は溜息を吻とつさて安堵のれもひをたたりけりさて鳩八堂九郎等は武谷に逃飯りけるに嗟峨右衛門彼等が手疵をたひ身うち朱になりて飯たるを見て其もを問にぞかはるく子細を語り吾輩はどても圓七に敵せんことがなひかたういへばねがはくい主人手をくだして我々の恥辱をすし玉はれかまといふ嗟峨右衛門まばらく思案していひけるは汝等が手疵をたひたるは我爲によき幸なり其もえいかにとなれば汝等もしるごどく此度名和の館より内命なり我は武豹太夫は衣を以て共に召いだされんとなり彼は三代當國お住殊に人愛なるものなればおのづから人の尊敬あり我は近來他國より移來つれば用らるゝ處彼に劣れりしかのみならず動もすれば汝人は武人の上に立



んとすさるによりて我彼と一時に召抱らるし時はながら彼が下につくべき我またたき宿願  
 ければどかく彼は我眼中の釘なり我今俄にその釘を抜んずる一計をねもひつきぬ其計といふ  
 ぬれば主人たる己武士の一分たちがたし團七は下郎なれば我相手不足なりこれによりて足下  
 と果死あふべし尤果死の式法を守り相互助太刀をもちうべからずと誓てくるべきなり約  
 太夫文學には達しつれども武事に於て我に敵せんことあたはざれば和を乞は必定なりさある  
 時はこれをながらく恩に着せて我彼が上に立べし若又果あはんとはいは、唯一鎗の下に一命を奪  
 ひて益我武備を輝すべき其上あは團七めをいかやうにはからはんも心の儘なるべし是全き  
 長計にあらずやといへば兩人口を等うしてそれまかるべういといふ嵯峨右衛門彼等が疵を見る  
 にさばかりの事にもあらねど深手の体にもてなして伏しめれさぬかくて翌日にいたり果死状を  
 書奴僕に持しめて約太夫が方へたくる約太夫是を披見して使の者を待せれさまつ委細を糺さば  
 やと團七を呼けるに團七は昨日の醉狂を大に後悔して私宅に打まはれて居けるが主人の前に出  
 何等の御用いといへば約太夫汝昨日嵯峨右衛門が家來鳩八堂九郎等に疵を負せつることありや  
 といふ團七の頭をたれ唯誤入て一言の返答もせざれば約太夫かさ締て其事實にありしかどた  
 づぬれば團七やうく頭をわけ个様くの事にて彼等兩人あぐまで悪口いたし其上真劍の勝負  
 を仕のけいもあやむことを得ず少しく疵はせしといふ貌太夫打問て汝日來の酒癖を發し醉狂  
 の上の仕業にてあら先それにつき今嵯峨右衛門方より个様くの文音にて果死状をれくり明朝  
 鶏鳴の時を期し八幡の濱にて果死あはんといひ越しぬれば我得心の返書をつかはさばやどれも  
 よによりて且汝に子細を問つるなりもとや用なし退けといふ團七これを聞て大に驚き嵯峨右衛

門か中條何とも心得ずい拙者と彼等兩人と果死合つかまつりてこそ理ともまうをべけれ双方主  
 人の果死合玉ふべき道理いまじといふ約太夫云く武士たるべき者果死状をれくらし理を論する  
 は卑怯之殊に嵯峨右衛門か所爲計策ありともへばいかんともすべからずといふ團七いはく此  
 事の原の起りと拙者が身より出たることにいへば拙者が首を打て嵯峨右衛門方へ贈つかはされ  
 果死合の事をれん休くだされかしといふ團七かくいふ心底は約太夫武藝に於ては嵯峨右衛門に  
 敵すべからずと思ふ故に我命をすても主人の无事をとからんとおもへばなり約太夫彼か心底  
 を察しれもひなからわざと聲あらしけ大に呵ていひけるは愚なる事をいふ奴かな此時にのそみ  
 て汝か首をれくり和を乞はうへなき恥辱なりとにかくに果しあはんにしかぞとて返書を書ばや  
 と筆硯をとりけるお妻八雲前座より物陰あて委事を聞走り出て夫にとりつきこれのふ息子磯  
 之亟八重垣等を可愛どはあはさずや死事にをさまる思案してたびいへといひて涙ながらにな  
 官葉とつくしけるが約太夫少まも聞入す武士の妻に似合さる未練者かなど呵てつひに果死合得  
 心の返書をかきて使の者にわたしぬ使の奴僕返書を持て飯りければ嵯峨右衛門いそがしくと  
 りて披見にれもひの外に和を乞す果死合べきよしと答なれば大口あきて呵々と笑ひ身のほごま  
 らぬ腐儒者め哉 雞をこむる方たになくて我お敬せんところな不便や念佛となへてまてか去彼  
 が一命い我一鎗の下に失はんずるぞと獨言に誓つ、其支度にそかりける約太夫が方には妻  
 八雲團七夫婦ひたすら愁ひ居けるにすでに此日も暮て夜にいたりけるが約太夫は平々たる顔色  
 にて其用着もせされば傍の者等は殊更に危くはばて安さ心はせざりけりけりて三更の鐘響け  
 れば約太夫八雲おむかひそちも寝よ召仕の者等もそべて睡し先よといひて己は待齊に罷り夜  
 書を讀て居たりける八雲は目もあはねば臥たるのみにて睡せず居たるに程なく五更の鐘も



ひびき曉ちかくなりけるにぞ起出て書齋に到り約の時にもなりはべるに身上の打扮をたそか  
 にと、のへ玉はずや食事もしたまへといふに豹太夫いなくさはかり用意にもあふべからず  
 今は空股にもなけれは食事の歸りてすべしといひてやうく立上り團七をよびていひけるは  
 帳行衛門互に助太刀をもちうまじきといひ越しぬれども若助太刀を隠したるんもはかられ  
 ば汝我從より來り物陰に隠居て若助太刀の番あらば出て防ぐべしさもなきには必出べからず  
 といひ含常さまの衣服に兩刀をたびいつの間に支度てやたきけん長き竹を以て柄としたる鎧を  
 携へて出去けり八雲の背後姿を見おくりてこれが此世の別れにはならぬかどおもひつゝ打倒れ  
 て堪忍びたるため涙を一度に流してむせかへりければ團七扶起して必歎きたまふことなけれ  
 ず彼所へ参るからい御主人いかにたまふとも危き時は御助太刀仕りて恙なく御歸宅あるやう  
 お仕いんたどへ嵯峨右衛門鬼神にもわれ何ばかりのことかひへきと力をつけ衣服の裾をと  
 りて高く帯にかいはさみ長き刀をよこたへ袖まくりしつゝ後をしたひて走ゆきぬ去程に嵯峨右  
 衛門と豹太夫より前に八幡の濱に來りてまぢ居けるに誰告るとなく此噂ひろまりて近きあたり  
 の者等追々此所に馳集り或は芝山の小高き所或は岩の上木の枝にのほるあり海には船をさへ  
 停めて此勝負を見んとひしめきあひぬ程なく豹太夫も此に來り双方東西に別れて立對ひける  
 きしも東の海面に朝日輝出ければ見物の諸人且嵯峨右衛門が爲体を見るに身材さいめて高く色  
 白く肥太て渾身白銀ともつて鏤なしたることく世に稀なる美男なりといへ共眼尻そらさまにひ  
 るがへり眼中光を放ちて相鏡はれのつから兇惡なり其打扮の頭髪を亂して柿色の布の願巻し身  
 尻と釘絨を着籠襦袢の帷子に白布の褌褌ひさゆひし手脇指をつけ武者草鞋を穿朱鞘の兩刀をさ  
 してらし十文字の鎧を小脇にかいはさみ臂をみからまて仁王立に立たる光景勢猛烈にしてい

かなる強敵をもどりひまきべう予見たりける豹太夫を見るに身材ひきく瘦がれて床の下に生  
 出たる豆の二葉のやうにていと弱氣なり打扮も常さまにて袴のそばさへとらず短き刀をたび竹  
 の柄の鎧を打がたげ深々として立たるさま長閑なる春の風にも倒れつべうれもいれて虎の前に  
 羊羔の出たるごとく鳥鷲の巢に紫燕の近づきたるよりもなほ危げなり見物の諸人これを見てあ  
 な笑止や豹太夫は今に命を失ふべしとく和を乞へかたか嵯峨右衛門に敵すべき身を  
 願ぬ者かなといふもわり且前に念佛をとなへ可愛やといひて冷汗流すありけり此時嵯峨右  
 衛門年三十一歳豹太夫の年四十二となん時に嵯峨右衛門且言を出し豹太夫殿約をたかへず來ら  
 れし神妙さよといへは豹太夫小人遅刻以たしてさすな待玉ひつらんどいひて互にちかく歩み寄  
 いさまむらふいざと聲をかけ嵯峨右衛門鎧をとりつゝ三ツしできて颯々となりひひか  
 せ呀と一聲叫ぶ豹太夫が心筋を目がけ唯一突どつけかけたるに豹太夫電のごとくに身を避れば  
 嵯峨右衛門か鎧はむなしく空をつき力餘りて入身になりける時豹太夫彼竹の柄の鎧の穂先を抜  
 捨て竹のさきを嵯峨右衛門が面前へつとさしつきたるに忽竹の先のうつろなる所よ何にか  
 わらん青光る物出て嵯峨右衛門か鼻のさきにひらめくとひどしく嵯峨右衛門顔色青く變りて打  
 わなうさつゝ一足居に撲地倒れて悶絶したりけるがまばあありて起上り又鎧をとりなほして突  
 か、るに豹太夫なほひらめく物をさしつれば嵯峨右衛門堪かたさ体にて鎧を地上に瓦破と投  
 捨て跳出し濱づたひに後をも見ずして逃去ぬ見物の諸人これを見てあないぶかし豹太夫が持た  
 るは何等の物ぞとあちかしこちれし目をとめて熟見れば三尺ばかりの蛇を竹の空所に隠入  
 尾をくしりつけて逃ざるやうにかまへたるが苦しがりてひらめき山首にてはたらく事の甚しき  
 なり見物等なほ不審はれず嵯峨右衛門は船の上山の變化をすら見とけけたるはどの膽ふとき者



なるに何とて小蛇を祀それけん案外なる臆病者か不見くるしき逃さまかなとくちんぐにいひ罵  
 てのゐがさまく四方に散亂れて飯り去ぬ先刻より人の聲にかくれ居て始終を見たる彌七走り  
 出て主人の善なきを喜び小蛇の奇計を感じれば豹太夫彼竹を投捨てしづかに袖の應を打拂ひ  
 彌七供せよといひて相具して飯りぬさても八雲は彌七が妻於桃ぼともは豹太夫が身のうへと案  
 じわづらひたちつ居つ心も心にあらで音信を待居けるに豹太夫圓七を具し委々として飯來にけ  
 れば死したる人の蘇息たるこゝちして眼りなく喜びぬ彌七はわきて喜びにたへず筒様くにて  
 ひひしと物りければ八雲管棍等不思議の思ひをなしぬ時に彌七いよく嵯峨右衛門の大強氣  
 の者にい何とも蛇を祀それいやらんといひていふかしがれば豹太夫いはくおよそ人の性によ  
 りてわづかな物に祀せること類例すくなからず往古山城介三吉春家といふ者さめて蛇を祀  
 それけるあるとき夏の比なるに染織の辰己のすみの山の木がくれお船一人君連二三人行て涼居  
 たるうちに春家もまじり居たりけるが傍より三尺ばかりの烏蛇出たり君連等それ見よ春家とあ  
 るに春家これを見るより忽而色青くなり堪がたをいだしてわつとさけびて逃んどしける  
 が二度まで倒れて番をもふます這へ出て己が家に逃飯り人こゝちもなくなりたるを妻子も  
 介抱にてやうく正氣になりけるよし今昔物語に記したる物がたりなり嵯峨右衛門が性此  
 春家の類なり又大藏太輔清康といふもの猫を祀それ怖恐太輔といふ異名とりたることを同書に  
 載たり都其性としてわづかの物を恐るゝなり己今朝のふるまひ童の戯れに似たれども其蛇そ  
 るゝものによりて計を施してんと彼春家が事より思ひつさぬるぞかし彼聞絶して倒れたる時  
 斬ばきりつべけれども原打果すべき所存にあらねばたゞいしるにまかせて走らしめしと語れば  
 八雲傍よりおん身いかにして嵯峨右衛門が蛇を怖ることをしりたまひしやらんとたづぬれば其

不審うべなり此春名和の都の酒樓にて我彼にはじめて相見せしときさしなれぬ結すぢどならし  
 淫淫の聲にのせて歌うたふ者あり酌に立たる女お問は旅あるさする琵琶法師が近來琉球島より  
 渡し三線といふ物なりとて彈を此邊の八奇しかりて彈すなりといふ其器をしばし借て見る事は  
 なるまじきやといへば安きことぞといひて頼て携來て見せけるこれを見るに三線にして蛇皮  
 をもつて張たる器なり琉球國人毎に三線を鼓て遊舞す蛇皮をもちもゆるに蛇皮線といふよし  
 聞つるが今見る事の奇しさよと思ひ此時嵯峨右衛門圓七に立て飯り來にければめづらしき物これ  
 見たまへといひて彼蛇皮線を而前へさしだしけるに嵯峨右衛門これを目見るとひとしく顔  
 の色くさりたる藍のやうになりて走飯りけるこれによりて彼が性蛇を怖るゝといふことをしり  
 ぬ前の日船の上山より相伴て飯りぬるべきも篠の裏に蛇あらんことを駭する、さまなれば益  
 彼は蛇をさらふをと思ひぬ我彼どしたしくはせされどもかねて彼を相するに奸邪佞惡の相あり  
 彼名和の館へ召出されなば必のちくは災を起すべき者と思へどしかいはゞ彼を顔にたつ  
 れば口を閉ていはざりしが果死状を贈しを幸とし計をもつて彼を走し免ふかひんかには名和の  
 御館の御爲を思ひてせしことなり彼あまたの人前にていみじき耻をねぬれば他國に赴かん事  
 必定は是大なる災を避たるなりと語りければ皆々其思慮の奥妙なるを感じけり果して豹太夫が  
 言にたがはず嵯峨右衛門この日いそかはしく家財をとりねさめ鳩八堂九郎兩人を具して何方と  
 もなく逃去けりかくてつぐる日に到り豹太夫圓七をよびていひけるは吾汝を總角の比より召つ  
 かひて主従の因いと深けれどもやむことを得ず今日あらためて勘當する故に其いかなれば嵯峨  
 右衛門こと一旦御館の召抱になるべき御内意ありし者なるを走らしめ其原之汝より出たれば館  
 へ對し牽りて汝を免しつかひがたまこれによつて勘當をなす妻子をねひて俄に浪々の身となる



いさぞ難儀なるべけれ。此金を與ふるなり何方にも身を退き此金をもつていかなる活業をもちて妻子を養へかし。汝の原なほさ性の者なれども酒癖によりて事を誤りつれば此後必酒をすさず事なけれ。妻棍事は幼少より亡父丹下殿のいどをし給ひし者なればことさら放ちやるにしのびず。いへども汝につれそうならぬこれ。も又せんすべなし。と委細にいひ聞せて金廿兩與へければ。團七は主人の情を感じ身の誤を悔いらへだにしかねて。只男泣に泣ければ。豹太夫も最不便に思ひて。ひそかに涙を流しけり。八雲は花棍をよび情深き事どもいひ聞て。着古しの小袖なごあたへ。他日歸參の時もありなれど。かくに恙なくすぎよなき。いひて涙を流しつし。慰めぬれば。顔もえおけず。泣居たりこれによりて。團七俄み家財をとりたさめ。行装をど、のへ夫婦つれ立一子市松が手をひき。涙をたどしつ。住なれし所を放れて。何地をあてどもなく。出去ぬ。諸豹太夫奇計をもつて。嗟哉。右衛門を以走りしめたる事名和左衛門の耳に入れば。かりの臆病者を召抱ぬ。こそよかりつれとのたまひ。吹舉せしもの、疎忽を呵たまひ。益豹太夫が才徳を賞美し。玉ひしひて。使者をつかい。され高祿を宛行べきよし。の直書をたまよりけるに。豹太夫今は辞せること。あたはず直に禮服を着て。館に出拜請をとげ。君臣の禮をばりければ。長知手づから。千手院力王の刀をたまはりて。十分の首尾なりけり。

第三回 辟邪鉦鼓

爰に又豹太夫が一子磯之丞は學文武藝を修行の爲三年前家僕弓助といふ者を具して都にのほり。洛外山崎に寓居して。主従只二人住けるが。今年己に十九歳にいたり。眉目清雅にして。世にすくれたる美男にて。在五中將の若盛もかくぞありけり。思はる程なりけり。若年なれども。生つきて物かたく。美女はほく都近きに住ながら。なまめきたるかたには。目もやらず。花柳の街にいざなふ者あり。

いへどもあしき方には足たふむけず。明尊文武の道を學ぶ事。にのみ心をゆだねよき。師につきて。其業も漸に通達したりけり。家僕弓助も又。生得老實なる者にて。朝夕まめやかに仕へぬ。磯之丞家にあるときは。他の事とせず。一向書を讀或は木太刀もて。弓助を相人に。劍術をこゝろみなせけるに。ぞ自然弓助も其業をねねけり。扱一日磯之丞師のもとへ。行て夜道を販りける。折しも月のいとさやけかりければ。道を更て。男山八幡の社ふそまわりける。そも。此御社は。清和天皇貞觀元年八月。和州大安寺の僧行教といふもの。豊前宇佐の社に詣て。示現をかうふり。奏聞して。常山鳩峯に。勅請したるに。香水の窟より。涌出まゆえに。岩清水となつけたるよし。山下の人家軒をならべ。和光の鹿も。濁江の河水にうかむ。うろくづはげにも。生るを放つかき。深き。摺もあらたにて。月のかつらの。男山さやけき。影は。所から木くの。紅葉も照をひて。日もかげるふの。岩清水。昔の衣も。妙なれば。みつの。決に影うつるし。の箱ををさむなる。法の。神宮寺けに。ありかたき。聖地なり。岩松そば。だちて。山嶽谷めぐりて。諸木枝をつらねいと。神さびたる。鳩の。峯。越來て。見れば。三千世界もよそ。ならす。千里も。ねな。じ月の夜の。あけの。玉垣。みとし。ろの。錦。かけま。くも。かた。じけなし。と。伏拜て。麓の。野邊に。出けるに。千草の花。盛あして。色をか。さり。露を。ふく。みて。虫の。音。までも。心。あり。げ。なり。頃。しも。七月。盂蘭盆の。とき。なり。ければ。此所。彼所に。高燈籠を。ともし。寺く。に。と。燈籠の。銚物。或は。花鳥。或は。草木。さま。ま。ま。は。ら。ま。く。造り。な。して。其。裏は。灯火を。とも。して。かけ。つ。ら。ね。其。光り。恰も。白日の。こと。くなり。又。それ。くの。塚に。いたり。聖靈を。むか。ふ。ると。て。手毎に。燈籠を。提て。ゆき。か。ふ。人。あ。また。あり。磯之丞。は。み。ち。く。かな。た。こ。な。たの。寺院に。立。より。て。燈籠を。一。覽。し。ね。は。え。ず。時。を。う。つ。こ。ける。に。そ。往。來。人。も。稀。に。なり。寺。くの。燈。火。も。消。く。物。音。も。し。つ。か。な。り。け。れば。い。ざ。飯。ら。ば。や。と。れ。も。ひ。ひ。そ。ぎ。ゆ。き。ける。に。年。の。ころ。ほ。ひ。十一。二。歳。と。あ。は。し。き。斬。禿の。女。の。童。容。貌。さ。よ。ら。に。い。や。ま。か。ら。さ。る。が。美。麗。つ。くり。たる。牡丹の花の。灯籠を。提て。



唯一箇來り磯之亟に對びていふやう妾は此近きあたり宮仕しはんべる者なるが今宵靈迎の爲  
 其墓にまうでつるに道中にて具きたる人を見失ひ幼身の夜道なれば何となく物籠そろまうて  
 道の案内のありながら獨飯るになやみひこひねがはくは君妾をともなひて住家に送りたまはる  
 まじや馴々をまき者と称されんがせんかたなさに願ひいどかしこくいへるけはひにかにも難  
 儀の体なれば磯之亟不便に思ひ我も歸路を以そぐなれどさまで遠からぬ道ならばいかにも  
 りまひらすべしといふ女の童聞て君はいつれの方へ飯り玉ふやといふに磯之亟山崎の方へ飯る  
 よしをいへばしからばれくり玉はるも順路なりといふにどつひに相伴ひてもきぬさて草深き野  
 道をゆくこと十四五町ばかりにしてすこしくれくまりて松杉の一むらまげりたる所にいたり女  
 の童のいへるは此こそ妾の宮仕する所なり苦しからざれば此方に到り玉ひてしとし道の  
 つかれをもはらま玉ひてんやといひつ、導て冠木門の裏に通らし一間の座敷に居て彼牡丹の  
 燈籠を軒端にかけおきこれの奥の方にせきぬ磯之亟四邊を見まひすにやんごどなき人の館  
 ぞればにて翠簾をたれ薔をくだし金地の繪障子朱蘭干菊燈籠の火影はかすかなれどさやげき月  
 のさしいるゝに輝合てぞ見えたりける庭の景色もなべてならず遺水のなかれにうひて白き眞砂  
 らよらかにいろゝの卷石木の間の石燈籠のつからなる風情あり柴垣ひきゆひたるもどに女  
 郎花今をぞかりに咲乱てくちなまいろの露にまほれたるさま月の光にくまなく見えて誰巻粟の  
 いろにやと疑れぬればいよく貴族の別業ならめど思ひけるさるにても此年月しばく往來  
 するにかゝる館のありとだにしらざるこのいぶかしさ幼若の案内にてゆゑもなく此に入  
 長居せんばれそれあり賊なりなんどわやしたをうけざるうちにとく返らばやと思ひつゝ已に身  
 を起しけるとさやよまばしといまらせたまへと離かけて奥のかたより若やかにあてなる女の侍

女どればまきか出來りて近く居より君はまさき瑤島の何がしの殿にてはははさすやといふに  
 磯之丞驚きて見ゆれば女打笑ひ心せかれてあらまじをもきこはべらねばいふかしみ玉ふも理  
 なり君此あたりを折くゆきかよひ玉ふを妾が仕へまぬらする癖いつのやどに垣間見玉ひて  
 夜盡となく戀しくおるまわづらひ玉ふ事のやるかたなさに折もあらば人傳ならてきこはまるら  
 せんと思ふにかひありて今宵女童かはからずも伴ひまゐらせしは出雲の神の結びたまひけん  
 にしなるらめせめて一夜なりども姫の心を慰めたまひてよこれはよしある人の果なるが世を以  
 とふゆゑありてあからさまに名をわかさねと後くは此のつから知玉ふべきときのあるべしと  
 いふに磯之丞はかく最婿たる所に片時もとまらざるへきにあらざりどく歸らばやと思ふ心の煩なれ  
 ば僕がこども賤身をさばかり深くはまたまはる御志をいなみ申すこれそれわれと今宵のさり  
 がたき事のはべれはよく歸去給はれかし又の日参りておん志に報ひいべしと云捨て立んせし  
 折しも彼方の翠簾の裏より錦の頸線と結直紅の組紐をつけたる猫くびたまにつけたる鈴を以鳴  
 くとならしつ、走り來て磯之丞が袴のもすそをくへて引とむ時小又侍女どははしき女兩  
 人出來て翠簾を捲上たるに凡帳のかげよりりかやくばかりに美麗姫の前の女童つれてしつ  
 やかに歩出振袖を口にくいへてもものいひたけなれどつかしぎにし、まはくさまる也磯之丞の  
 これを熱見るに年のころはひ二八ばかりとあはしく山吹色の濃に遺水に蜻蛉の飛かふさまを  
 摺箔にしたる袷衣を着て白地の錦の帯を結ひ髪飾の飾衣裳の好み總今様にあらず古代めきたる打  
 拵なれど其容の艶麗たるは世に又類あるべまどもねばはらず巫女廟の花は夢の裏に殘れるがごと  
 く昭君村の柳も雨の外に疎なるに似たり磯之丞かねて物かたき氣質なればいかなる美人を  
 見るとも心をどいむへき者にはあらねど怪哉此姫を見るもひとしく身上冷るばかりにればえ



てかゝる美人も世にあるものかど能もひつゝ魂飛心うかれてみづからをさへどゝむる思ひな  
くこしちまぎひて現心もなくなりけるに侍女等姫にむかひ日來こひまどればしたまひ之殿の  
とからずも來りたまひぬさぞなうれしみおぼすらめといへば姫之喜びの色外皆おわれ少し  
はぢらひ玉ふけはひ秋霧にかすみて見ゆる月影の風情あり磯之丞は益心まぎひ前後を顧るも  
もんばかりを忘れて返るべき念をうしなひけるに侍婢等其けいひを見て奥の間ふいさなひけれ  
ば女の童黒糊になそへたる美酒嘉肴をいこびしばし盃をめぐらしけるが侍女いへるは誰はかく  
ひろけれどもゆるありて世をしのびたまふ御身なれば我輩の外にかしづきまゐらす者なしさ  
れば心をあきたまはずゆるく明したまへといひつゝ心して皆退き出ければ姫のとぢらひなが  
ら磯之丞が手を携て閨房に伴にそうだきの薫るならす螺鈿をちりばめたる二階の厨子に置きな  
らべたる文盤香器草紙物語繪文車貝桶のたぐひすべてみな古代の物にして世に似すいと見  
ゆれば張文正が遊仙窟の趣を目下に見るこちとして人間の外に到れるかといふかしむばかりな  
り時に姫顔あかめつゝ今宵かく逢まゐらすことは實に思ひまうけざる事にて夢現ともわか  
たくこそいへ月の下にて神々の結ひたまひし糸薄顔風はあらくとも葉に乾く露をふりすて  
しかならずかへり玉ふなどさこもれば磯之丞さるにても君いつれの時いつれの所にて我を見し  
り玉ひしやと尋ぬれば姫うち笑ひ君は實に知り玉ふまじいつぞや侍女等にすゝめられて岩清水  
にまふてし折から放生川の邊にて偶君を見まゐらせてより戀の重荷を負そめて露忘るゝひまも  
なくしたふ心は深草の獨伏見の鶉ならてなかね日もなくこがれまゐらせしを哀ども見玉へとい  
へば磯之丞とひとしはわりなくははて秋の夜の長さも今宵之短きこちしてどもに臥とすれ  
ば八聲の鳥お打れどろかされて起あがれば姫は深く別れをねしみ妾は世をしのぶ身おしおれは

山本の神ならねども晝ははかりあり夜はいつとでも苦しからねばまたも通ひ玉はれかし  
ひつゝ名残れしげに送りつれば磯之丞の夜のわけはてぬうちにといそきて山崎の住家に歸り  
昨夜之師のもとにて物語に思はず夜をふかき彼所に一宿をたりと弓助にはいひたきぬかくて磯  
之丞家に歸りても其面影の忘れず夢かと思へば移り香は身にと、より睦語は耳に残り其人の  
今も身にそうこしちしてどかくしたはしければ其次の夜も弓助には師のもとへ去といつはりて  
彼所にもき終夜ちぎりけるがこれより暮にゆき曉に歸り七日ばかりの間連夜彼所にゆきて一夜  
も家にゐることなく已にして七月のすへに到りぬ弓助が思ふやうは日來物がたき御方なれどさ  
すが獨寝のさとしさに傾城白拍子なやに通ひ玉ふにこそあるらめと始のはどは思ひれりしが頃  
日のふるまひようづ現なき体なればひたすらいふかりて一夜磯之丞がゆくわとみ見隠につさ  
て彼所ふいたりつゞきて門内に入けるに誰とがむる者もなく寂莫として物音なし磯之丞は奥の  
方に入けるにぞ柴垣のひまより窺見るに館の体儲之丞が目に見ゆる所とは大に變り軒端かたふ  
き柱傾翠簾破れ赫くづれ壁ち床脇て葛葛はひまどひ菴生茂り庭のさまもあれたり儘にわれ  
て遺水は落葉にうづもれ石燈籠は草深き裏にたふれて苦むしぬ唯女郎花の盛なるのみ詠めある  
様なり軒端に牡丹の燈籠をかけたる座敷に菰席しきて灯臺のもとに磯之丞一具の骸骨によりそ  
ひて居たり其傍邊に三つの骸骨あり又ちいさき婢子人のごとくに團扇を把て磯之丞をあふぎ居  
たり儀之巫何やらんものいへば骸骨手足うごき體骸うなづきて口とればしき所よりこゑひゞき  
いて、物語す菓子櫛の物を華飾に盛遣の飯とればしきを薪まき折敷に盛又は銅の佛器に水をた  
へへ櫛の葉をそへたるなごをたきならべてかたはらの三つの骸骨磯之丞をもてなき様にて起居  
まですべて生る人のごとくにはたさぬ月助は此体を見て扱こそと大に驚きなほよく見とゞけ



はやと思ひつゝ身としのびて居たりける磯之丞はかゝる事とて路しらす佛器の水の盥洗の的  
こゝち志道の飯も美味なる肴と思ひつゝ一向入奥の様子にて扇もて膝を打拍子とりて

野草花をたびて蜀錦をつらね桂林雨をばらつて松風をまらぶ

どうとひ餘念なき体にて居たりけりかゝる折々も彼牡丹灯籠の燈火の光をまたひて蝶三ツ四ツ  
築り灯籠のほゞりを飛めぐりて眞の牡丹に戯るが如くなりけるにやかて手飼の猫走來りて柱に  
かけのぼり蝶をめぐりて狂けるか忽冷風と吹かれて灯籠の火を消ければ蝶もいづくに  
か飛去猫も走りて退ぬ時に三人の侍女共これを見て驚きたるさまにておなふくや此方を窺ふ者  
ありとればへいといへば姫は打しをれて涙をいらくど落し磯之丞に對ひてはひけるは今夜と  
ささることはべれば君をこゝに宿しませぬことなりがた名残はをしくいへともどく歸り  
たまはれかしといふにぞ磯之丞の侍女等がいひつることばは耳にどゞまらず姫のかくは心  
變やあらんと思ひかへて大に不興志願立顔にあつてり刀していとまをせだにせず走り出ける  
が跡には姫をはじめ皆同音に口を叫びて倒伏ぬ磯之丞はさある事もしらすさても人の心と變  
やすきものよどうち恨つと歸路を急ぎければ弓助も其跡につゞきて家に歸りぬ折磯之丞歸りて  
も心をす胸の火をもやし居たるに弓助をばちかくすみていひけるは頃日の御行跡現なき跡  
にたはずのとならず御姿瘦細たまふやうに見ゆれば最怪く存今夜たれん跡をまたひまありて  
見つるに箇様々々の跡にいどたのれが見たる所をつぶさにつげて全く妖怪の所爲に疑ひなく  
といへば磯之丞これを知りてとて夢の醒たるこゝちまた大に驚き借の我狐狸野猫の爲にまよ  
はされしかさもあらざんば冥府の鬼に會せまならんといひて彼所にゆきそ免たる始終をくとし  
く語りけるに弓助これをき、彼所いづくとればまほぞとたづぬれば我はいづくともわかまへ

ずたゆかばやと思ふ心さへ起れば自然足かむひて彼所お到しといふにぞ弓助は益怪み彼所を  
志水といふ所にていどいへば扱の左様にありけるか何にもあれ明朝汝とともて彼所ゆき妖怪  
の原を標るべし我此儘にくづをれなばつひには一命を奪るべしみづから志を猛く去て妖に勝  
にしくべからずといひて其夜は且打伏けるにしばしありて磯之丞が枕上に立たる屏風をさらり  
とあくる音のしけるにぞ目をひらきて見るに消か、りてくらき燈臺のかけに立たるは正しく彼  
姫なり磯之丞は心の裏に妖怪みづから此お來るこそ幸ひなれ只一打と思ひつゝ刀をとり鏢元を  
くつろげてうかひひ居たるは煙いとくその心を知けるにや涙を流のこどくにたどしつゝいひけ  
るはさばかり怪みねほし玉ふも理なり今とつゞます我身の上を詳に語りやさばやと思ひはべ  
りてこゝまでまゐりぬなり其言とすすの妻は磯之丞に在しときはねん身の妻なりねん身は前生にて  
妾が夫なり人皇五十一代平城天皇の御時に小野頼風といひし人は則ねん身の前生にて女郎花と  
いひし女は妾が事なり妾御身の妻となり京に住て夫婦なかつましく運そひけるにねん身蕪と  
いふ嬖女を召仕玉ひ其女妾を憎みてさまぐ磯言をきこはしゆゑにねん身妾をうとみ玉ひて  
志水なる別業に押籠給ひ唯三人の侍女のみをつけね玉ひて音信たにしたまはずつひに蕪を本  
妻となしたまふ妾其事を聞てねたさうらめしさにたへず放生川のすゑに身をなげて死しをはん  
ぬ然にねん身やうし蕪か謠言をきこはしことを曉知たまひ耻はして妾が非命に死したるを  
憐たまひ兎角して妾がむなしさ言を索出したまひて一ツの塚につき籠たまひ蕪をば退退たま  
ひぬ其の年の秋妾が塚より一本の草を生じて花咲たり妾身を沈し時茶碗かさねの衣を脱してた  
るが朽て此草となりしゆゑに其花黄に開ぬ世の人やさしき花なりとてこれを女郎花とよびぬこ  
れ妾が閻浮を懸しくれも玉魂魄此草に還着して生出しなりねん身妾をゆかしくおぼし塚おせう



べく彼花のもとによりたまひけるに妾が恨花に残りよりそひ玉へば靡のさ立退たまへばもとの  
 こどくたのづから恨む風情をなしけるにぞれん身なほ衰れさを思ひどり玉ひむさんやな我ゆゑ  
 によしなき水の泡ときえていたづらなる身となりしもひとへに我科ぞかししがし浮世に住ぬま  
 でどあきらめたまひねなじ道にならんとればしどりつひに放生川に飛りてむなしくなり玉  
 ひしをどりわけてともに土中に籠しより妾が塚を女塚といひねん身の塚を男塚といひ男山とい  
 ふ名もれこり彼川を涙川ともいひそめしなり此によりて胃之も男山の昔を思ひて女郎花の一時  
 をくねると背し水莖のあどの世までもなつかしく邪淫の悪鬼は身を背て其念力の道もさかし  
 劍の山の上に戀しき御身の姿見ゆれば嬉しやと思ひつゝゆきのぼれば劍は身を通し盤石は骨を  
 砕き語るさへなほねそろしき劍の枝のたはむまで罪のれもさはかぎりなく種々の呵責をうけた  
 ること今思へば已に數百年にねよべども地獄中にありて之わづかに十年ばかりのこゝちせり近  
 來やうく閻魔王の赦をうけて娑婆に往來することを得たれば孟蘭盆の時を幸に妾を現してあ  
 ひまゐらせ年來の執著の念を露ばかりはらしぬ然る小宵の程我くが本体を他の人に見られし  
 ゆゑにもはやあひまゐらす事なりがたし三人の侍女等は妾が身を投しとき悲きあまりに諸共  
 に入水して其魂魄今あてて妾に仕へん也女童は妾が世にゐるとききめてたりし婢子の精にてはべ  
 り酒肴どなしてすゝめまゐらせたるの志水の正法寺に於て妾が體にそなへたる手向の水運の飯  
 のたぐひにてすべて清き物なり穢れたる物となればし給ひを牡丹燈も彼寺より塚にかけ給はん  
 物なり我くが本体をうたがふ人ありしゆゑに冥途の風吹來りて灯水を消ぬ又御身と妾が前々  
 生はねん身は牝猫妾は牡猫にて共に攝州天王寺の僧坊に養れしがねん身は常お経藏を讀て經卷  
 を食ふ風を制したまひまにより死後其像を刻て山門の關間にねく猫の門といふは是なり其功德

によりて人間に生をかへ男子となり頼風と生れ給ふ妾は常に俗家に往來えて魚肉を食佛具を穢  
 せし罪によりて女となり女郎花と生れて非業に死ななかく苦惱をうけ給佛は更なり再人間に  
 をら生るゝ事を得ずねん身も非命お死し給へども前々生の宿果によりて再人間に生れ出給ひし  
 なりさりながら妾も已に罪障を滅し時到りて地獄を脱れ近きうち再女と生れて娑婆に出ばへ  
 るなりこれ御身と二世の縁ありて又夫婦となるへき宿因あるゆゑなり其とき證の爲にこれを  
 せむらすといひて具合の貝のかたえを興へ此貝のかたしき掌を裏て握て生れたる者の妾が再生  
 とねりしたまへと告をはりて去と思ひまが八聲の雞にねどろかされて睡を醒す枕上に彼貝のか  
 たしあるを見れば是正妻なり貝をとりわけてつらく見るに其の繪機眞に古代の物なり偕は我  
 前生は小野頼風にて彼は女郎花姫の靈魂にてありけるか平城天皇の御時といへ今長祿の時に  
 以たり數百年を経て轉着の念滅せざるは凡慮のねよばざる所なり再生して我妻となるといひし  
 もたがふべからず奇異の思ひをなし彼貝を取をさめ弓助も睡を醒して起來にければ个様々々と  
 悉く語り申從二人志水の里に到て彼あたりを尋けるに弓助が目荒たる館と見えしも正法寺の  
 二味堂にて此邊をべて女郎花生茂りて他の草をまじへず少し奥の方に苔むしたる百輪の塔二ツ  
 あり覆の柱は牡丹の灯笼をかけたり礎之匝これを見て正にこれなり數百年を経て自己前生の我  
 塚を見る事相漢其例を聞ざる事之我身の上と思ひて昔を思ひやればるるに悲しくればゆるぞ  
 といひて涙をこぼさず弓助に示しけるは源順女郎花を詠する句を花の色は蒸る粟のごとく俗呼  
 で女郎とすといへるより後の歌にも玉だれのこすのねはの、女郎若誰粟の色に咲らんなどよ  
 めり漢名を取替といふ本草綱目に載る所蘇恭が説は花黄なりといふ時珍が説は花白しといへり  
 花の白さをば俗男倍芝といふ之樂天の詩に木蘭曾作女郎來といふ句あれば漢土には木蘭花



をも女郎花といふ又靈鬼志に何文は漢の人也一女子あり容顔美卒死す葬して明日其塚を見れば盡く菊花となる故に菊花文と名づく亦女郎花と名づくとあれば菊をも女の花と謂する是此女郎花塚の物語と和漢相似たる故事とはかねて思ひ居しが我身の上に管る事と更に思ひよらざるんとて生死流轉の理凡慮の外なる事を感じて家に歸りけるなりしも國元より飛脚到來して父豹太夫が書狀を呈す磯之亟これを読んで此度名和の館に召出されたる事の始終を委しく記し夫らにつき汝をもれん目見えいたさすべきあひたどく歸國をべしと誓たれば磯之亟は更なり月助もいとよろこび俄に家財をとりあさめて翌日發足し磯之亟弓助飛脚の者をもて三人伯州さして急ぎ歸りぬ借も玉島豹太夫の才徳の秀たるにより名和の館に召出されて高祿をたまはり召仕の男女も多くなりて自づから家内にぎはしく暮けるが磯之亟弓助を具して歸國しけるに豹太夫夫婦大によろこび頼て此よしを主君長知にきこゆるに早速磯之亟を面前に召いだされて益を賜り是より彼を遣仕の者にくいへてぞつかこれけるかくて後は物語べきこともなく打過光陰移りて翌年の春の比に到けるが此時足利義政公東山の銀閣に於て古器名畫を集これに展覧したまふべき御備あるにより兼て聞及び玉ひぬる名和の家へ召こる名器浮牡丹の香爐を急ぎ都にのすすべし展覧すみなば速にかへしつかはすべきよしの嚴命をぞくだされける抑浮牡丹の香爐といふもの世に類多しといへども名和の家には傳はるの庸常ならず往古後醍醐天皇名和又太郎長年にたまはるし物にて唐の玄宗皇帝楊貴妃に勅し五嶽の土を集て香爐を造らせみつから宸筆をくだして牡丹花を畫き其繪を摸さしめ青磁に燒せて楊貴妃に玉ふ貴妃これを東山の花清宮に於て常に愛玩せし物にて世も二ツなき寶器なり去程に長知はさある嚴命をかうふり彼香爐を都にのほすべき用意ありけるに義政公もて風流文雅を好ませたまふによりつき従ふ臣等も都是優

美の輩なれば鄙に育て田夫野人の知さ者等をつかはし都人の笑となりては家の耻辱なり殊に大事の使なれば竹馴たる者にあらざればつかはしがたしとねはず心あるにぞ此使者は豹太夫の外になしと定られ豹太夫を召て此事を命せられければ豹太夫謹てうけたまはり入事のれん使をねはせ付らるし事身の面目此上なしと御受申して退き急ぎ行装をどしへの門出を祝して盃をめぐらし香爐を受取箱のうへに錦のおほひして自首にかけ駕籠に乗供人數多召具して獲駕しけるにそ妻八雲の恙なく歸國し玉へといひて門送り磯之亟の弓助を具して二里ばかり送行酒店に立寄て再又祝酒を酌かとしけるが豹太夫が懐より香の煙のとき黒氣糸を繰出すやうに出て空中に消うせけるに磯之亟これを見て不思議に思ひ若懐に袖香爐などを入られしかと尋ぬれども左にあらすといふ素豹太夫が目にて見ゆることなかりければ怪とも思はず磯之亟倍々我眼かすみてかゝるものを見しかと思ひかへせと兎角氣にかゝりけるが旗立人に怪けを告るいかへつてよろしからずと思ひ心一ツにをさめてつひに別をなし豹太夫は容路に赴き磯之亟の弓助ととも家に歸りぬ然に又大鳥嵯峨右衛門は出奔して後鳩八堂九郎兩人とも一所不住に月日をわくりけるが豹太夫が爲る山世を妨られたることを深く遺恨に思ひよき折を得て此仇を報もべしと心懸居たるが此度浮牡丹の香爐を携て都へのはると聞これよき時節なり彼奴を打て香爐を奪取ば十分の幸なりと思ひ鳩八堂九郎等とせしめし合せ伯州因州の堺田原峠といふ難所の茂林の裏に三人等かくれて豹太夫が打過るを今やと待居たり豹太夫とあはる危とのあるべとどい夢にだもしらす急ぎの旅なれば此日夜を籠て田原峠にさしかかりけるに待まうけたる嵯峨右衛門尻ひつからげ手銃を携て石の地蔵の肩にのほり豹太夫が乗物の提灯の光りにそれと見て現すまして火門蓋をされば手銃の筒先あやまたず撲的響て乗物に打あてけるに子供



人一同にこは何者の仕業ぞと騒立ける所へ鳩八堂九郎兩人等く走下り斬込其刀電光に抜合せたる若黨ども二太刀三太刀取去がいかに敵することあたふべき數箇手を負て奴僕橋夫もろとも秋の木葉の散るごとくむら／＼ばつと逃去を一人者かさしと鳩八堂九郎等ぞく跡を慕て追去ぬ嵯峨右衛門は彼等とどきは我手をくだすおれよばすと最前より地蔵の頭に尻かけて見物して居たりけるが仕すままたりと飛下り折しも風雲散て月のさらた氷の刃すらりと振る切先にて乗物の戸をひらき豹太夫が襟首掴めて引いたせば豹太夫は朱お染り刀の柄を握つめては居たれども肩のあたりを打貫れ即死をせざるばかりにて働くことわたとす嵯峨右衛門と見るより怒の牙を噛ならお苦まき息を吻どつきて借は汝が所業にてありけるか尋常の勝負いせず飛道具のだまし打昇怯至極のふるまひと罵れば嵯峨右衛門せいら笑汝とどきの雲雀骨掴ひしぐは安けれども若ひまいて供の奴原一人も打漏さば後日の害と深き思案の飛道具遺恨の筒先思ひしつたるか香爐も此方へ渡すべしと奪取て懐中し泥足にて面上を踏つけ／＼踏にしり口惜いか死念なるか夜に入て往來稀なる此難所これから汝を一寸試のなぶり斬苦痛をさする覺悟せよと胸ぐらとつて引起し且片腕を斬をとさんと己に刀を振上たるに豹太夫背後さまに手探して駕籠の裏なる白木の箱をとつて嵯峨右衛門に打付たるに箱の裏より數多の蛇出て嵯峨右衛門が懐に入取て手足に纏繞けるにぞあつと叫ひ氣絶して地上に撲倒れたり豹太夫やう／＼刀を抜て嵯峨右衛門がうへにまたあり咽を刺捕とまたる所に鳩八堂九郎立戻て此体を見るより双方より豹太夫を一刀つ、斬ければ豹太夫力およばすのけさまお倒れたり鳩八立寄てど、先の刀をさしんどまたるおしも前面の方より提灯ともさせ早馬にて馳來る者ありけるにそ見付られてい一火事といそかはしく嵯峨右衛門を肩にひつかけ三人ともに行方しれずなりにけり扱も磯之亟の

家に歸りても彼黒氣を見たること兎角心に懸り弓助にどへば彼も見たるといふ殊更頼に忿悻しくされば父の身のうへか氣づかぬしてせめて今夜の宿まで追ゆき終夜つさそひと櫛子を試見ばやと思ひ早馬にて跡を慕ひて此所に来り且乗物を見つけて大に驚き馬より下り弓助に提灯てらさせ四邊を見るに豹太夫の地上に倒れて居けるにそ大に仰天し引起して見れば朱に染りて深手を負たる櫛子なり胸に手をあてし見るに少々の温みありければ急ぎまごひて印籠の醒酒を取出し馬杓に清水を汲薬とともく口の裏にそしき入て弓助もろとも介抱し耳に口あて頻に呼醒まけるに親子一世の名残とて死目にゆふべき因縁にや息吹かへえて目をひらき伺儀之亟とやよき所へきたりまそ敵の大鳥嵯峨右衛門助太刀は鳩八堂九郎兩人なり我嘗て彼遺恨をふくみ若旅中に於て我を襲もはかられずと思ひ彼が爲に一ひきの小蛇は十騎廿騎の伏勢にまされりと思ひしゆえ箱の裏に數多の蛇を餌養して携しが飛道具の忍打せんとは思ひよらす言語に絶たる身法者大切の香爐も彼が爲に奪はれぬいひ残したきこと數多あれぞ苦しうていはれぬとこれを此世の名残にて諸行无常の夜嵐に溢れてもろき草の露峯の猿も鳴そえて寂滅爲樂の別霜消てはかなくなりけり時に怪や豹太夫が懐より一道の黒氣煙のごとくむら／＼と立上りて空中に消失ぬ是乃災の神畫妖に誘れ兩道の烟あつきて豹太夫と嵯峨右衛門にのりうつり且豹太夫に災して一道の妖氣去けるなり嵯峨右衛門につきたる災の神は如何なる事をかならずらん後／＼の巻を讀得て知べきなり此時磯之丞彼妖氣を見て登見し黒氣果して凶事の前表にてありまと思ひつ、死骸おひまるとりつきて悲嘆の涙にむせかへりぬ弓助も側に泣伏て居たりまか何思ひけん勢てんで逃出来けるにぞ磯之丞聲をかけやれまて弓助汝は何方へゆくぞといこれて立戻り嵯峨右衛門が跡を追かけて捕ん爲にと答ればすりや其方い彼が行方を知て走るか知ねば何方とあてもな



し卿手にわかる此山跡めてなく追ひ死ななり狼狽所にあらず山中といひ夜中といひ猛獸の愁  
 おれの遺骸を片時も愛にたがたし我のしばらく此にありて護べければ汝の急ぎ籠に下り人を  
 雇て来るべしといふふぞげに理と疎忽を恥て籠に下りや、あつて二人の農夫を雇明松を把しめ  
 て来りぬれば磯之重弓助もろとも屍を抱き去りて乗物に乘しめこれを二人の雇人に搥せ磯之重の  
 馬上にて籠に下り村長をたのみて乗物をあづけ籠に守に附おき籠のれは馬を馳て夜道に  
 歸り此よしを委しく籠に告さこえけるに長知香爐を奪れしと聞く大に驚早速かゝる事に係る  
 家士等をつかはして豹太夫が屍を見せしむるにいかにも飛道具にて打れし休なりとせは其屍  
 は彼が家に送て葬をさせけるに妻八雲のいふも更なり長知の内室に仕る娘八重垣が嘆きしる  
 し盡すべうもあらず諸長知別に使者を以て香爐を奪れたる事を足利家へ通さけるに義政公是を  
 きこしめされ寶を惜と御疑ありて御不興のよしなれば長知甚心を苦しめ急ぎ家士等に命じて四  
 方に走らせ嵯峨右衛門が行方を嚴たづねさせ豹太夫が不慮の横死跡に残れる妻子等も不便とは  
 思ひながらやむことをえず彼等と召呼足利家への分説なければ汝等を其儘にさし置きがたしと  
 て豹太夫が田地家財を没収し八雲磯之重八重垣等母子三人をあほうとらひにせられけるこれ  
 によりて召仕れし男女は都て籠のれくが所縁に歸り唯弓助一人何方迄も附從ければ主従  
 四人伴馴たる故郷の雲を背後になし行方もしれぬ客路の霧を眼前に見て籠のく袖を絞つ、出  
 行ぬ豹太夫が打れしとき逃散たる從者等は鳩八堂九郎に斬れて死し此所彼所より屍の出たるも  
 あり或は行方知ざるもありけるとす

第四回 運印銀號 上回

斯て八雲磯之重等の何所とて身をよすべし所もなく殊更八雲は此時懐胎にてありければ長旅路

おあらん事氣づかはしく前に召仕たる水卿といふ婢女故郷丹後國に歸今は夫を持てくらすよし  
 折く音信をいたまければ是を便に且丹後國とてころざして去に歩なれざる女の足のはかざら  
 ねば日數経てやうくゆきつきけるが水草が夫の名の與三といふ事と其住所成相の觀音道とい  
 ふことと兼て聞しかが村の名を知らざる事のあるべしと思はねばさ、盡してもたかぬ後悔  
 さよと思ひつゝ成相の觀音近きあたりにて水草といふ若き妻持たる與三といふものとて尋けれ  
 るも同もの徳人もありとてしれがたく殆尋他て此彼をさたよひ何の所にやあらん一つの  
 土橋を越て四五町去に酒食を賣家のありければ飢に臨たる折節これ幸と立寄て四人同く門口に  
 並たる竟に尻かけて休ひ飯もどめて打喫つゝ四方を顧に項しも彌生の初めなれば桃櫻咲交  
 て風に音する松が枝にかしれる藤と瑤琴にかざる紐かと疑れ垣に結こむ山吹の枝もたのしに咲  
 散れていと詠あるさまなれど心に愁れなければくちなしにして不言目もどめずして居たりけ  
 りしかるに前面の垂柳の下に牛を俵をさたるに糸車陶甕鶏卵干大根袋茶生魚など荷駄に結附  
 たるうちにいろくの小裂をみつめて見事に纏たる袋を結さけて置きけるを八雲齒木つかひつ  
 し何の心もなく見居たるに其袋の裂のうちには豹太夫が家の絞つきたる熨斗目の裂の縫交てある  
 にぞ目をどめめてよく見れば其外にも見覺の裂ありて前方水卿に與へたる裂もなればさては  
 ど心づき酒屋の老女にむかひ彼所に慣たる牛の主の名は何とかいふと問けるにたまたる様して  
 與三後家の半なりと言ければ扱こそと喜び其人は何方へ行しぞと再問ける折去も一個の女田舎  
 染の布子の裔を高かきげ脛巾草を結髪は油氣もなく朱途の木樺欵みていと鄙びたると言な  
 るか前面の綱すたの家よりを出来る熱見れば面の色はくろみたれを疑もなき水卿なれば八雲は  
 冥途にて佛にあひゆるこしちし飛立橋にして水草なつかしやといへば水卿は此方の四人を見て



をはいにふかしむさまにて腰屈つしこは思ひかけざる事かな伊勢の旅にしては物としのぬ  
 伊打粉氣づかどまよといへば八雲は涙を前にたとして是はつもる物語あれど此でと委しく語  
 りがたしそちが住處を尋ねたるにはからす此で出會しは我くが幸なりといふ磯之丞いひける  
 は前不と母人にたくれ彼處の土橋の上にて草鞋の紐をしめなほすとて誤て取落て牛の角あか  
 りしを取て與へまど今思へばそちなり手巾にて顔つゝもたれば露ばかりも心つかずといへば水  
 草いかにもさわり笠深くかづき給ひしゆゑに妾も殿とは思ひはべらずおくれに此に参りしな  
 妾が住家いこれより一里ばかりへたちて與謝の海近き磯屑村と申す處にいざく伊出いへか  
 しとて弓助が持たる荷物を牛に附て其上に八雲を乗し先ければ弓助は飯の價をつくのひ身輕に  
 なりて便よしとて八重垣を背負磯之丞もろども水草が案内につきて彼が住家へ急ぎ行ぬかくて  
 其所に到る名にたへる海橋立與謝海眺望無双の濱邊なれども人里遠き荒家の垣間まはらに軒  
 傾て時雨も月もさこそ漏らめと思はれけり水草の家内の座を打拂四人をむかひ入て且八雲に  
 對ひ御物語をとく聞せ玉へと氣をせければ八雲は涙を潜然と落しつゝ道すがら物語んも人の聞ん  
 とをれそれと云すとて石生團七か事より起て豹太夫嵯峨右衛門と果死あひにおよびたる事を始  
 とし嵯峨右衛門豹太夫を欺打にして浮牡丹の香爐を奪其越度によりて母子三人わやうばらひに  
 なりま終りまで委く語り我身懐胎の事をも語りくそちを便に尋來まといへば水草は是を聞  
 て且驚き且悲しみ涙にくれてしばし返答もせざりしがやゝありて目を押拭御主人さまの不慮の  
 御最期殊更御家を失ひ玉ふ御災難申しわぐべし伺もなき妾が身にもさましくに愁る事のありし  
 ゆゑひさしく安否もうかゞとす心の外に哀れぬ及は畑作と申す百姓にて少しの田地を持つるが  
 妾が爲に腹がはりの兄泥六と申すもの類なき悪漢にて邪非道のこといたし屢親に難儀を負せ其

王父にかくして田地を獲らず賣代なし故父怒て御當いたし今之何方に居やらん行方さへ知が  
 たし其後父母打續て無人の數に入跡とる者のあらざれば位牌所を失ふに忍びず御暇願ひて古郷  
 にかへり里人の媒にて漁士の與三と申す者を婿にとり夫婦世渡を助合て打過ぬ委さ事を申上る  
 は今が初戀るに夫も又去年の冬病によりて身まかり今は婦の佗暮機機の手業にて朝夕立る煙  
 さへ細き本錢の糸車まはり兼たる所帯にて藻鹽草ならては敷物もなく磯菜より外は准すべき物  
 もはへらぬ貧家なれど御遠慮ないがせめての幸ひ御主人様の落目際御厚恩を露程も報申すの  
 する時如何様にしてなりと申すかかまひ申すへしと眞實詞にあらはれていとたのもしく見えける  
 此ぞ四人の者之安堵して打寛きければ水草亦いひけるは前方御奉公いたせしとき武家に仕へを  
 する者は女ながらも少しは武藝を嗜てこそぞ存せしゆゑ御奉公のひまうゝに團七さの、教を乞  
 太刀合柔術一手つゝ少學びたさしが今用立獨住の女とて侮れぬは其陰またかの牛は父畑作が  
 子飼の時より不便をかけてひさしくつかひし牛ゆゑに今は不用の物なれとも父の遺物と思ひ  
 べりて今に養肥さひとはす語も底意なき響應ふりの間話幸ひ竹葉も一陶有合せたる菘菜卵  
 所がらなる丹後鯛何となしとも首尾をつけて祀祝ひ申すべしとてかひくしく立たらさ酒食  
 を調して出むけりどきに磯之丞偶釣佛壇の裏を見れば錆たる鎌と魚網をそなへ香華手向てあり  
 けるにぞこは何故と尋れば水草いひけるは訝玉ふとうべぞかしあの鎌は亡父畑作が手馴し物丸  
 夏の天も畑打腰に焼鎌の暑を忘れ立冬の且も氷る手鎌に葦刈の寒さいとどね營の辛苦を経たる  
 遺留物又一品は夫與三が憂世渡の漁具なり女に似合ぬ葉なれど妾も又綱打ならひ共に世過を助  
 しが明暮殺す鱒魚の數を盡して身一ツをたすくる事のつたなさよと思ひいべりて夫身まかりて  
 後の淺間敷營を止殺生の罪科も油士焼火と消失て黒繩地獄の網の目を脱れて佛果を得よかしと



夫の爲み罪はるはし我身の爲み悔のしるしかく二品をそなへらるて朝夕手向る香花も父と  
 夫に仕る意女の愚痴の耻やといへば四人の者はこれを聞其志の殊勝さを感嘆して覺えず涙  
 をふとしけりて四人の者と此日を始としてしばらく此家にとまりけるが海士のたぐ漢の  
 夕煙身をあぐべきにあらねども住ば所による浪の音かしましき海邊にて松蔭の風蘆花の月時に  
 あらねも思ひやる耳にふるしも目に見るもなれぬ住居の鬱鬱さを忍びてあくる月日良世に出る  
 時を待貝に常世の濱と思ふ子を水松かこゆき鹽瀧彌生も過て人間の四月も爰は濱風の寒さをか  
 こふ薦屏風折燒草の終夜臥詫ぬればれのづから過來し方の悲しさを忘るゝひまも波ならで干時  
 もなき海士衣身の秋いつどかさらねば藪に住虫の我からと音をのみ鳴わかしつ、只水草が誠心  
 を盡してまめやかに仕ると沖漕舟の楫とにもひて憂日と爰に過しけり扱一日八雲磯之丞を近づ  
 けていひけるは君父の誓には共に天を戴すといふ語いはでも定て知つらんいたづらに日をたぐ  
 るべきにわらず磯岨右衛門が行方香爐の有所居ながら知べきいはれなしとくく旅路に出立せ  
 よといふに磯之丞命うべなり父母の誓居ること誓に棄子を枕とし不仕とせは一日も安閑と  
 喜す心はなくいへども御懐胎の御身を氣つかひ兎角出かねいといへば八雲いはく我身に八重垣  
 つき從居うへに水草は男まさりの女なれば何事ありとも氣つかひなき我若か、る身にわらずば  
 共に旅路に立出て女ながらも磯岨右衛門と一太刀恨みて亡夫の靈に手向たく思へども折わえく  
 たゝならぬ身なればししか思ふかひはなし急ぎ旅の用意せよといへば弓助傍ありて磯之丞にむ  
 かひ君は京にたはして磯岨右衛門見知り玉ふまと拙者は御國元へ使の折く彼が面をよく見知  
 り鳩八堂九郎等兩人も見覺えあればいづくまでもれん供して御本望をとげさせまゐらすべしと  
 いふ磯之丞いはく我も幸にして國元へ中飯せしとき彼等三人をよく見れば味えられぬといへば八

雲又いはく弓助を供に運ゆかは我も大に安堵なり此度旅に赴かば母ありども勢ありとも思ふべ  
 ろらず我等に心ひかされなはれのづから氣れくれすべし唯誓を復して靈魂を慰し香爐を侍て家  
 再興こそ肝要なれ我身の上を心にかけ事をも遂す半途より若も飯らは其時と勘當なるそしか思  
 へともひて志を勵すれば磯之丞いはくいぢくかこみうけ玉りひかならずれん心を惱し給  
 ふことなけれその御教訓が我爲の鐵腹卷壁手膺精忠といふ字を兜蓋となし孝といふ字を戟とな  
 またとへ敵 鐵城に籠石門にかくる、ども一念の誠を以てたづねいだま頼て首ひつ提て立飯り  
 父靈魂の恨をばらま母人の御心を安んずべしと誓をかたく握つめ勢をみていひければ八雲は喜  
 びいさぎよまゝさるいさましましきころさまにあらざれば本望と適しがたじさりながら旅に過  
 たる哀はなし況平いづくも當もなくいふ限りもまれぬ旅なればさぞ憂事のねはからめ深  
 山路を行暮て苦の越に露を敷遠き野原を分説て艸の枕に露を結ぶ煙りの簑に雨の笠塵はも腰巾  
 襪鞋想像へ憂物をす、めてゆかず母の氣を推置せよといひさまで面にればふ袖垣のひまよ  
 り漏る萩の露勇す詞ひさかへて涙もろさの女なり磯之丞は是と聞母の慈愛を感嘆し胸せまりて  
 不言只うつむきて居たりけり水草も傍にありて母上さま八重垣さまの御事はかならず氣づかひ  
 し玉ふな只御身恙なく御本望をとげ玉ひはやく御歸國ねがひ侍るといへば八重垣もともに詞を  
 そえけるに磯之丞いすでに心を決しつ、行装をと、のへけるが不慮に故郷を追れたれば時  
 も薄けれどこれを二ツにわかちて一分は水草あつづけて母の小づかひ眼とし一分はつづからの  
 路銀となきて携るふ八雲一腰の刀を出しそれの主君より約太夫のに賜し千手院力王の名作な  
 り父の遺物の魂なれば今より是を汝が差料としこれにて仇を報もべしこれまでの汝が差料の別  
 に携へて若路銀の懸たるとき賣代なしてつかへかまどて一腰をあたへければ磯之丞押助と



りをさめ扱吉日をえらび酒酌かゝりて門出を祝弓助を具えて後足支何所といふ當もなければ且都の方へ心ざまぬかくて後水草の鹽汲釜の手傳してわづかの代に身をつかへば頭を梳するひまもなく髪は薬屑とどり亂し夜は布織で寝ざれば糸より細く瘦枯て垢づく肌針目衣奈具里の井を汲ては衣を失ひて家路まよひま天乙女のこしちせられ八味山の柴を焚てハ蕪詫て哀をどいめし津志王の背を思ひ流しものとの碩礫も淺き鍋右折敷よろづに事の欠茶碗たらぬかちなる貧さを見せしむ紙袋葦の穂綿もほころびてつくろひかねま所帯なれど千辛万苦をいとぞすゑて二人を養ふ職心はやさましくも又哀なり八雲八重垣等とこれを見るにしのびす我くかくいたづらに暮してはかへつて退屈に思ふなれば徒然を慰る爲にどいひなして母子ともに糸をとり尋を續て少しも足になれかしと思へど仕馴ぬ業なればはかくしくもなかりけり一日八雲後方の錦壁押上て海面を見渡しつゝ

與謝海鹽に遠き月影のまたもどの江にすまざらめやと

ぬく跡じてみづから心を慰ぬかくて又まばらく月日をたくりけるに八雲とたゞならぬ身なるうへにさましく苦をつとけるもえにや病の床に臥て悩めれば八重垣水草諸共に枕方後方につきそひて終日終夜病に油断なく醫者をわらへて藥を乞療治に心を盡しけるが藥石の驗も見えずものもすまず瘦ほそりて日に異にれもむく病まさりつゝ怠りはつべうも見へざりけり

第一回 蓮印鈕 下回

雲程に入雲は病の床に日をたくりて己に秋の末にいたり開胎も程ちかくなるに八重垣は孝心深き者なれば母の病を愁るを限りなく晝夜傍をいなれず看病しけるが一日母の目睡たるひまに藥を煎じつゝ思ひけるはさらぬだに産は女子の命づくに聞に長き病に疲れ給ふ伊身にては伊産の

體もれば保つかなし少しもとやく快氣ありて平産をし給へかし左り孕は男子なるものと聞ばやどし給ふも必をのこ子にこそあらぬもしもなき身となり玉の我身はかかになるべきぞきづかぬまやど吐息まてれどす涙に埋火もきゆるばかりの思ひなる折しも病床にて聞の音まけれと袖に涙をぬし拭あな燃かぬる焼火かたといひ紛して隔の障子をひらきよほさ睡たまひまな氣持はいかにぞや藥をもちひいへといひて藥茶碗をさし出せば八雲と手とり今日はよき日にてしはし苦痛を忘れしゆゑはえす少し目睡つとひつゝ八重垣か顔をつくくうちまもれば辛苦面にあらこれに瘦ほそりたる休なれば不便のものやと思へどもそれと岩根の母子草子は親の爲親は子の爲に涙をかくまふ心のうちそあはれなる時に八重垣いひけるは御氣分よろよろこばしやとくく快氣なされかまね手冷へきに埋火を湯漬はいかにとしならしく愛の溢る髪かきなでつゝ背後にまはりて背中を撫てぞ居たりける扱水草は看病にかゝるとてひさましく世渡の藥をせざるうへに藥の價加持祈禱の施物など亦是病人の口になふ食物には價の高もいとねばれのづからよろづの費をほくなり磯之亟が歿したきたる小づかひ銀と更なりたのれが繼に時へし一ツ二ツの着かへ解分の衣までも皆米錢にかへなして機織本錢さへ失ひつれば今は家内あらへるがとく朝夕の烟も立かぬる困窮を病人に知せしむとつゝもこころの苦さは何にたどへんかたもなくせんすべなきに晝の間は八重垣にのみ看病をまかせたきて牛を牽いで成相の觀音詣する人或橋立遊覽の人などをのせて繼の賃錢をとり往反する二里三里時雨もよふす寒天にも汗を絞の手拭に頭をつゝむ梳子の朱塗も瓦て木地見ゆる標榜標の在所染續目に塵はつりても忠義に凝し志と砂の中の黄金かや藤木綿の下裏も巳の時過る晝飯時牛は劉氏が黒牡丹緑しも深き早咲の冬牡丹の一朶を牛の角に結付の我家に飯り牛を小屋につなきて身上の塵を打拂て



巾草鞋をききすてし近き流れに足とそそき彼一枝を器お指て携つ、病床をうかひ今日は時雨空の寒ゆるるにや往來も稀にひへはいつよりもとやう戻し御氣あひといかにやらんとたづねれば八雲いひけるい今日の氣持もよほよきゆゑ一睡して今醒ぬ日毎くの外稼さぞ草臥もはからん我くが薄命ゆゑに苦勞をさする不便やと濡かちなる詞なれば水草之態そのいらへはせずして打笑御氣分ようて喜ばしや今日は斯様くの旅人をのせて斯様くの可笑事ありしなご氣輕な話も病人を慰る爲なれご心の裏は涙なり又いひけるは此冬牡丹の一朶いまだ蕾にははべれごもれん慰にもなれかしと貰て戻りいどてさしいだせは八雲これをつらく見て珍き冬牡丹幽艶搭けるぞ幸今日は豹太夫ごの命日存生の時ことなふ花を好れしはそちも知つることこれぞよき手向物やよ八重垣これを父上の靈前にそなふべし又今月今日は磯之亟が誕生日親子生死を同日にせられしも宿世の因縁にこそあるらむといへば水草いはく妾も其事に心つきゆゑ御靈前のそなへ物磯之亟懐の陰曆今朝ほとより心ばかりにととのへてたさいといふに八雲は喜びて何から何まで心つかひ嬉しいそやといひて八重垣にしかぐせよといひつくれば八重垣はこれぞうけ玉り豹太夫が位牌を取出して西の方の壁際に皮籠はかりの經机綾子摸様の小服紗も昔の残る鹿子文字位牌をすねて香花を手向の供物早飯の食燈火盡の一滴も貧女の捨る身の油長者の家の万灯にもまさりて冥途を照すらん東の方の壁際に磯之亟が陰曆を水草が運ぶ赤の飯敵の首を鳥貝に首尾よく仕を打 鮑 鱧にさざり時到着され味のよき菜月の光りを鱧の供に武運をひらく花鱈寶再手に入て會替山にひるがへす故郷の袖の錦鯛鋼鍔尖き太刀の魚を尾頭つきし灸物も吉事をいへふ意にて酒肴まで取そへてぞすゑたりける彼力は精進手向の供物此方は魚類の祝儀祝義不祝義一ツ間に分てはれけき夫と子の現世の旅に死出の旅哀は同じ哀なり八雲

はこれを見やりつゝ貧中にととのふる心盡しの獻立の殊更に過分ぞやといひて手水乞て手をきよめ乱れし髪をかきあげて病の床に居ながらも武家の行儀を失とす身お舊衣を打かけて靈前にむかひ香を精水を手向てしばらく拜していひけるは夫の靈魂聞玉へ水草が厚き志のそなへ物富者の千僧佛もはほして昔の下にて御受くだされかしかねて兵學に通じ軍器の妙をさそめ玉ひ胸中に百千の兵をたくはへ玉ふ身なれごも欺打にせんすべなく飛道具の忍打鼻怯者の手にかゝりてわへなき最期をなし玉ひしはさぞ無念にありつらん頼て磯之丞敵の首を靈前に手向て修羅の宿恨をはらさせすべし最期の苦痛のうちにも磯之亟八重垣等が行すゑの事なごさぞ御心にかゝりしならんと其時を思ひやるぞいたはしくはえい又妾が身にれん遺留を宿しぬれごもかく長病に疲たる身にはべればごも安産はればごもなく磯之亟が吉左右を聞いまでせめてながらへたく夫を願いへごも彼今ににんて飯り中さるは定ていまだ敵の行方これざる故と思はれい妾ながらく此世にあるべしごもればへはべらねば覺悟をさばめて居りい腹に宿せま孩子も闇から闇の親子連夫の死路を慕ひ行迷べしごは思はねごも此世にあるさへ此様に愛事のかさなりて薄命なる我くなれハ冥途の苦患もさぞかしと思ひやられいと息もたゆげにいひさして悲嘆お袖をひたまければ傍につきさそう八重垣は冥途の父の戀しさと此世の母のたのみすくなき悲さおれつる涙は手お持し念珠の緒されて膝の上に珠を亂すがごとくなり水草もとも泣伏せむせふこねのみ聞へけるが八雲はやうく顔を上此一枝の牡丹は花の富貴を追福の爲にそなふる手向物や葉の蔭に受玉へ成等正覺願證菩提南無阿彌陀佛あみだぶつとなふれば八重垣水草も同音に六字となへて居たりけり扱八雲は回向を終て身をひねり此方にすへたる陰曆を見て涙をのぞひ笑顔をつくりていひけるは出世をねがふ若人の誕生日といひ殊に旅さき



をいばふ陰膳にむかひて泣顔と不吉なりやよ磯之巫網人の命日なれば魚類とす、むるは旅さるをいばふも父もこれをばゆるし給ふへきなればめでたく若をとりあげよ扱今に於て歸らざるは定て敵の行方知ざるもえならん今頃は何方いかなる所に居るやらん病ては居ぬか野宿なごはせざるや寒天にむかふといひ時薄き旅なればさす愛事のねはからめ旅疲もさぞかしと思ひやられて不便ぞや都見物参慰の旅でさへ子に旅さする人の親の苦のやすまらぬは常なるに況復誓の爲に出たる旅なればもしやかへり打にもあるべきかと思ひすとしがせらる、ぞや大望をいだく者ば第一に身を保が肝要を病日づろふてはたとへ敵に出會ても木望は達しがたし噓ていは、此冬牡丹の花雪霜に打れても其志さへはげますれば柔能剛を制するならひかくのごとくに蕾を生じて國色大香夏の牡丹に異ならず花王と人にねもんせらるれば汝も志をばげまして忠孝二ツを見にね、霜の剣もたちがたき鐵脚どもなりぬべき誓を復し寶物得て再家を興しなばそれを孝子の名取脚美名を後に懸すべと眼前に居る人にもものいふこととさ教訓は母の情の深見脚夜白色脚山橘の蕪もかしき詞なり再びいひけるは産月もほとちかく産を知死期と思ひ居ればもてや今生に於て對面いかなふまじ八重垣が事たのむぞやと祝心を忘れつ、ればぬず涙ばらくと陰膳の上に落か、りければ急ぎまきひて目を拭めてたいく玉櫛の八千代までそなたもわしもをたいたいとやと祝なほして彼方を見れば香の煙のはそくと櫛の枝の匂まで无常氣になるるなへ物頼て我身もあのことく白木の位牌にしろされて血の池の亡者となり水子を抱て泣ならぬ死る我身はいととねと跡に残りし子共等のさそや歎んかわいやと思へともえらくとと落る涙をにさへつ、此方を見ては笑顔をつくり彼方を見ては又涙泣つ笑ひつ狂氣のことく生別死別吉凶もくらくなりたる胸のやみこらへかねて泣倒れいと苦しげに見えければ八

重垣水草にそがひしく背を撫薬をあたへなとして介抱しけるに良ありて亦起上り牡丹の枝をとりあげていひける、磯之丞事浮牡丹の香爐をかくのことく手に入て飯るへきや若亦其身に災のあるべきや吉ならば此蕾のひらけか吉凶ならば此ま、に恭かし高野の山の万年草此八重垣は八封の黽亡夫の靈魂花神に通じて告しめ玉へと念じつ、陰膳にそへたる銚子を把蓄酒をそくきたるにあな不思議やはつとひらさし牡丹花の色香をそなへ露をよくみて動ひあれば喜ばしや嬉しやといひてやうやく愁ひの色をなほし眞の笑顔になりけるにぞ八重垣水草等もどもにこれを喜びぬ

○此後磯之丞旅中に於て危難をまぬかる、事ありこれ母の一念通て救ひたるに疑なし其前に花神先此吉兆をあらはしつるものなるべし磯之丞が危難の事後回の首頃にあり

備八雲はいと疲たればかの牡丹花をふたしび器に挿しめて鏡前にすゑにかせ屏風立まはえて打臥ぬ八重垣の香を盛かへ佛灯に油ろへ水草は陰膳をとりをさめなとして此日は別に物語るべき事なかりけりかくて又一日水草八重垣にむかひていひけるは母上さまはや來月の産月にていへば兎角氣づのはしく思ひとべれと藥の驗も見えざれば此うへは佛神の擁護をねがふより外はいまじ妾は今夜を始とて成相の觀音に夜參し通夜まで祈すべく思ひはべれば夜のうちは何とぞ其方様も看病ねがひいといへば八重垣はいく然ば妾も晝のあひだ彼觀音堂に籠てもろともに祈るべし晝をそなたひとりにて看病願むなりといへばそはよきればし先しなり晝夜二人にて祈願いたしはいみじいとけの憐もなほ深くいはんといひてこれより水艸は毎夜子の刻のころより家を出て曉に飯る事晝夜にて雨つよき夜も風あらし夜もゆかざる事なかりけり八重垣は日毎に朝飯する頃より家を出て夕に飯る事晝日なり然に八重垣が終日觀音堂に籠居といふは偽にて



毎日家を出たる始にまづ観音に参て祈念しそれより海松峠にゆき古編笠に顔をかくして破れ扇  
 を把布の袋を懐にして往來の人の袖にすり一錢二錢の情を乞ふ又此彼の村をありき人の門に  
 たちて米麥の類を乞受其錢は母の口になふべき物産發にもちある物などを乞むる料とな  
 し其米麥は夜中食する料となすこは母病に臥てより殊更に費ははくとなりて水脚が貧に苦むを見  
 るくしのびすせ先て露ばかりのたすけにもなれかしと思ふ心よりかゝる事を思ひつらぬるさ  
 れど水草あかくと語りてはどいむるは必定と思ひ母にもいはす深くかくしけるに母も水草も  
 此事をすこしも知事なかりけりかくて一日八重垣いつもの如く梅松峠に至けるが素生れつさ  
 美麗愛の溢る娘にて色香も深き窓の梅年は十五の初花も貧といふ字の古枯に人の落葉の秋の果  
 針目がちなる振袖の透し顔の霜の花氷に足をやぶられて流る血泣と散紅葉を踏かどくのは  
 りくだりの坂道をいくたびとなくゆきかへりて交加人につき長くの浪人に情の施しを腰  
 屈つといと怒げにいひて物を乞ふさま哀れなといふもあろか往來の人にもさまぐの心ありて袖  
 あすがるを願だにせず過るもわり或は後につくを穢はしきを丐し傍近く寄など叱つ去もわり  
 て憐憫の心ある者は稀なり縦に情ある者あふかわいや編笠をもる顔の蟬娟さを見れば賤  
 からざる娘なるに袖乞するはいかなるゆえを定てよしむる人の零幣を貧きに堪すかゝる業をば  
 なすならん不便さよといひて涙流し一錢二錢を與て通るもあり或はもの哀れをわさまへぬ聲は  
 これを見て彼がことき娘に袖乞する親めはよく因果のわしき奴彼が親め何者ならん武  
 士の浪人の娘と見ゆるが不忠不義をなして追放されたる祿盗人のたぐひなるか或は武闘者に  
 出會て耻辱をとりし腰抽武士などの果にや何にもわれをしき娘に袖乞する事よ醜態などに賣  
 げよき價になるべきにといへば連たる者のいひけるは左にはわらし彼が親めに痴病人か覺か

或いならぬ罪を犯して故郷を逃人目をしてのふ奴なるべしともなく親もともに出て物を乞す  
 べきいづなり娘にのみうきこととするたゞしはすぐれて邪見なる奴にや親こそ悪むべけれ娘  
 に科はあるべからず艶麗娘なるに一錢與へて去べしといひて懐に手を入るを一人が押とめ  
 ていなくやめよく娘に施しすれば親めが物になる道理ある奴にもわらは飢死させて罪は  
 ろぼさするがへつて慈悲どととも惡げにいひて果にと高くど打笑つ物くれぬうへにとづ  
 かしめて途過もわりけり八重垣と是等の事を聞て胸ふさがりかりにも親を嘗る口惜さよと牙  
 を噛涙を流して物を乞は是限にやもべしと思ひけるが水草が貧苦は我身にも遙にまさりて慈氣か  
 るべしと翻思てなは物を乞て居たりけるが未すぐるころより雨もよみの天になりけるにぞ人の  
 足早くなりて物もらふともなかりければかくては母にまゐらすべきものとのへがたし今日の  
 むなし素手振て踊る事かど打しはれて儲興けるに思ひかけす情深き人ありて錢二串米一升を  
 與へければ嬉しき限りなく母にすむべき物をえらみどくのへて携これまゐらせて母の喜び玉  
 ふ顔見んものどたのしみつゝ飯んどせしに物陰より野おせりと見にたる乞丐の女等また出来  
 りて八重垣をとりかこみぬ八重垣これを見るに頭に松蘿かふりたることき老女もあり身に海松  
 をまどひたることき老嬰もあり環に瘡いできたる小兒を肌つけに負たるもあり尻に棚つりて趁  
 破ひくもあり鼻肌りおちたるもあり偏育なるもあり缺唇なるもあり腮の下に疣さかりて齷齪の  
 實の如くなるもあり汗鼻汁と流すもあり髪毛赤く齒の黄みたるもあり都て汚穢けなる女  
 原身うちの臭さは鼻を襲て堪かたし儲此者等八重垣にむかひて口ぐにいひけるはそも汝はい  
 つくより來りつる女を此所は乞丐村の者の物を乞する所なれば此にて物を乞者は何者にもあれ我れ  
 くが仲間にくといりてすまき定なるに濼吹に此所にて袖乞するは定を破る曲者なりといひけ



れば八重垣大に驚きこはのからざる難儀と思ひつゝ胸のこをどりていらへだにせずのたりけり  
 時に齒の黄ばみたる女臭き息を吐ていはく我くが定めと犯女め後日の見せしめに心の儘お  
 れこなふべきそといひつゝ襪のそでを巻あげ爪長く生のひてくろく垢つきたる腕をさしのべ  
 て八重垣が籠笠をかながら縁の黒髪を懸樹につかまて引倒せば鼻の腐たる女つと出て瘡の膿水  
 のしたたる拳をあげて玉を欺く面上を一打うちぬるにそ八重垣は泣聲になりてこはいかにとる  
 そ妾の近ごろ他國より此郷に移來つれば此所にさある定のある事を露ばかりも知らず此後は物  
 乞とせままけれのこれまでのことはゆるしてくれよといへば乞丐とも或は小雀の囀るが如く舌  
 ぼやに言或は鹿笛をならすが如く鼻聲にはづかしめて悪口雑言さましくいとかしましとさ  
 けびけり八重垣はうち目なうきてこはいかにすべきと怕まどひけるに棚尻の女趁破ひきつ、澤  
 蟹のやうにあのみ出ていひけるは汝新参の乞丐よ實に知すしてせま事ならは免せてもつかはす  
 べきが我輩のさためなればたなし食物をくらはされは免しかたし免されたく思はゞいざこれ  
 をくらへといひて欠櫛に盛たる腐飯の殖の生たるに口津を土かけて八重垣が口のはどりにさし  
 出しいでくらへといひて責けるがいかでかこれを食ふとわたふべき臭氣を懸すら胸にさく  
 唯もるし玉へくと詫ければ腮の下に腮のさがりたる女蛙るのやうに眼を光らえて白眼つ、恐  
 き女めかなそれ食はずばゆるされすといひて竹杖にて打ければ皆立かたりて或ひは打或ひは蹴  
 飛び踏倒して怒まゝに責責けるにそ八重垣は髪も亂れ衣も破れて息も絶々になるこはあま  
 なる仕方ぞや實のこを語るべきほどに哀と思ふてゆるしてくれよ我身の父なる人に死別れ兄な  
 る人に生別れして母ととも貧家に養れて憂日をおくるものなるが母長病をわづらひて益貧に  
 せまりぬれば我身の心一つにて母にかくして此所に來り仕馴ぬ藥の袖乞もせんかた盡ての事そ

かし若此事が母人にまれての我身は活て母がたし素骨丐村とやらいふとの定ありといひ露をらす  
 此後の物請をすまじきほどに我いふことを聞分て見のがしにしてくれよかし悲慈少情をこれの  
 うといひて掌を合せてをがみつゝむせかへりては嘆きける情をしらぬ乞丐とも興あることと思  
 ひなま能慰と心得てこれ女慈悲の情のといふが我くかつかふへさ詞にて人にしかいはるゝ  
 身にあらすさりながらさばかり詫る事なれば聞入てもつかはすべきが我れくが望とすべきが  
 前回の飲食ふ事ならずばかくせよかま汝人の門に立時は何やらん語うたふて物乞よしそれを謠  
 て物請さまをして見せよさもあらばゆるすべしといひて聞んいてうたへどくちくぐにひて責ける  
 にそ八重垣のせんかたなく破れ扇をとりて立上り涙にくもるをなうき聲をいとも哀れにふりた

○所は九重の東北の靈地にて王城の鬼門を護つゝ悪魔をはらう雲水の水上は山陰の川や  
 長く浪風の浪風もいさぎよく響は常樂の縁をなすどかや  
 是る白川の浪風もいさぎよく響は常樂の縁をなすどかや  
 長く浪風の浪風に情の手の裏願ひますと○かくいふて物請ぬとて扇を捨て泣伏ば骨丐もいひけ  
 るは儲もよき物請ふりを今より我くが野ふせり所骨丐村の仲間に如へてつゝあひすべし其証は  
 此籠笠と此扇ととて二品を奪ひとり人たがへのなき機にそちに身にもあるしをつけて飯らすべ  
 しといへば年役に此老のといひつゝ三途川の婉のこくとく瘦かれたるが透運出てたのが穿たる  
 古木履をとりて八重垣が額をはつしと打けれ之憫むべし緑の眉の上に疵つきて花の額血に染り  
 めなやと叫びてのけさまに倒れければ乞丐もも同音に咄と笑ひて立去けり八重垣は氣絶して  
 しぼらく起も得ざりけるが長ありて起上り苦き息を吻とつきて身うちを見れば血しは淋て流れ  
 けるにそこの情なや嗣欲や父母にさへ打れたるとなき身なるにいかた零落したればとて丐骨等



に打擲され而に疵までうけたること大猫にもひとしきぞやといひつ、齒をかみならし身をもち  
 へてくちをす涙はらくと折しも降來る急雨額の疵にしみこみてはどいたみのまさりけり  
 あたりを見ればもらひし米も母に與へて喜ばさんどとのへたる物迄も砂に穢て散亂しければ  
 怖げに見やりつ、彼者ども乞丐村の仲間に加へしといひて綿笠扇を奪去しはるも後日の災  
 一をたすすべき心ならん彼といひ是といひかくまてに薄命なることかなる宿世の因果をや我爲に  
 月日は照し玉はきや神佛にも見はなされたる身なるかと夕波千鳥浦風に立てと嘆息して泣  
 はしる袖時雨も枯野になさまどふ日も入相の鏡さへていとゞ哀をそへけるか若後日に彼者等  
 乞丐の仲間なりなんといひ來らは先祖の家名を汚のみか母さま兄さまの恥辱は未代す、ぎかた  
 去殊更か、る疵をうけ歸りて何といふべきぞと思ひつめたる死神に誘れてゆく濱づたひ雨と涙  
 に濡壁の顔に亂るし横しおき真砂に足をふみこみて波打ぎはを走けるか宮津道の磯邊は折節往  
 來もなかりければ此所にありける五六尺ばかりなる岩のうへにのべり掌を合せて念佛となへつ  
 しはやく海底に身を沈んとしたりけるに忽ち五休すくみて動く事あたはざればこはいかに死  
 る事さへならざるかと益嘆きける時まも雨やみ空はれて月夜々どかやき出けるお前面の岩の  
 上に彩雲しきみち異香薫じわたりて一個の嬢と座したまふ頭には九龍飛鳳の髻を結び身に金  
 縷紗の衣を穿その上に白羅衣をまとい手に柳の枝を持藍山の玉帶長裙を曳白玉の瑤璋彩袖  
 を舉げ顔は蓮花の如くにして天然の眉目雲環を耀し唇は櫻桃に似て自在の規模雪體を端うし  
 てたのしませぬ此とき八重垣は身の動自由になりけるに岩の上に伏てて拜しけるに嬢々  
 王音をひらきてのたまはく我汝が死をどめんために來りてこゝあり汝前世の悪果により今  
 のみにあらず此後も又百折千磨の苦をうくる事ありといへども佛をうやまひ幸をねんずる

功德によりてつひには天日の面を見るべきをえて富饒なる身となるべきなり此後いかなる難  
 にあふともかならず死んと思ふべからず我異日再又會する事あるへし初と疑ことなかれと告  
 玉ひ眉間の白毫より一條の光を發し八重垣が額を照し給ひてかきけす如くに失なひけるが八重  
 垣が額の疵忽ち癒けるにそ奇異の思ひをなし成相が觀音菩薩此に姿を現し給ひて妾が命を救給  
 ひしに疑なしと隨喜の涙を流しと此後又さまの難義にあふべしと告給ひしはいかなる憂  
 目を見る事やらんさりながらつひには運をひらくとわれは末たのもしきとと思ひ死をどめ  
 りて其跡を伏拜と髪結びあけていそがはしく家に歸り水草にむかひて急雨に道をいとくとてあ  
 やまちて坂より落衣服を破りしが幸にして渾身はためずといひければ水草は是を實とぞそは  
 危き事に母上さまいすこの事をも氣づかひ給ふなれいさある事は語玉ふなといひてやみに  
 けり扱水草は毎夜子刻のころより家を出て曉に歸事前の如し仰丹後國天橋立は日本三景の其  
 一にして景絶妙の佳境なり相傳彼島は神代九世の時始て出來るゆゑに九世戸と號るよし又切  
 戸ともいふなり松林の裏に文珠堂あり海底より出現あり玄閻浮檀金の文珠菩薩を安置す成相の  
 觀音は橋立の内あり某に與謝の入海ありて眺望无双の地なり此海は文珠菩薩の出現の所なる  
 もるに往古より殺生禁斷の掟さびまき若是を犯す者は生ながら賢卷となして海底に沈むべき定  
 なれば人怖て漁せず此のづから鱒魚の集るとわよく此所に一網をくださば勢せずしてあま  
 の魚を取得べきものと貧者なきには思ふ者もあるべけれと重き罪にたこなはれんを願て  
 小魚一ツたに取者はなかりけり然る頃日深夜あいたりて此海に監綱をくだするありとて此近き  
 あたりの漁夫どもに疑ひか、り此の地主藤由良判官命をくだし彼法令を犯曲者を心をつけて捕  
 めしこの事なりければ漁者どもたがひにひあはせて深夜にも目代をねり若彼曲者を見付なば



鉦を打大鼓をならして號とし海には船を乗出し陸には道を遮て逃さぬ様に備をなし手筈をさだめて待あけり比しも九月なかばにて一夜子の刻過より夜風につれて降來雨の足細竹をは乱せる如くにて岩に碎る波の音轟々として響て凌鏡折しも浦遠く鳴てとどけたる尸金かど疑ふばかりに機

の音をかすかあして漕來る小船あり楫人も打人も獨にていかにも人目をしのふ体雨風すこし絶間にて沖にも磯にも船は見えずよさひまやと思ひけん馴し手練の綱の綱をくりかへし／＼網を雄手にゆりかけてさつと入てはたぐりあけそよよと打まはる陸に對ふ漁者等かくと見るより號の鐘を打ならしければ那裡にても大鼓を打て號を傳へけるに予すは曲者よ綱打よと叫りたて、枯蘆の裏にかくしれたる船を乗出し陸には山松をともしつれて其奴擲せれどぞひしめさぬ枯蘆の裡より漕出たる二艘の船に漁人ども四五人づ、乗櫓をはやめて彼曲者の船にちかづき先兩人の漁者彼船に飛うつりて曲者をとりをさへんと去たるに曲者は一人の腕首をらへて捨かへし一人の襟首擲てひきよせつ、兩人を一度に投げれば、海にさんふと落ちてけり又一

人か組つくを両手を伸してづんどの終る車投つゝいてかゝるを肩すかし打込投込早業を此方に見居たる漁者ども曲者のたゞものにあらぬを油断すな一度にかゝつてかゝ先とれと呼りつゝかはる／＼彼船に乘うつり擲をどりのべて打倒さんどしたりけるに上をばらへば身をしづめ下を

いらへばをどりあがり前後左右に身を避てつひに擲を奪とり一打うてば二三人一度に海へまつさかさま素これ／＼小船なれば左右にぐら／＼傾きて打こむ波の危げにいつと飛散水煙すつくり立たる曲者は篋笠を着たりければ顔も姿もさだかならねど手頭ゆそく瘦たる体腰たよ／＼としていと弱氣に見ゆれども身のはたらきの疾とは雲にひりめく電光の如く波に交千鳥に似たりければ近つきよりて捕こどあたはず唯はたづらにひしめくのみなり陸に居たる漁者等此体を

見て又號の鐘大鼓を頻に打ならずとひとしくおひ／＼集るにほくの人数數十の明松星の如くこゝかまこお亂れたり磯田蔭より漕出たあまたの船は船に篝火をかりやがし波を押し切さつと聲彼船にちかつきて四方より取圍ければ陸も海も白日のこくとくあさらかにてほ／＼逃かた／＼見へたる折しも再風雨はげしくなりて雨の車軸を流すがごとく風の波浪をまきあけて船の篝火陸の明松一度に消て眞の闇わたの漁船波にゆられ流されて遙此方にとなれけるが此ひまに曲者はゆくへもしれずなりにけりかくて又一日漂木の港の商人二人連にて水草がもとに來り懷手しつゝ足にて竹の簀戸をねまひつと裏にいらて水州後家へ宿にかといふにぞ水州は竈の邊より手拭もて手をぬぐひつゝ出來てこれ／＼米屋さま古手屋さま此選天のいとひもなくようこそ

れ出たふたりどもにいつ見ても若／＼し殿ふりと愛敬顔に溢まつゝ／＼は兩人の商人は簀子の上にのまわがり先米屋がにかりかへつていひけるはこれ水草其虛愛想にほだされてこれまでいく度か欺されたもはや其計策には乗ぬやと／＼へば古手屋か今日の其偽いふ舌を振んため

に來れるぞ常音に／＼借る時の地獄顔戻す時の閻魔顔といふおのことかはりていつも／＼菩薩顔にていひまはす内夜刃のいつはり女今にすまぬ古衣服夜の物の貸代還らす渡せぬさうけ

とるべしといへば米屋が／＼これ迄仕送きたる米麥の代味贈鹽の代まですませいさ渡せと二人してかはる／＼醉あらしかに喚ければ水草は奥へさこえてはと心を病免兩手をあげてやれしづかにしてたべよしかのたまふと無理ならず我身等閑にする心は露ほどもはべ／＼ねども貧乏

うへに病人の看病あかりりてひさしく活計をいたさねば償べき物もなく心の外はなりとべりぬ何とぞ今しばし待たべと詫こどばを聞入すいな／＼無益の詞を費すな今日は是非とも受取

て歸らぬやならぬといふて急にすます物もあるまい貧乏者に似合ざる絹夜具や絹衣服の損料借



さだめて奥の病人に着れくならん判とりてかへるべしといへば米商人のいひけるは我仕送つた代物は皆汝等に喰れてしまふたれば覆水ふたゝび盆にかへらず取かへるべき事もならずといひつゝ四邊を見まひして崩灯臺破扉風藻にすむ虫のわれ鍋に幾世時雨の古傘かう見渡したる所一ツと煮て價になるべき物はなませめてあの牛小屋の牛を牽て歸らばや瘦牛なれども少しの價にこなるらめといひて古手屋は奥へ米屋は牛小屋の方へもかんと立あかるを水草はあいて、走りより二人の袂にとりすがりてとむればはつまど蹴倒し二人の者は偏袒手拭ねちて頭巻とし臂を押はりていひげるは金のかはりには襪の物をどつてもざるは情といふものそれさへどむるは我くに残らす損をさすべしと始よりたくまでしつる事ならめそれなればすこま料見なりがたし思ふまゝおれこなはね之我くか熱腸をさましかたしと罵つ、一人は水草か襟首つかみで引倒し一人は火爐のうちなる燃机とりて連打に打ければ火花はばつと飛散て時ならぬ螢の集を見る如し兩人の者嘲笑汝は男まさりの女にて劍術柔術に達したるよし聞つるか借金といふ大敵には手出しとなるまじ齒かみをするいゝやしいか泣をるは無念なるか目にかざたて、なんどする白眼ばかうじやと又蹴倒すつて踏にヒりて奥の方で牛小屋へ又もゆかんと踏出す水草へ寝ながら二人の裾をとらへてとむる塗炭の拍子火爐の藥鐵ひるかへりてばつと散たる灰のなか辟くもらせていひけるはこれ二人の衆聞てたべ奥にねとす病人の大恩うけたるれ主様又あの牛は亡父の遺留物彼といひ是といひいかほさ責噴玉ふとも渡す事はなりがたし慈悲と情をしり給之々堪忍して戻つてたへといひて涙をばらばらとどれどしつと詫びれども二人の者はうけひかずゆかんとやらしどあらそひぬ此日八重垣は成相の觀音に禮參の心にて詣けるが此折しも歸り來り此体を見ていそがはしく走り入二人の者をとめていひけるは襪子は彼所にてくはしく

聞はべりぬ奥の病人は妾か母牛は水草が親の遺物忠と孝とにからまれて何とせんかた難儀の際とても了簡なりかたくは借受たる品の借をすすすまで妾を人質に連去玉へいさくといひて身を捨小舟岩角に胸もくたくる思ひなり二人の者は八重垣が美麗姿を見てこれを人質にとらば金のすまぬかかへつてよしと欲のたくみに面をやはらげしふく得心のよしをいひて八重垣か手を携へ運歸らんとしたりけるが水草は二人の商人が腕首とらへて引もせし勿体なは八重垣さまわなたを片時も人手お渡ししてと妾は生て取りがたしゆゑありて索たる大切の金なれどもかゝる手詰に臨てはせんすべなくいへば彼等につかはして債とすましめし御心安かれといひつゝ、立て麻笥の裏より小判五兩取いたし來りて二人か前に投出し其金どらはいひふんはあるまじといへば二人は是を取上てこれほ金を持ながら拂ひぎたなき女かなと眩詢てかへらんとしつゝるを水師はしはと呼とめ汝等に借たる物はすませしが此方より貸たる物がまだすまぬとくくすまして歸るべしといへば二人の者は不審顔にて小首をかたふけさきの日に催促に來つるとき耳の痒さの簪かりたるほかに何も借たるおぼけなまといへば水草はいはくおぼえなしとは空座者今汝等が燃木をもつて妾を打刺蹴つ踏つしつる事をとや忘しか其返報をうけをれといひつゝ二人が身に手頭を掛くると見えけるがかねて手練の柔術の早業二人一度に翻りて庭前に壁蹴どをなりにける退しも立す最前の燃杭にてはつしと打ければ二人の者の顔を嘔めな痛や堪かたやゆるせくといひつゝ高道し慮にたはるし倫起鳥の逃かくれする如くみて身をちめてぞ逃去ぬおどには八重垣胸を嘔ためいさを吻とつきて居たりけるに水草いひけるは前程より何かにさきれて御病床をうかひはべらすいへば彼處へたはしてたんとひくたされかし今の事かならずねん耳にいれ玉ふなどいへば八重垣は點頭て打まはれつゝ立行ぬ水草は獨つくく



と萬の事を苦にやみて襟に腮を埋火の灰にも背後前の恩案なかばへ村長来りこれ水草いひ聞  
すことありて来つるなり別の事にあらす頃日橋立の入海殺生禁断の所に夜な〜網をねろすも  
のあるよし心をつけて捕ふべしと主護職判官殿より嚴命をくだされたるにより此邊の漁師ども  
かはる〜目代となりてつけねらひつるに一昨夜の子の剣過風雨はげしき海面に籠笠ふかく身  
をかくりたる曲者船を漕來りて網打とて網打とて見つけ網の鉦大鼓を打鳴して取巻たるが其曲者案  
外の早業にてつひに捕ることあたはず暗夜の裏に曲者は船を乗捨逃失たり其船の橋立の渡船に  
てありしなり大勢の者に疑のかゝる事なれば嚴く僉義を遂ねばならず村〜は大騒動れん身は  
いまだ知ざるか息もつかずに語けり八雲八重垣親子の者は病床の障子をほそめに押あけて耳  
かたふけて閉居たり時に水艸いひけるはさばかり嚴き法を犯といふは世にも大膽なる輩もある  
ものかなあら〜しく漁者どもの手にあてぬほどのものならば尋常の曲者あはるべからず女  
ばかりの住居にこそあるうたがひのかゝるべき氣つかひなくて村の騒之餘所吹風こちらなごは  
氣やすけれと兎角所に事なけれ村のたばねをし玉ふ身にはたのつから苦勞のたらくかゝる事あ  
な氣の毒や濫茶一ツとささいたせば村長は茶碗を取てにじりよりいな〜此案とても疑ひのか  
いらぬとこかりもひひがたし彼曲者手者に似合す手頭はほど瘦ほそりて腰もたよ〜弱氣に籠  
笠を着て男ども女どもさだかならねば御身とてもれちつさては居られまじ罪そのがれぬ天の網  
波の車のかゝるまいものにあらずとなざりありれば水艸は打笑つ〜いかにのたまふを妾に  
も疑ひのかゝるべしとや此村にひさしく住貫さくらまはいたせども是迄歴一條物を掠奪はえ  
なし況さある罪科を女の身にて犯すべきいれなし若疑のかゝるどもよく分説て王はれかえと  
いへば村長ははく身にねはえなきならば夫程めてたき事はなまゐはすもかねてしりつらんが彼

則を破し者を生ながら行巻となして海底に沈る古法向さへ身の毛のよだつ事わなをそろしや  
〜と身ふるひ去てぞ歸りける暮行秋の月短にて兎角する間に暗なり遠寺の鐘の音も冴て宿に  
かへる群鳥身に去む風の蕭々と軒端をならすさとしさの空打ながめつ、水草は庭にねり立て表  
の簀戸をさしかため灯臺を取出して火を熄せ家内を見まとして名残をしや今夜が此家の居るさ  
めど口をすべらず細言祝取出し替置にや懐紙にかきつけんとしたる折しも嗽の音聞えけれハ  
手早く袂にぬしかくす時に八雲八重垣に介抱されて病の床をいざり出水艸へ、へど叫けるに  
ぞ何事にいひて近く居よりけるが〜には手捕の人数巻巻に雙手觸觸願卷手強ねをそかに打扮て  
長村に案内させ提灯の火を消せて拔足しつ〜門首に寢居とは歸しらす八雲膝をす、めていひけ  
るの前村長のいひつる事彼處にて委さ、ぬいつぞやそなたの物語に夫與三が存生の時ととも  
〜に漁し女ながら網打とも仕ねはは潜する尼の業までしつるよし頃日夜毎の観音詣一昨夜  
も出るゆゑ此雨風のはげしきに今夜とやめよと〜めつれども満願もる参りたしといひて籠笠  
を着て出去しが村長の物語は符合するのみならず佛壇におきたる網の見ゆるも不審なり劍術  
柔術も通達し丈夫にまさりしそなたなり彼といひ是といひ我〜親子を養ふためとはいひなが  
ら法をそむくい何事ぞとくより夫としるならばと〜むべきに殘念やぎりながら去程の事わさま  
へざるそなたにはあらざれ共よく〜貧苦に迫ての事ならめ我〜が御命ゆゑに心にもあらぬ  
罪科をゆるすと思へば不便どもかわゆしともしもいふべき詞はなさぞかし今更いふもかひなき事  
實にさあれば今夜のうち何方にも身ををくしてくれよかし我〜ばかり残り居ば病人といひ日  
さまへのなき小女といひ格別の咎もあらじたどひ我〜がいかなる罪になるとしてそちが身を  
生ながら費巻となして海底に沈らる、をいかて傍目に見らるべきかくいふうちも氣つかはしと



く去と急がずれば水草云こは思ひよらざる御疑ぎある覺之隠ばかりもいはず網の失しは妾  
もいふかしく存今に於て解はべらすたとへ疑ひか。るとも申はあきらかなりかならず氣つ  
かひし玉ふなどいへば八雲は頭をふりいなしく云はしほしも我れお苦をさせまじと當座を  
つ、む詞ならん罪を負べき覺悟とはそなたのけはひにあらはれぬ詞かづを以はずとも片時もは  
やぐ逃てくれよそなたの詞が實ならばさきほど商人につかひしたる金の出所いかにぞやと問  
ひつ然られて當惑の水艸いしはれて涙を流し此返答にゆきつまれば八雲はなほも問はさばや  
と思ひつ、いていへいでこたはよといひてせめけるが御儀は今申しがたしといひて只吐息し  
て居たりけり門口お始終の事を曉問たる捕人の人數さてこそと思ひそ、篋戸を踏破りて動を  
と亂れ入水草を圍繩さばさして云けるは我、驥は山良判官の命をうけて汝を捕へにむかふたり  
殺生禁断の海に盜網をくだしたる重科の女とく、腕をつかねよと同音に告げれば水艸は左右  
の手をわけてこは思ひかけざるあふせかな我身に於て聊もたげざる事いといへば捕手の長  
と見へて陣羽織着たる者いひけるは盜人猛くしどの汝がこと汝毎夜家に居ざりし事註進の事  
ありてよく知りぬ今にいたりていかんぞつ、みかくすとものがる、道のあるべきかそれ括へし  
と下知すれば陸路立か、りて高手小手にぞいままめける水草とはげしくいひけるは妾毎夜家  
に居らざりし成相の觀音に願望ありて毎夜通夜をいたしゆゑなりいかてか妾が身二ツあり  
て彼所に網をくだす事あるべきや此所を御推察くださるべしといへば捕手の者いなしくいかい  
ふも偽なり彼觀音堂之毎夜きびしく扇して堂内に入事をゆるさすいづれの所に通夜せしやされ  
ばは堂内には入る事かなはざるゆゑ門外にありて通夜いたしひなりさばかり疑玉ふには何をた  
しかなる証據ありての事に候らわんと尋ねは村長すみ出ていひけるは証據のなき事をのたま

よべきかさ程こゝに來しも家内の様子を見んためなり病人もあり少女もあり汝が口づかの手  
業にて三人口を養ふべしと思これ殊に先刻商人に與たる五兩の金資家に貯ふいはれなし彼  
といひ是どいひ怪むべき事あまたあり汝一昨夜大勢に取圍れて逃去たるとき乗じてたる橋立の  
渡船に隠しありし魚網の手練の糸に結つけたる小さな木札に薄層村三とかきつけありしはこれ  
たしかなる証據にあらすやといふを水草聞て何とのれまふ其網が船中にありしかといひていと  
驚たるさまなるにそ捕手の長いひけるは其網を村長方にとりたきしに其夜又其網失たるも汝  
が業にて証據を奪ひかへし脱るにうたがひなしたとへ証據之奪ともはた脱ぬところなり速に白  
狀せよさもあらば此家に居れる二人の女之連累の罪をゆるしてつかえすべし若又白狀せざるに  
於ては二人の女も捕へゆきてひじやにつなぎとも糺明すべきなりといひければ水艸之泣聲に  
ていかに噴玉ふどもしらぬ事い白狀すべき詞なしといへば捕手の長扱も膽太き女めかな骨を  
搦てもいはさてやれくべきいはいへといひつ浦の枝笈をふりあげて連打に打ければ憐む  
べし水草之聲されて亂舞木柵も碎て飛散つ、腕はしびれ背之腫わがりて苦痛に堪ず打倒れたる  
爲体今參りの新亡者が悪鬼羅殺の手にくだりて呵責にあふに異ならず目もあてられぬありさま  
かく去ても白狀せねば二人の女を彼が見る前にて噴噴、べしと下知すれば少も宥免あらまご  
も一人ハ八雲をどらへ一人ハ八重垣か襟首摺み箇々蒲の傍笈をあげてぞく打んどしたりけ  
るに水艸は以そがはしく起上りてやれし待てよと聲をかけ其に二人ハ我が爲に大恩ある御  
主人にて母人さまの懐胎のうへの長病なれば若一打てにもうち給はし立地に御儀は、かるへし  
さあるときと一人ばかりか胎内の孩子ともに二人の命にか、はる事又怯弱なる八重垣さまこれ  
も傍笈をあて給ひ、忽絶入給ふべし慈悲を情をこれ申せゆるしたべよ人く、と只打噴つ、倒



ては起起て倒彼方に向ひて慈悲を希願此方に向て情を希心もなかは亂れ落る涙はいましめの  
 繩をつたふて流けり捕手の長身動をなと叱つけ二人の女の打る、ことをさばかりはとひと  
 くく白状せよといふに八雲之若き聲を立やよ水脚我命の運を知死期とかねて覺悟のとなれば  
 我をかばひて知ざるとを知つるなんぞいふべからずとはげましいへば八重垣もそなたが無實の  
 罪よふつれば妾ども生てあるべき所存にあらすたとへ責殺さる、どもそなたと一所に死ぬべ  
 きぞかならず白状すべからずと主人をかばへば侍女を憐れ主従親子三人が身を捨ゆふを哀なる  
 あらしこどもと口くくに手ぬるくすればつけあがるながたらしきよといふ白状せす二人の女  
 をばかくの通りとひひつ、又ふりあぐる榜笞の下に水草はあはて、轉入やれまぢ給まへしはし  
 くか、る手結にいたりてはともゆるしはし給ふまじと思ひはべれば白状をいたすべしいか  
 にも殺生禁斷の海に夜なく網をくだせしは妾にていとひひさして且つと叫びてたふれ伏八雲  
 親子はこれを開白状せしかかはいやとどもに倒れて嘆きけりかゝる折しも乞丐の女ども四五人  
 いそがしく來りて八重垣を取圍口姦くいひける之海松峠にて袖乞したる汝此家におりと聞  
 て來つるなり過つる日我くが仲間にくはへし証これそとひひて編笠扇を投出ま仲間定な  
 れば乞丐村につれゆくなりとくくわめといひて八重垣が両手をとらへ引立てもかんとした  
 るにそこそもいかにと驚く水草を捕手のどもから引とめてみづから白状のうへは罪科さば  
 する此女今夜の内古法のごとく費巻となして海庭にしづむべしいと立上れといましめの繩を  
 とりてそ引立ける難儀に難儀のかさなりければ八雲とあるにもあられずして捕手の長にむかひ  
 何どそ今暫御猶豫なされくたされかしとひひ乞丐等にもかひて今すこまの間待くれよと双方を  
 とし免れきていひける之水草といひ八重垣といひ忠義の女孝行の子を持ながら我身一ッの不運

ゆる其かひもなきかなまさに過つる日八重垣の懐より取落したる布袋に米麥小錢のありしゆゑ  
 扱は観音詣といひなして袖乞するど心づきしがいはかへつて恥思はんと知す顔にて居たり  
 しが乞丐等の物乞所にてさあるをすべしと思ひよらざる後悔さよ世の中に娘子等髪飾の飾や  
 衣裳の好む容をつくるが常なるに古編笠に破扇身すはらまけな姿にて人の袂にどりまがり袖乞  
 をして此母を養ふ心の勝さへたぐひまれなる孝をかし親の心は愚なるもの物見遊山に着裝りて  
 此家の前を往反する人の娘を見るにつけ噫世が世にあらは我娘もあの如くに粧いせてよき子を  
 持しとほめらるべきに身の薄命は是非もなや幼少より祇植して絲竹のしらべ和歌の道双六十種  
 習員合閑雅た業のみ嗜にて和羅のがはる衣さへも重着すれば身ふれもく又衣を薄うすれの羅翠  
 もる風にもいたしたる身なりしお此寒天にも襪履のひとへ肌をかくすに足すして辛苦に瘦るい  
 ちらまさら其うへお此難儀不具の仲間にくたるとはいかなるとのむくいそやとひひてむせかへり  
 けるがなほ水草にむかひて云忠義の心は深けれども犯せし罪はまぬかれずなましくしき其體を  
 煎の食餌となすかと思へば玉臍六腑も憫亂し骨くも碎る如くに思ふそや忠義の二字はむなし  
 くて末世末代罪人の汚名を残す不便さよとかへらぬことをくりかへしくいひつゝ前後不覺に  
 歎きけり水脚は始終覺悟の体かならずに歎きさくたさるな何事も皆因果づくといひながらいた  
 はしさい八重垣さまの傍身なり袖乞をなさるべしと思ひもよらぬ事ぞかし夫も妾がまづしさ  
 の苦を救はんとたばしめすれ心ゆると思ひはべればいとかなしくいといへば八重垣いはく妾  
 よりなほ不便なるそなたの身思へばく我くは宿世いかなる悪報にてかゝる愛目を見るこ  
 とぞ母上憐八重垣水草御主人さまこれが此世の別れとたがひに顔を見かひして身をまたへ  
 を立一度とりつと位涙血しはとなりて流れつゝ親子主従三人の膝を染なすばかりなり捕手の若



は氣をいらち用にもたしぬ無益の線音時刻がうつるとく／＼立と叱すれば乞丐女は八重垣を遠慮申捨るあられなく引立出る折しもあれ此家の菩提所磯波寺の寺主上人兩人の同宿に古卒都婆と魚綱をもたしめていそがしく馳來り捕手の長あむかひていはく昨夜又彼所に網をくだせも  
 の参りしも大勢にてとりたさへ繩をかけゆに曲者の姿は烟のごとくにさけうせて跡に残りし  
 此卒都婆は先達て死亡たる此家のあると與三が爲に愚僧か建たる卒都婆なり又今朝與三が石塔  
 に此魚綱のかけてありしも不思議なり彼といひ此といひ此女の罪科一應にては定がたくいこん  
 とくされん糺しくだされかしといへば捕手の長あざ笑ひていはくその狐狸野猫のたぐひの人を  
 欺戯れならん實に網をくだせしは此女にさばまりてすてみつゝら白狀のうへは片時も猶豫  
 すべからずといひて再引立山んとしたるごころに忽一陣の冷風颯と吹來りて樹木の枝ざは  
 くとなりひびき空かさくもりてほの暗く夜霧籠たる柳の梢にわやまき人影あらはれいと幽な  
 る聲していはく往時渺茫として總て夢み似たり舊遊零落きて半泉に歸す閻浮の昔こひしさよ是  
 は魚夫の與三が顯現なり某がまうす事を一通さ、玉へ往古切戸の文珠菩薩弘法大師に授玉ひし  
 黄金を以て鑄なしたる三箇五箇獨獨騰騰於佛桶の五箇的ゆゑありて橋立の海底に沈みこれを取  
 上んとするに其在所と知事あたはずしてむなしく過つる事あまたの星霜を換たり彼海に鱗魚の  
 れはさきも其金氣を慕て集ふゆゑなり又毎月十六日の夜半に龍燈あらはれ毎年正九月の十六夜の  
 天燈降るも天龍龍王彼法器を主護するゆゑなり某婆にありしとき殺生を業として明暮物の命  
 をとりしこと數知ず其報によりて惡趣に沈み唯罪科をもち網の波をかへつて猛火となりて身を  
 焦し因果のめぐる火の車に罪業も積かさねて貪欲の心ひく綱の手馴し鱗魚今はかへつて惡魚毒  
 蛇となりて紅蓮大紅蓮の氷に身を痛骨を碎さぬ苦しやと叫ぶ息は焦熱大焦熱の炎となり雲

我たち居にひまもなき冥途の責の度重れば何とそ彼五箇の法器を取わけ其功德をもつて成佛を  
 なさばやと閻魔王に歎きまうして婆婆に往來することをゆるされ天神に願龍王に希夜な／＼彼  
 所に網をくだし昨夜迄に五箇の法器を殘らず取わけ某が望の途つれども思ひかけず妻に疑ひ  
 かかりて無實の罪に取ちたるを憐み是を救ん爲にこれまであらはれ出つるなり往古より若彼法  
 器を取あげたる者に其美をたまはるべき定わればこひねがはく其美を妻ふたまはりて彼  
 が貪苦を救ひ忠義の志を達させてくだされかしといひ／＼上人法器を渡しやすへしといひつゝ  
 法器をさしげて近々とくだり來りければ上人袈裟を贈てうや／＼しくこれを受たりけるに再又  
 一陣の風吹て與三が姿と消うせけり上人はじめ皆／＼奇異の思ひをなしけるに捕手の長水草に  
 むかひて汝身に紅蓮なき事何とて自己なせしといひつるぞといへば水草いとくこと情な  
 き問ひごと哉無實に罪をなさらかにせんとすれば御主人母子の命危うし佛燈の網の失しよりす  
 べての事符合したるも我が身に災のかゝるべき時節到來とあきらめ我が命一ツを捨て御主人母  
 子をとすけん爲に無實の罪をきつるなりといふにそ八雲之益其志を感じ問はさくはど類ま  
 れなる忠義かなさばかりあきらかなる身にて商人につかひしたる金の出所をいとさるゝ何ゆゑ  
 そと尋ねれば水艸いはくかく事明白あなりつるうへに其事をつゝます語すべし御二方を心の  
 儘に養ひまゐらせんと思ふ心より實は我身を佛體に賣べき約をなしかの金の其証に取つる金に  
 てかゝる原のなければ明日は身を賣て宮津の宿にまゐるべき苦に此事をあきらかにさこえな  
 ばとめめ給ふの必定とぞんじ深くつゝみかくせしはかへつて傍疑の種となりぬといへば捕手の  
 衆今は半點の疑へき所なしとていせしめの繩をどきけるにそ水草は悦び夫の靈魂の告るによ  
 り危き際にも衣をぬぎつる事の嬉しやといひて吐息すれば八雲もどもに蘇生たるこゝちしと胸



を撫て居たりける時に不具の女等すしみ出をちらはすみても是れこちはすみがたしはさく  
 といひ八重垣を又もひつたて出けるか濱づたひに明松をともしつれて此家をさして来る者あり  
 己に近づくを見れば鳥帽子を風に吹そらさせ縹の素襖の袖を巻あげて袴のくしりを高くむすび  
 つげたる武士竹のいしに包文をさしはさみてさくけ一合の長唐櫃を従者にふなはしめ明松を前  
 にたて、此家に到りければ捕手の輩いこれを見るときと下座をなしてひかへたり村長も平  
 伏不具どもと庭の片隅に屈みけり彼武士上座につきていわく某之當地の主護職由良判官の郎  
 等港口兵衛といふ者なり今此家に來つること別儀にあらす京都足利義政公頃日一夜の御夢に文  
 殊菩薩あらわれ給ひ往古橋立の海に沈たる五箇の法器此度出現すべき時到来て冥府の菩薩に往  
 來してこれを取あぐる事あるべし彼所を殺生禁断とさだめしは原彼法器あるゆゑなれば此後は  
 彼法を止まると靈夢の告ありまによりて俄に台命をくだされ法器出現せば切戸の文殊堂に祀さ  
 らむし又此後之殺生禁断を止まざる如く命命をたまひぬ彼曲者を捕へま時與三が卒都  
 婆の残りたる事此事に符合すれば與三が靈魂法器を取あげたるに疑ひあるべからずと主君判官  
 の命をうけしめるやいなやを糺んために来れりといへば磯波寺の上人うやくしくいひけるは  
 其事すこしもたがはず介儀々々にいとて與三が靈魂の告たる事をくはしく語りて法器を見せ  
 しめければ港口兵衛これを拜きて感嘆ししからば古の定のごとく褒美は與三か妻にとらすべし  
 きて唐櫃の裏より白木の臺に積たる紅白の綾の巻物二十疋をとりぬださしめて水草か前にそえ  
 させ青ざしの錢二十貫文を出さしめて上人にむかひければ彼法器供養の爲不具どもに施えいへ  
 といへば上りしばらく法器を佛壇にすゑあさ此錢をうけとりてかたの女どもにむかひ是よき  
 事なればこれを八重垣か身の穢を清る料錢として汝等につかはすべししかるうへは一言のいふ

べき事あるへからず汝等が此にあるは法器に對て穢なりこれをとりとてとくく去といへば乞  
 丐どもは疎々出て此錢をうけたさ免皆打連てを歸ける偕八雲の先程よりの嘆きに身体を疲し今  
 又急に安堵して張つめたる氣のゆるみけるゆゑにやまた九月なれども俄に産けつき果して難  
 産にて七轉八倒まで苦まをけれ八重垣水草介抱まこといかたすべさとわいてまをひけるが八  
 雲のあな苦しや堪がたやと喚嘖つしのけさまに倒れかたりて背後にたてたる明障子を瓦落や  
 々と打倒したるに一目に見渡す橋立の空も海も一面に赤赤と光りわたりて見る目も輝ばかりな  
 り北は宮津の通ひ路切戸に名高き文珠堂三角五輪と稱するは平井保昌か碑石海にさ出でて並  
 松の蒼々と連たる州崎にい滴立の明神あり石清水とよみ涌泉あり西方は栢尻村一宮大明神甕守  
 社或相の觀音堂十八間坂府中村南の方は苦棟峠男山村岩瀧村鈴峠白濱糸濱など昔ける如  
 き絶景を居ながらなるむる住家にて眺望無双の所なれば此光に乗じて見れば松の下枝蜘蛛手な  
 るもうち群鳴鴈の翼の裏までもあら見へて岩に碎る白波の零の數さへあそふべくを思はれ  
 ける時に八雲之倒れたるまゝにて息絶ければ又も歎となりけるに忽海底より龍燈出現し虚空よ  
 り大燈降り彼法器を主護すといへて漸々にちかつき來りて此家の前にどまりけるが此燈火の  
 徳にやよりけん頓て八雲は蘇生起上るとひとしく安産して玉のごとき男子を産順に初産をわけ  
 けるにそ八重垣水草がよろこひはいひつくすべうもあらざりけり此時彼病床に生あさつる冬牡  
 丹の花陸離と散たるか此日のこれ九月十六日にて彼花のひらさし日より廿日目にあたり男子出  
 生ありけるも其名によへる廿日草花の富貴を此子にゆつりて散しとれもへば此子の生さきたの  
 もまど益喜ひ勇けり港口兵衛上人にむかひていはく漸時刻移りぬれば御身は法器を携て今夜の  
 中に文殊堂に祀さるゑいへ某等は路次の警固をいたすべまといへば上人再法器をとり袈裟につ



みてこれをさしげ與三が卒都婆と魚網は後の証に我寺にといむべきとてこれを同宿の兩僧に持  
 まめ同音に讀經して出れと港口兵衛は前に立て透出けるに天燈龍燈は空高く是につきてともに  
 ゆく捕手の輩といそがしく鉢巻手襷を取捨て押張たる腕をゆるめ握つめたる拳をひらき合掌  
 して隨喜の涙を流しつ、後につゞけば村長も似に菩提心を起て後にしたかひ濱づたいに透行け  
 るに益大地睡て金色の世界となり日月灯佛名聞光佛大肩焔佛須彌灯佛の來迎あるかと疑ふばか  
 り光わかれる海面に波風しきりに鳴動して下界の龍神其丈千尋の金龍となりて出現し波を蹴起  
 水をかへして翻れば波の零の飛散も金銀珠玉を降そがごとく濱の細紗小貝の類も光に映じて七  
 寶充滿の寶を布かどわやまたる空にて妙なる音樂聞え鹽香四邊に薫じつ、青色青光白色白  
 光の蓮華を雨し五色の彩雲布滿て比沼の山のあたりより白衣黒衣の天人現じ來りて霓裳羽衣の  
 曲をなし天樂歌頌の聲微妙なり或は天津みそらの縁の衣又は春立龍の衣色香も妙なる乙女の歌  
 さゆうささゆう颯々の花をかささの瓔珞も天の羽袖ともるどもに微風になびくをあふき見て皆  
 恭敬禮拜す上人感流を流てはく文珠師利法王の化度によりて姿媚龍王の衣年八歳みし  
 て菩薩行を具し南方無垢世界に生をうくるこれ女人成佛の始なれば龍王天女文珠の法器を王護  
 するも理なりわなたふとやありがたや天人所戴仰龍神威恭敬と提婆品を讀誦しつ、遊行と天灯  
 龍燈はなほこれにしたかひもく彩雲はさまく像をなして童幡寶蓋とさしあさすかどとくなり  
 白鶴孔雀鸚鵡舍利迦陵頻伽種種々奇妙雜色の鳥孤雲の外に舞遊べる金銀琉璃の色と欺く異類の麟  
 魚波にうかまて歡喜踊踏の体をなす素衆生濟度の誓文殊の智慧をうけつぎ弘法大師感得の法  
 器の奇特あらはれて極樂國土の莊嚴もかくそあらめとれもはれて八雲八重垣水艸等は跡見れく  
 りて供養もげにもたふとき光景なり今に毎月十六日の夜半に龍燈あらとるも毎年正五九月の

十六夜に天燈大降も法器を守護のゆゑとなん八重垣が身を沈んとのぼりたる岩も今にありて里  
 人これを身投石といふなり阿漕の網をひく波のあはれは似たる物語七世の孫も聞つたふ浦島が  
 子の常世の濱内典外典にさめしなき内外の濱の松風に波しづかなる與謝の海後に文字の書かえ  
 て與三が悔どもとなふるよまいはれはかくといひつたふ

○天燈

和漢三才圖會天橋立の條に毎年正五九月十六夜一火天より降るこれを天燈といふ  
 といひり

○龍燈

拾芥抄ニ云智恩寺は丹後九世戸の文殊天籠六齋燈明を供すと云云和漢三才圖會に  
 云橋立の龍火九月十六夜の夜半の後に丑寅の方の海嶼より山文殊堂の北邊に浮寄  
 云々

○龍燈松

九世戸天橋山智恩寺の境内松樹多し一本絶て高長なるあり龍燈の松と稱す枝葉茂  
 りて圓座を載が如し絶海和尚の詩あり

碧海中央六里松  
 天橋絶勝是仙蹤  
 夜深人待龍燈出  
 月落文珠堂裏鐘

○身投石

宮津の巷より天橋立に至る濱邊に路あり浪打際五六尺許の岩ありこれを身投石  
 とす



○浮牡丹沈牡丹の考

世人浮牡丹を知て沈牡丹を知事まれなり愚案に万寶全書云浮牡丹青磁上手の物水注子あり但入臍なり浮牡丹とは内の繪紋たき上たる機あして藥をかけたる機に見ゆるものなり道具針血花生等其外いろく多し又牡丹手といふあり沈み牡丹なり唐草の紋なりといふかれば浮牡丹沈牡丹ともに青磁の一種にして香爐をかざらす方の器あれども唯香爐にのみ其名高は雜劇の所爲なりし浮牡丹沈牡丹の名ある繪紋のたかきとくばかなるによれる稱なり

小説浮牡丹終

怪談雨夜の鐘序

無情にして有情に化するものは。愚則化して益となるの類ひ  
雌形にして有形をなすものは。折枝を地にさすに自根つくが  
如し況や人の魂氣存して。異形を顯し靈をなす事各物に着す  
るの情逼する故や。蓋山谷幽陰の猿精狐怪。古家荒房の怨鬼愁  
魂俱に奇とすべく。亦奇とすべからざるものや依て今新に其  
怪を索るにあらず。需ずして諸書に靈異の證據あるを盡く拾  
鴻し命て怪談雨夜の鐘となすものならし

維時享和三亥春三月

東武 橋街逸民

十返齋一九誌







怪談雨夜の鐘目録

- 齋念成魔 鬼一全私怨話
- 妖火 護持方金話
- 狗靈 變形 啗兩子話
- 蟻 蟻首怖 念却報福話
- 岩倉 少女 通淫 怨成鬼話
- 野子 靈妙
- 造化の怪異
- 鬼没の佳言
- 再偶の奇説

目錄終

怪談雨夜の鐘

十返舎一九編

○ 齋念成魔 鬼一全私怨話

暖河の國葦原の片邊に靈岩寺といへる化城あり往時今川家尊信歸伏の靈像を安置して尤安富  
 塚榮の地ありけるが今のはや橋に舊蹤の名のと残り唯一草扉の中にして住持齋念みづから且家  
 に鐵鉢を擗て修行し且には星を戴き湖水を汲て米をかしき夕に月を賃よて薪こり柴を刈て持  
 歸り漸く壽命を完くし年頃儉約を守り質素堅硬にしてその塵を積埃を集めて終に過當の金錢を  
 倍持せり然るに此齋念性質淫色の意深く同色の浪士飯尾與惣といへるもの、養女を種に恍惚の  
 心を生じ執心の餘り累年膏血を絞りて時溜たる金錢を惜まらず與惣に與へて養女を種に恍惚の  
 引入れ人しれず房間に深く隠れて日夜この愛情に縛せられ忽持戒の要を忘れ信念を違捨し勤  
 行を懈怠して遂に破戒無慚の佛僧と犯せに至る去はざに種ははからずも父與惣が許若の金銀  
 を悪投に遣たる事なれば今更奈何ともなし難く假に身を任せ齋念に契るといへども敢て無靈の  
 患ひにあらず其上晝夜齋念が遊淫に耽され堪固くやありけん或夜暇隙あるを幸ひ草庵を忍び出  
 宿所に逃れ歸りければ齋念女の見へざるに懈轉して徑に與惣が方に至り其在所を索るに早くも  
 匿して詳に言ざれば細心癡鈍の齋念終に一心頓狂して近郷に狂ひ出會て穀食を断次第に渾身  
 瘦弱し氣力勞れて今はたゞ庵中に臥轉ひ既に命も絶なんとするにいたつて稍頭をもたげ傍人に  
 詢つていふ我不期に去て色慾の爲に佛恩を癒し奉り惡縁に導れて生涯を撰事位前の過を  
 悔るとも詮なし然といへ共如何なる宿世の業因にや今の際に至るまで是を断理する事なし願く  
 い終臨の思ひ出に今一度養女を種に面會なせば却て迷魂の念ひもはれん左なき時は愈遺憾の



情に逼て死後成佛に歸せん事固かるべしわはれ是を與惣に示し其事をなさしめたまへ左あらば我千載の命一遇にかへて得道すべしと双眼に涙を流し感々と語出るに老農夫何某枕上に隨座して黙々と閑居たりけるが頻に渠が宿業の深さを憐れむと肯ひ頼て與惣が九へ現行いふ齋念既に死に臨り彼が生前の望一度息女に請せんとを詫す足下許容なきに於ては怨恨恐らくは執着の念をして貴家親子の上に全ん是を以てはやく息女を誘引し齋念に見へしめばやく素意を達せしめて猶正言をもつて執着の念を醒し激論を擧て怨恨の積聚を解し推とき齋念その至理に感じて本心に復ん事聊疑有べからず速に其とを計ひ給へ與惣聞て黙然し直に杖を引て庵中に來り齋念に請しければ齋念病苦も忘れ忽然と起上り我望既に足れりと飛かすつて杖を引よせ鐵杖のごとき疲枯たる手を伸して五体をべつけ動せず眼中に忿怒を顯し我汝等に欺かれ累年倍持の金錢を與奪せられし口惜さよ着よ瞬目の中にして汝等親子を死地に倡ひ永劫の内俱に可寶を受さすべしと蒼々たる顔色に朱を洗ぎ眼目恰も鏡の如く巨口を開きて怒罵り轉脚踏去其氣息は絶たりける與惣大に恐悸き齋念が手をとつて娘を引放さんとするに盤石のよく如何ともする事固く唯惘然たる斗なれば杖種は次第に神色變じ一心事に現たるを辨へず聲の限泣叫べしも餘方なく僧を頼み籠を籠まめ駭者を請じて加持祈禱を修すといへども舉俱に動あらず與惣今の前觸を悔も天に浮岩れ地に橋びて涕泣愴衷の聲嗷々と傍に響き渺々たる風の音に狙の叫ぶ聲を添て物冷じき黄昏時隱山目前に暗くして古木森々と生茂りたり葉毎に微雨の音響えて窸々窸々たる庵の内與惣親子も歎疲れ兎角の手便も尽果て只忙然たる斗之時に奇哉齋念が景光生るが如く眼を見ひらき氷の如き手を伸しれたねが懐へさし入れ顔を並てつく息は得もしらぬ嘆氣の堪がたきと種忽一聲叫で問絶まければ與惣驚きかけ寄を齋念恐てはたと頭眼與惣一刀

を抜挿て立向へば齋念又頭を低て眼るがごとく支與惣今は一心を猛に激し齋念が兩手を切捨死骸を蹴倒しお種を助けて介抱し靈水を汲で面上に洗ぎ漸呼吸生て脊に負ひ心神からうして頓て家屏に立歸り徑に近郷の醫巫をむかへて治療をもとむるの外他事なし然るに或夜同邑の農夫太郎八といふもの俄に狂乱して近隣に狂ひ出人を劫し菟回り與惣が家に跳入り房間に隠たる齋女を種を宙に引提わはやくと見る間に何地へか逆行たり與惣跡を追出東西く馳り南北へ走行普く探求るといへども曾て其影蹤にも逢ざれば空く歸路に至りけるが爰に郷士何某の數中に物こそ見ゆれど灯を察て賺見るに娘に種血を吐て死居たり傍に農夫太郎八前後も知らず臥るたるを捕來つて其罪を攻撃す近隣の老若追々に馳來り太郎八を真中に取圍み先其故を攻問ふに太郎八より顛狂せし事なれば何事も知覺せず答ふるに詞出す默然と低頭して居たりけるが猶其始末を精く聞て眉を衆いふやう殊に斯る大事を引出せしこと我曾て是をしらす去にても今符合せし奇事こそあれ過刻我同村靈岩寺の門前を通行せしに骨相異体なる僧忽然と出來り我は當住齋念なり仮初の色情に心迷破戒の罪過がたく佛罰を蒙終に身を害ふといへども猶遺憾の情止すを種をして俱に冥途に偕行せんとせし所に與惣我兩手を切て女を助連歸れり猶も是に報んと欲すれ共兩手なくして奈何ともする事あたはず因是汝が支分を借受我徑に與惣が娘を打斃し怨念をばらきべしと言句の下に我氣息を失ひしと覺しが其跡は曾てしらす左いへ斯る大變を起したれば今正首と以て分説するとも證なければ奈何して脱する事の有べきや快く公廨に訴へ我罪を亂まぬへと聊も停滯なければ與惣兩眼の泪を拂ひかする奇禍はみな宿因の致す所なれば敢て他に恨なし只我々親子の罪障深きに依て此災害にあへるならんとは是より與惣漸髮し禪門に入しとなり古語に願心一癡能私怨を全の性なりとは齋念のごとき癡癡混濁して志の分れざるをい



四 ふなるべし大和物語にも死燈人の佩刀を借て敵を討たる例もあれば此事なきにしもあらず誠に  
靈異の玄説なり

○妖炎護俗持方金話

泉務場の津に高料藤二といへる富買あり數代相續て酒を造り米を貯きて生業とし家奴婢許多  
育しける中に年久敷使つる僕爲職なるもの生得頑にして廉直を守り實体堅固に務けるが去頃  
より不圖風の心地とて疾病に犯され次第に難治の趣なれば主家に能是を勞り醫を交て治を乞  
ふに暇あらず既に病危に向とする時頻に剛にいたらん事を留といへども足立ずして漸傍人  
に扶助られ便所に往て頃刻の間理より戸閉居たりけるが俄にして喚叫聲を聞家族等驚き馳寄て  
是を見るにはや事斷て如何とすべきよふなく本の扉間に抱來り徑に親元へ告しらせ主家格別  
の憐愍を以て葬送の備厚く取行はせ猶喪中の祭事營の料を附て懇に扶助し畢ぬ然るに渠便所に  
て死たりとて家族恐さすくあらぬ奇事評説等を云觸し件の便所に行者一人もなかりけるが或  
日家内に吉事ありて賓客を儲酒食出し飲用を催し終日終夜歌舞吸彈の遊宴交にして既に酒盃も  
納りければ頓て興尽客も別を告て退散し主膳も舉家の勞を謝し畢て臥内へ入休息しければ忽  
窓前に婢女奴僕ども奇集殘肴を調へ酒宴をなし思ひの儘に笑談して夜の更をもしらすりに折節  
窓前のあなたに一障人の叫聲聞ゆるに驚き誰ぞといふに扉入を見れば彌六といへる下男なり顔  
色を變聲振して我今怪異に出合たり過に嘉蔵の死たる厨の中に火の燃る体なれば不審思  
ひ何心なく近寄て窓の外より伺ひ見しに鬚髮の男色青さめたるが内より手を出して我顔を撫た  
るに驚き聲を擧て逆歸りぬ今思ふに過去し嘉蔵が面色に紛なしと齒の根もあはず寒戰して物語  
るに酒もさめ興盡て歎息し器俱に賦々たり此に一人性質狂なるを嫌ひ剛強を自負する五郎八

といふ者推出ていふ夫怪の已が心の臆するに因て向ふ是必定狐狸の形容を變じて人の虚を欺り  
す物なり我往て其眞假を糾すべしと酒狂に乘じ威ひ猛に躍出て件の便所に馳入ぬ家族等臺所の  
端居に集り其動靜を伺ふ所に稍久敷なりぬれ共五郎八一向に出來らず奴僕等不思議に思ひ手燭  
を携一同に往て便所の戸を開見れば五郎八仰向に倒れて氣絶しかれり頓て扶連歸りて滿面に水  
を注ぎ大音を激して呼生けるに漸して氣息本ふ反しければいかにと其奇事を問に五郎八い  
ふ憲に我よしなき血氣の眞にはやりて此懺悔を引出せり初は何事もなかりしが頻に嗅香鼻穴を  
貫り堪がたきに依て出とんするに身体すくも手足任すこはいかにと兎角する内大に晒聲さこゆ  
驚て是を見れば剛の壁上に眼つきて鏡のごとく磨き口を開て嗅氣を吐事煙のごとし於是我  
氣息を失ひ其餘は嘗て知得せずと渾身に汗を流し眼を睜して是を語る固より富家の事なればか  
ゝる異説の世に流布せん事を嘆き貴僧を招て亡靈を慰するの佛事を營み修験者を請して加持祈  
禱を修すといへども供に應驗非す爾るに其年舉月の頃連日大雨降續て諸方の河々堤を崩し洪  
水溢れて市中を浸し己に家毎の壯上に登りければ各安き心もなく二階に籠居し其鬚を待のみな  
り這時彼使所も水に浸壁落柱ゆるみ貫はづれて簷々に流失たりける洪水治て後の便所の跡に  
は糞土に埋れし一瓶のみ土中に残りその夜よりして此便所の跡に妖炎燃出忽大どなり忽小ど  
なり勢弱として且消且燃終夜人を駭慄せまむ因是再ひ主家金銀を措かず僧侶に施し偏に五  
郎八が妄念を宿るの死事怠慢なく修行しけるが或夜主膳次が夢の中に亡靈の顔容あらはれ潜然  
と隣席しいふ我稟性痴鈍にして頑に邁り猶萬事に質素を守り一錢貳錢よりして終に方金十兩  
を貯持しが計ざる病に犯され死期に向つて我膏血の貨人の手に渡らん事を不意なく思ひ是に執  
着して遺感の心堪去餘り病中褥の下に伏置たる金子を暗に取出し便所に持行錢らず香て腹中に



新しゆへ積く安堵の憶をなせまが俄にして腹痛起り煩満を大に瀉下し數日に及び件の方金糞土  
 の中に落入りを取上んとして倒伏たるが其儘に息絶れば扱こそ死後に迷惑の念宙宇に流轉し  
 夜毎に魂魄彼方に顯し憶念愈々遍存してかの方金の人手に奪とられん事を悲み悼みかゝる怪事  
 をなすに至れり然るに今主家の高恩に依て水陸の法得に遭ひ 忽罪業消滅之佛果菩提を得るに  
 至る由 是其金の空しく糞土に埋れん事を悼みて主家に告せんと假に是に 歸たり去にて  
 も我鄙情の拙きにより縁の金子に執念を然せし事の 辱さよと慚謝して涙滴がごとし主夢中に  
 感涙を催し凡物に執着する者 和漢新古に其例稍からず然りと 雖汝今從前の 禍を曉り憶  
 念と放下し六根の罪を滅し懺悔して佛果得道に歸せんとなす佛名經に一寸の懺悔の紙燭は千年の  
 明を照し千里の外に積累ねし煩悩の暗といふとも芥子斗量悔の火を移せば 悉く燒尽さといへ  
 り此意を賦に

霜結ぶ霜にたどふる罪なれば朝日まつまを嘆なけり  
 新悲情に示し畢て夢覺ければ惘然と奇異の思をなし翌日奴僕に支令して便所の壺中を掘反させ  
 集して方金數粒をわたり則且寺に納させ猶佛事供養深切に執行ひ墓を築き香花を絶さずして永  
 く亡靈を慰しと言傳ふ去はるに願効々鈍の一莖なるは死後輪惠の念を全といへり凡て古家荒  
 廢の舊跡に 惘然魂鬼火の怪異ある事はかゝる餘殃の例なるをや

○妖怪變形 兩子話  
 天文の頃西國の探題宇佐美家の藩士齋藤内膳助佐友なるもの累代主家に忠勤あつて莫太の采地  
 を領し威權他邦に榮耀なり然るに此佐友に兄弟の娘あり姉を玉笹といひ妹を小路と号て寵愛優  
 劣なく死中の花に 掌を并して風を厭ふ兩親のいつくしみ深く長成の後兄弟ともに器量完く端

正絶美のづから備り歌聲吹彈に妙にして心榮も優なりけるが姉玉笹年十八の春より心地何  
 となく 勞 敷深窓にうち臥ければ父母の悲嘆いふばかりなく醫を搦み託すれ共驗あらず此に你  
 女許多あるうち吉と云るの平生玉ささが意に契ひ寵遇他に異なりければ吉もかゝる折にこ  
 そと晝夜傍に附そひて病苦を慰め介抱しいと 忠に仕ければ病者は固よりその父母主家の覺厚  
 く萬事に吉なくてはと何等の事も彼に支令し置ければ衆女是を憎み密々に讒言を構へて罪に落  
 さんと謀と言共玉ささ曾て是を容す后には房間に餘人を遠ざけ只か吉一人のみ枕上を放さりけ  
 れば 愈衆女快からず頗にねたみ 憤りけるが其比誰いふとなく吉が爲休心得がたき事あり  
 とさまゝ 奇き風聞有ければ傳女等暗に商 量し或夜深更にかよび玉ささが寐所に來りて次の  
 間より伺ひ見るにきてこそ奇怪の事社あれ性質美麗たるる吉が面色鬼女のごとく首髮 逆立眼  
 光り巨口耳の際まで裂たるが煙の如く息を吹て玉ささが肌に寄添 紅の舌を動し嘗過して完爾  
 と笑ひたる景光殊に身の毛よだちて視るもの 魂を飛ばし色を失ひ恐坐して猶も其動靜を伺ふに  
 玉笹は只熟睡して是を知らず衆女初て此怪事を見るよりいかゞはせんと 騒ぎたつを扇岩越制し  
 止めて今急迫に是を捕へば玉笹の、身の上立所に虚事あらん今宵は先隱便になし夜明なば  
 此吉が油断を討取べしとその夜は寐所の次の間に衆女潜然と膝を交口を結んで終夜是を守り明  
 れば早々佐友へ斯と吉す佐友夫婦は玉笹が愛に溺れしより吉が日頃の誠忠なるに心を奪れか  
 する怪異は思ひよらざる事なれば 忽狐疑を起しひとへに衆女が鄙情より出たる偏執とのみ心  
 付この 訴を信用せず 遮てこれを諷る者は却て佐友夫婦の意に叶はず目通を遠慮すべしと主  
 命の重きに寄 各心中に怒恨むといへども奈何とも詮方なく猶衆隣區々成然るに玉ささ、病氣俄  
 に變じ醫療を待はず卒去しければ父母の悲傷大方ならず吉も俱に聲を放て前後を亡じ衆女諸共



其夜ハ遺骸に傳て眠々とふし沈み潮泣してゐたりけるが稍更渡り秋風窓の隙子に音信れ雨を  
 ぼふりて木のづから凄冷たるに衆女の獨らず眠して餘念あらず只れ吉のみ忽然と起上り忽  
 嚮の形の如く鬼女と成て玉さしが死骸に取つき牙をならし骨をかみ血をとりりてあな味やど笑  
 顔する聲岩越開つけ馳入て此体を見るより懐剣をもつて是に向ふにれ吉怒の面色に朱をそ  
 き岩越に飛かゝるを拂退て一刀切るよと見へしが其形勢驚と庭前に荒出消伏す佐友新と問より  
 急ぎ來て吉が宿所に人を馳て見せしむるに奈何しけんはや空居となりて近隣に需むれども曾て其  
 行方を知者なし惜しも斯る怪異の其所以を知覺せず商議交にして各奇禍にあへりとのと云  
 終て送葬と營謀て佐友夫婦は平樂に玉さしを失ひたるを深く嘆き憤るといへ共奈何すべき今  
 更衆女が訴を聞ざるを大に悔と於是其咎を赦さ衆女を宥て出仕なさせむ然るに又妹小露風  
 與病に臥しけるが標体玉さしが病症に違ふ事なければ佐友夫婦層々と慄慄悲傷し神佛には應願  
 を能すれども甲斐なし其上奇き風聲のみ區々なれば傳女等さましく心を附て日夜病間を守居  
 けるがある夜五交比に小露假にして大に喚ぶ衆女驚き屏風の裡に窺入てこれを見るに何地より  
 か來りけむれ吉以前の魔鬼となつて小露が咽に噴附嗽々骨を嚼ならずにははやと人々銘々  
 期したる事なれば一齋にかつて打屠んとひし免くにぞれ吉溜然と怡悦を嬉まや日頃の本懐願  
 時に足怨恨積聚散去たりと笑ひ罵り跳出るを衆女支て取圍に其影飛鳥のごとく人の眼をくらま  
 し荒出るを留め長刀を取のべ飛か、つて切倒し灯を點じて是を視るに正しく手ごたへはせ  
 しかど更にれ吉が影も闇も非ざればこは奇なりと猶左右を點檢するに唯赤き犬の首血汐に染り  
 て残りたり佐友かゝる始末を聞て大に嘆息し頃刻あつていふ寔に恐るべきは物を殺すの至報なり  
 今この赤犬の首に懸てはじめて此怪事を知得せり其首玉さし初雅の時異疾に遭り右の股の上に

毒を生じ瘡して忍ぶべからず刺妹小露も其疾に觸て同く瘡を惹ふるにより衆醫を交療すれど  
 も効有ず其時我領に以爲獨異志に曰瑯琊と云所に一女子有年頃ふとも、の瘡を愁ひ華佗を迎て  
 治を索む佗その脈を診ていふこの疾針藥の及所にあらず吾術をも侍て治すべしと其家人に致  
 て曰赤犬一疋を需得て是を馬の脛に繫ぎ馬を走行しむる事五十里にして即犬の頭を断て此瘡  
 さ取に向はしめよ其父母喜ひて是に従ひ其如くするに忽然瘡中より蛇の擗元を引出して其病痊  
 る事を得たりといふ因茲我玉笹が病症を診察するに瘡中に物あつて皮の下に動くを見る故  
 に佗が言を合せ見るとさハ強其事なきにもあらず摘青雜説に曰夏月蛇交合の時精液草中  
 に滴落其遺毒に感ずるものは瘡の中に蛇兒を生ずと詳に志したれば偕こそ玉笹庭苑の草中に  
 遊行して此病を受たるならん上件華佗が一方のごとく我赤き犬を拿來つて既に馬の脛に繫ん  
 どする時此犬殺さる、事を悟えやとん頻に腹をかへて涙を流し詫る体に克々視れば懷孕産に  
 近き雌犬なり我不便には思ひながら我子の相情にひかされ終に其犬を馬につけて走らせ首を  
 断て是を用ひ徑に兄弟の娘が瘡疾を痊すにいたる因てこの餘殃今まで報ずるの便を得ず假に你  
 女と變じて其序を伺ふ所玉笹が病に附込かゝる怪事をなしたるならん畜獸といへども其念慮の  
 業通なる兩子を啗て本に復し其首のみを残したるは希念をばらして餘念なき着想の違一なる事  
 其例なきにもわらず名醫類案にも廣き狗の形を變じ一婦に害をなしたる始末寔に稀代の至變な  
 りと佐友前禍を追悼しよしなき我物の命をとりしより却て兄弟の身に報ひ其業の最期を遂たる  
 は偏に是積惡のなき所にして敢て他に恨なしと彼狗の首を斬り墳をたて、水陸を修し供養まけ  
 る世俗に西國の犬塚といへる其遺骸は是なりとぞ

○ 越前首飾念却報福話



九州池の侍臣磯貝平太左衛門武運なるもの農祖より相傳へて弓馬の道他門に精鎗術に精く代力量の血脈連綿とまで雷名頗遠近に漏達し永京の亂に屢武功を露して各國に威を震ふといへども主家終に大内義弘が爲に滅亡せしかば武運それより薙髮して回龍と名乗空門に入て斗毆行脚とて、ろざし面に息紗を着すといへども性質は往昔に變らず剛強狼戾にして深山幽谷嶮野といへども夜に入れば草を舖て安宿ま吾妻の方へ杖をすしめて出行るやに甲斐の山中に至り既に日暮ければ岩上に袖うち敷て木の根に枕し寛々と安臥し居たり時に樵夫とあはしく身に綾衣を引まどひ柴を束て負たるが忽然と出來り回龍を見ていふ足下何人なれば斯る山中に奇宿して惡獸の害を恐れざるや回龍は我雲水の旅客なれば行路難の山川にあらざる事を觀念法惠者を好で行とすればあへて一命をも惜むに非ず去ながら武門に生立聊其藝にも達りたれば向を徒に畜獸の餌に遣んや是を以て奈何なる邊土國癖の地に臥せども曾て恐る事なしと樵夫いふ賊に御坊は狼戾なりされと君子の危に近よらず好で怪を索給ふは眞勇丈夫の所爲に非ず我茅屋いふせくはいへと投宿あつて羈旅の勞を休給へと悲情他事なく聞へければ回龍怡悦しさあらば足下の詞に従ひ一夜の報讞に預るべしと打連て九折の道をたどり岩角を鑿り木のねを傳ひて頓て一箇の斃室に着り視るにいかにも古木蒼蒼て寂々たる軒庭の邊篋つたふ水を結て足を泛ぎ竹の編戸押明て内に入るに男女四五人打撃て摺折くべたる圍爐裏の火にまたがりながら回龍を見て膝を折手を束ねて躊躇回龍主の承仕應答尋常ならざるを感賞し其長成を商問ふに主いふ我く此山中に隱遁して學家五人糧を嚼み水を呑て群に壽命を繋ぎ潦倒の住居をなすといへども以前に當國の主將に仕て肖ならねども重役を勤聊弓馬に名たる者の嫡孫なり我暗昧にして父の家業を受継しより色に耽り酒に溺れ剩餘人々を欺くの舌頭に載られ無名の刑罪

を管内に施行し人をして打屠る事幾許の數としらず其積惡のなす所にや今身に報ひて如斯き落し雜戸に墮人千辛万苦しわはれ再び父祖の家名を起さんとするに不期の故隙出來りて兎角心神を安んずる事能はず因茲かゝる罪障の深きを愁ひ前禍を追悼のあまり山中通行の旅人を止て是に供養し懺悔滅罪の功德を仰ぐと回龍聞て實さる事もあるものなり凡稱善に餘慶積惡に余殃ある事唐書曰雍州の孝政が密峰に湯を泛て其仇に没落し又類篇に梅香は龜を活して熱病を瘥したり鳥獸虫魚といへども是に報ずるの速なるは則天吏の默報なり況や萬物の靈長たる人間に於て其報を全ざらんや北辰神呪經に曰暴虐濁亂にして諸の群臣を縦にし百性を酷虐せば我能是を退け賢能を召て其位に代んと是を以て見る時國王の時に非ず諸侯大夫士庶人といへども怨枉を保民物を枉無名刑罪を施し人を殺害せしむる逆罪争其報を免る事有んや阿含經に懺悔の二字を解たるは懺悔の意なり足下今往を改め來を修し懺悔懺悔し滅罪の功德を願ふ近ころ奇特千万なり懺悔因に諸佛を請じ終夜讀經念誦してその願を祈るべしと對話數刻を費し頓て回龍別間の端居に出て安居し一心に經を讀鈴打ならし信念動行の聲稍きも絶間なかりけるが夜も深々と更渡り清風稠木のうちに戦ぎ月光露のさらめくに移りて虫の音冷々と心耳を澄し鏡の水の歴々たるに回龍頃刻讀經をといめて感情を催し猶左右を顧るに翠家靴のづから閑寂にして各睡眠の体なりける回龍茶水を需んとて何心なく破襖引明勝手のかたを徧見るには怪なるかな主を初め宅眷すべて五人ながら骸のみ臥てその首なし回龍懈轉まかゝる奇怪は正敷狐狸の我を誑すものなる歟但まはかの傳聞轉首といへるにや搜神記に曰戸頭疊あり頭飛去て後其身を別の所に移せば頭蹄て三度地に落息喘急にして死すと謂り診に其如くして慰んと探寄て主が骸をひき起ま壯前に持出投屠て猶その動靜を點檢せんと暗に立出爰彼所を伺ひ



見るに宿庭をはなれ玄樹林のこなたに人の聲して虫物をくらふ五つの首あり主の首さしやかに  
 云やう今宵の旅僧こそ全身肥盛んにして是を暗に恐らくは胞滿せん我なまじむにいらざる事  
 を不問語仕出して集経をよみ稱名を唱ふる故に近寄事叶がたく空く彼を喰ふとの延引せり最早  
 旅僧眠りつらん誰か見届来るべしと詞の中より一箇の首點頭して忽に飛去稍あつて立歸りい  
 ふ旅僧如何せしや別間に見へず其上何者の仕業にや主の身体是なしと急に告て走去主の首大に  
 悲傷慟哭しいかなる事ぞや我身体を失ひなば再び合する事叶はず既に死に臨むの外なし必定彼  
 旅僧が所爲に紛なし我俱に集を死地に誘引せざんばあるべからずと忿怒を顯し飛出しが回龍傍  
 に肩背し居たるを見つけては旅僧こそ爰にあれと五箇の頭一齊に飛過るを回龍手頭の樹木を  
 引抜打撃て前後左右に難過る威ひ猛に激しければ王の首忽に打倒され残りし首も一同に逃去  
 れば回龍然とものと弊室に歸り見るに舉家者皆俱に其頭本體に復し居たりけるか回龍を見て  
 あな恐し今法師こそ又我くを打斃しに来るなれと狼敗し逃惑ふ回龍靜に頭陀袋打懸杖を  
 度てたち出るに主の首再び飛出汝我身軀を屠りしゆへ我本に歸る事能はず看よ汝が首筋より喰  
 切其五体を奪ふべしと牙を嚙て喰付かゝるを打倒せば飛上つて回龍が袂に喰付敵とも放れず突  
 ちもたゆまず唯其儘に死たりける不敵の回龍わざと其首を袂に附て事どもせず我徧參の家土産  
 斯る怪異に出合たる其證に携ん事究竟なりと強而是を取捨す自後信州諏訪に至り終日城下を  
 徘徊せしに往來の男女回龍が袂に生首の下りたるを見て各怕れ魂を飛し神色を失ひ逃走る  
 官吏の諸士此体を不審回龍を捕ていふ汝何里にてか人を害し逃きたる者と覺ゆるなり有体に申  
 べし陳防せば果饒の誠にかけ糺明すべしと捕吏に命じ官府に率んとひしめさける回龍人く  
 を宥て怪異に遭ひたる始末を詳に物語るに猶其分説不審なりと聊も信せずして捕吏既に攻

單んとす其理頭取たる侍回龍が袂に附たる首を更見ていふ殊に旅僧が分説分明なり南方異  
 物志に曰飛龍は頂に赤痕ありと今此首に赤痕あり甲斐の國の山中にかゝる奇怪ある事粗風  
 聲に聞へたり去にても希代の騎勇法師の所業にあらずとて其長成を訊問し官吏に偈ひ吹擧して  
 褒賞を興へければ回龍面目身に餘り國主の仁慈寛容なるを感許してそこを立上州路へさしか  
 へるに或山中にて盜賊に出合運に酒錢を乞はれて回龍いふやう我一所不住にして樹下一宿の觀行  
 なれば何ぞ路金の時あらん餘人を待て乞ふまど索笑きて取敢ざれば賊怒つて汝否も事なかれ  
 我黨一回舌頭を動して空くせし例なし路用の過餘なきに於ては着類脱捨通るべしと聞より回龍  
 態ど其意に應諾し鼠色木綿布子を脱捨左あらば足下へ興ふべしと差出したるに賊徒其袖に下り  
 し首を見て大に恐怖し汝桑門の身として人を害し怨恨をひき斯の如く頭に念慮止り汝に附添も  
 のならんぞれば是を晏然と着しれるは誠に不敵大膽の法師也我其強勢を感ずる餘り我衣服をし  
 て是に交んど賊が着たるを回龍に與へかの鼠色の木綿布子を賊引とつて是を着去我黨累年此業  
 を以て事とするに人を怕れしめん事かゝる衣服の怪異にこそ言ずして強を示す究竟の一物なり  
 と猶回龍に方金を與へ道路を送て立迹しむ回龍心中に思はざる怪事より彼是徳附たるを喜び幸  
 にして役害物を讓たりと拈笑して立別れぬ此賊后に甲斐の國に至り回龍が話に據て其影跡を尋  
 るに如何しけん荒廢たる空家のみ残りて其人もなく其源を知る者もなかりける賊かの首を土中  
 に埋み墳を建て今も甲斐の山中に轉轡首の境とて艸莽に殘れりと言傳ふ猶此ろくろ首といふ事  
 元の陣争が記事の時に曰  
 鼻飲如三飯瀝  
 頭飛似二龍鱗

是南方戸頭變の詩なり依て其号此に本くものならん又瀧涯勝覽の落頭民本草綱目の飛頭變其外



博物志星差勝等に相記す所なれば敢てなる例にもあらざる入し

○岩倉少女遍淫慾而成鬼話

いづれの頃にや有けん紫陌岩倉の片邊に池澄何某といふものあり原は禁闕北面の武士たりしが子細あつて潦倒の身と成愛に隠逃して膠傑の住むをなせり一人の宗女小櫻なるもの天然の美色秀異にして且敷嶋の道に精々聰明伶俐なりければ視るもの情を動し聞く者想ひ寄ざるはなかりき然るに此小櫻も亦淫色の情深く普く近隣の美男壯士に心を遣はせ彼となく是となく忍びぬの枕の敷はうかれ女の夜毎に替る波のうさねにひとしくして果はその男とちの争論を引出しぬ父母是を歎息し或ひは怒りあるひは教諭し連に商解すといへども敢て容す只強淫にして一心狂亂のごとく夜なく遠近に迷ありきて其男とち忍び逢ぬ去ほごに小櫻はつとなく腎氣弱絶し精神勞鬱極して忽病の床に沈み次第に身軀疲弱し醫療驗なくして終に空敷なりければ父母の悲傷いふばかりなくその業因の深甚なるを想像して且寺に厚送葬をいとのみ猶僧侶數たに布施を引て懇に佛事供養し棺の傍土中に遺骸を埋め墓を建て只その影響のみ残りけるが其後怪異の事こそあれ小櫻が亡靈浴中を徘徊して諸人に災害をなすに至ると誰いふとなく世舉に流布して其輿論區々なりかくて其比花房家の雜掌に大館采女といふものあり天性美男のはまれ高く悠備にして克和漢の文に達し且淫樂を好み常としけるか此程不慮の病に罹かされ渾身漸々に痰消えければ宅眷驚き醫巫を交治と乞に効あらず然るに此采女夜毎に人を遠ざけ曾て病架に昇らざる獨懸然と寐りやらねば家内舉て是を奇みある夜深更に近づき采女が父彈正なるもの暗に病架を伺ひ見るに骨相蒼々たる鬢髮の女白衣を着してさも疲枯たる手を伸し采女が肩にうち掛て臥居れり彈正大に恐怖しては如何なる事ぞや是全く精神衰乏の時に臨て邪奇の爲に犯さるゝも

のならん凡人の臥て其形兩人となるものは醫書にいへる離魂病なりそれには異なりといへばすて人の肝に邪を受ず臥時はその魂肝に歸し神靜にして克眠ることをなす今肝に邪あつて魂歸ることを得ざる時はかゝる靈をなすといへり去にても難治の症奈何すべきと遠近に良醫を請て託するに功あらず其比如斯奇疾を愁ふるもの異ふるに違あらず病者夢中に異形の女と交結の因を結身体勞れ鬱と相煩ふ是を世俗に離魂病なりと誤り粗宣言して各神に祈り佛に供養し此怪病を僻んと欲す或道人曰この奇疾左にあらずそれ離魂病は心肝虚耗の症にまて外人の目に見ゆべきものにあらざ只病者自身の外に身ある事を覺ゆるは心肝の虚より生ずる症たるに依てなり今流行の病のときは能衆人の目に遮り殊に一人は女なり是離魂に非ず全く池澄何某が娘小櫻が執念のなす所なり渠性質淫慾を好み過度に及て命を失ひ普く世界の美男壯士に恍惚とし遺魂の情を残すがもへに亡念止りさてこそ此邪崇を人に受さしめ男女の情を断理せんとするものなり是己が偏執の深きによつて斯る害をなすに以たる我諸人の爲に此邪崇を断べしと自遣人敷多人を率てかのこざくらを葬りたる化城に着り卒都醫の面に此三字を認めける「水てし」群談採余に此文字見へたり如此記て墓の前に建置衆人と俱に傍に藏れて稍様子を伺ふ所に其夜五更の頃及白衣を着せし異形の女馳來つて此をとほを見よりも忽醫髮逆立眼をいからし威威煩満してこの何者の所爲なるやわれ意の中に入らするに斯る卒都婆を建置てこれを阻む奇怪さよと大に罵り咬牙齒齧して彼方こなたとかけ廻り果は大地に倒れ伏て泣叫ぶ聲嗽々と物凄し時に不思議や那里ともなく感風秀靈たる壯士各甲冑に身を固め劍戟を携大勢一隊に競來つてかの女を取圍み雷聲を發していふ我汝が邪淫の爲に今や一命を失はんとする際に至れり此無念骨髄に徹して忘がたく扱てその仇を報するなりと銘々鞭を擧て攻擧す女は困臥し号



哭してあな苦しや堪がたや赦させ給へど前邊を悔み運に慚し嘆き詫るといへども是を容す思ひの儘に呵責して既に本望足ぬ今こそ原に歸るべしどかの壯士等忽然として形容消失ければ女も行方なく只冷風颯々の聲人々の肌に亘り横雲東は柳引晴の鳥告渡るに驚き各木蔭を立出固にかゝる奇怪を目撃せること古今未曾有なりと語合打連て歸宅しけるが自後してかの流行の奇疾を愁ふる者舉俱に晏然と快氣せり後に或人道人に問て曰嚮に小櫻淫色に溺れて死後執着の念宙うに迷ひ普く世の美男をまたひて是が爲に害をなす亡靈の所業その遺憾に着するの心よりかゝる怪事をなすこと左も有べけれど今甲冑の壯士なるもの小櫻を撃て報執の懷をなせしと云たるは將に是何人の怨恨ならん女が邪味に犯され苦めらるる病者少からずといへども皆いまだ遺命を害ひたる者を聞ず然らば其念慮の外に形をあらひすべき所謂なし因て其原を解し給へ遺人いふ是腎神なり病者相俱に小櫻が強淫に煩され既に腎氣の衰乏せしもへ病者の腎神外に形を顯し其政を打たるものなり凡て人の腎氣窮絶する時の神倉を守る事能はず外に形私あらはずなりと癸志及名醫類案に詳なりといふ固に恐るべく慎むべき色慾の一莖にして嫉妬の鄙情とひき出し人の天年を悞ことをも願ざるは着するのこゝろ深甚なるに仍てなり勉て佗際する事なかれ

○囁中怪異

人として色慾の私に溺れ天然の生を傷天折の患父母の悲傷に預る事不孝とや云ん不順とやいはん務て慎べき淫惡なりされど是が爲に實有に着し眞誠を竭す事人情の常倫なり此に泉州堺の津に岩城守司といふ者あり本原は九州大内家の侍臣たりしが子細わつて國遠し此に來つてはや十年余りの星霜を積で聊劍術柔術の門下を築指南して生業とす一子東太郎な

る若天性美風にして其上父が家業に精しく時歌の才又絶倫なれば父母の寵愛殊更なり茲年十七の春一腹なましめあはれよき仕官の身ともなさばやと枯木に花咲行末を樂くらしけるが其隣家に又尾西何某といへる豪富あり義女一人を持ちまはめて器量衆に勝れ艶然と輝媚にして意も悠に優しかりければ東太郎運に是を懸想しいつしか互に情を通はせ人目を忍びて鴉鶴の奥淺からず今のはや深き思ひの川の流も帯どなり高き山の砥となるとも變らぬものをと誓約をなし外見を省く裏傳ひに深窓を慕ひ契るといへ共しるもの更になかりけるが阿漕が浦にひく網の夜毎累る稍語遂には兩家の耳に入擧家の沙汰も區くなれば尾西かたに年來舖の支配を預る宗右工門なるものは是を聞て大に喜び隣家の子息性質敏給器量骨柄尋常ならず當家の業を襲ふとも尋常ならぬ人体なれば急ぎ配偶のこゝろをなし給へど主夫婦に是を薦む實もど全家うち器て共事に決しければ順て宗右工門東司に請しその偶を頼に需む然るに東司以爲我こそ斯流浪者市中に朽果るとも堅子東太郎が器量一を聞て萬を貫く博智多藝の生質なればよき主家を索せ復て農祖の家名をも引興せんと思ふなればなとて商家に偶を組んど只願に回辞えて是を許さなければ妻女なる者兼て相應ふ双子の心を想像て夫東司にそのとを語聞せ若心なく其中を引放は少年一徹いかなる愛事や仕出さん其後に途で悔ども詮なければ曲て是を免し給へど理解を示きて進むるにぞ東司情思惟して相憐の情も黙心がたく然らば尾西が美女此方へ迎へしと頼て共事を云送るに獨娘のとなれば他へ出す事は及がたしと兩家齟齬して決着せず娘れみよは是を嘆き寐食を断て深窓に打臥しければ東太郎も心ならず或夜如何して忍びけん娘が枕上に音信ていふ連も親親の許容なきえにしなれば此にて添ふこと語べからず何れなりとも身をよせて俱に偕老の行末を快くすべしと兩子潜に相談きて爾より家居を忍び出夜半にまぎれて奔走しはやく



も運葉の街に於たる此にて明旦ければそこに旅の調度取した、め東をきして下りけるが其頃には豊臣家天下草創の後にしていまだ先亡の餘類愛彼所に歸起し世の中穩ならずれば街道の家屋も所まばらにして山賊強盜途に溢れ符券の旅人を驚す爾るに東太良美代はならぬ旅路も念力の一條にてすでに駿河の國岡部の驛を打過て宇都の山にさしか、りけるとき日色西山に落て夕月の影はのくらく清風蕭々として啼遠の聲耳にひびき凄冷たる道路の傍に六尺有余の凶賊白刃をふつて踊出東太郎に依て酒錢を乞ふ東太郎わざと氣息を劇し汝山賊我道路を遮て死地に屬んど欲するや斯女を連たる漂泊の旅行路用の時過分にあらず速に道を開よ遲滞せば打斃ん賊徒嘲笑ていふ汝若輩の身として斯る放言を吐こそ奇特なれ我舊來爰にありて強盜數千の首領たる西國太郎重明なり今我黨に向つて一言の舌頭を反すもの海内に覺なし地理不案内の汝等夜に臨んで此地に履を入ると自業自滅の期にこそあらめ潔く路金を出し其存命を悦べし東太郎稍も懸せず少年なれども聊腕に覺あり得こそはやらじと敵てかゝる手練の働卒々として一身雷光のごとくなれば太郎の中に恐れし勇を揮て相戦ふ一人の賊鬪口を窺ひ鐵杖をもつて東太郎が不意を撃東太郎これに堪かね展轉して氣息を失ふ美代の始終悲憫き只周章狼狽去て居たりけるが是を見て駭奇大に慟哭し前後を亡じ泣伏て正体なければ太郎れみよを引起してその相貌の奇なるに忽愛情の心を發去有一を云せず宙に引立下賊に指揮して東太郎が負たる服紗包を奪とらせ深林の中に入て其趾を隠し失ぬ少頃あつて東太郎氣息反して傍を視れば美代も見へす用意の包も紛失しければ大に忿怒の齒噛をなし斯ては活ても陰なき一命死て其體を報んと既に身害と覺悟せし處に忽焉として一人の旅僧出たりこの有さまを看て其故を詢ふにしかくの有様演舌しければかの僧運に東太郎が死をなだめ有爲轉變の世を示し悲過歎有の理を

解して一別一過是輪廻の如くなれば生を休てその時を期せしかずと一言の下に東太郎を歸伏せしめ自後此僧と打連て吾妻のかたへ赴きける儲しも光陰卒然として一飛の峻波似たりとかや其歳も暮て次る年の春聊の知音に因て東太郎仕官の身となり固より資性博智にして其上武術に精しければ主家の寵を蒙り運に榮達登庸を始て東に寐食を寧して既にはや十年あまり七とせの星霜を経るに至つて頗に本貫なつかしく宿疾と披露し有馬温泉の事を訴へ主家の免許を蒙りて旅の紐ひ往時に變り數多の從者を前後に列ね其途中頼に懷舊の情を起し過しれみよが死生を想像するに絶すしてかの宇都の山に程近き手越の旅亭に投宿し東太郎其主を招寄て潜に云累年此邊に西國太郎といへる強盜あつて旅人に害を施すと其沙汰遠近に追て我是を聞事久し今も斯る事ありや主應ていふ固に君の命の如く今以て其とあり此さき宇都山に徘徊して普く街に業惡を施し侍るといへ共以前各國鬪争の半にして是を制するに便を得ず今世治て豊臣家の仁惠世に布及ぶの時節なればあはや此もの誅に伏して旅人の災害根を断に至るべしと人皆思ふ所に今以て其とに預らざれば彼爪牙愈強大にして以前の跋扈に倍せりと云東太郎復彼が巢家を尋るに主答て鳥だにも通ぬ深山幽谷の中近寄者は是が爲に命を喪んとを恐て敢て其踪跡を無死に着たる事必定なりせめて其遺跡に墳を建僧に供養し亡靈を慰めん爾より此に滞留し宇都の山の麓なる靈應寺といへるに託きて水陸を修行し懇に佛事を營けるが其夜後更の頃旅亭の門に音信る者あり奴僕出て戸を開くに一人の婦女東太郎に謁せんと乞ふ徑に容問へ請ト入て是を視に以前別れし美代なり東太郎大に驚き寔に斯る奇過は千載の一遇赤繩の縁尽ざるにやと涕泣すれば女も兩眼に涙溢れ把上に滴て前後を辨たず伏枕居たりけるが稍有ていふ尋別



參らせしより首領太郎が懸幕に憫み本よりなき身と覺悟せし事なれば其坐を逃す自害して草葉の露と滅はべれと只君の光景のみ忘れたく執着の念宙宇に迷ひいへりまに今斯此に來り給ひて我なき跡を訪給ふはわらはが念慮の通老たるにや再び見へまいらするは實に蘇生の懷なりと迷ふ皮肉を絞るが如く紅涙數行に及びけるが東太郎退て思惟するに目下かゝる奇怪を見る事の適しく我愁傷に依て心神の虛を伺ふ狐狸の所爲たるも計がたし死たるもの、再び出べき理もあらざれば英勇丈夫の迷ふべきにあらざして乍一刀を搦て是を刺に其形容雲霧のごとく倏然と消うせければ東太郎夢の悟たる如く劍を以て刺洞たるは見覺あるに美代が小袖記念斗を殘ける東太郎大に號哭し以前彼が着たる衣類の此に殘たるは狐狸外邪の業にも非ず着想の一途なるに再び其形を現したる斯る奇表は相意心の感じたるにやかくと老らば面影なりとも止置て此身の愛をも話んものをよしなき我疎忽よりこの殘懷を引出せしと壯前に駈出爰彼所を求め共更にその影光もあらざればよし此上はかの賊首太郎が栖室を尋て搜索め女が仇敵報せずんは有べからずと其夜徑に臥内を抜出前後を辨せず只獨宇都の山に馳つき既に反覆に至りけるに以前に變らず賊徒數輩出て道を阻む東太郎心中に思爲斯の如く多勢を相手に仕損せんも無益なり稍く謀略を施して本懷を達せんと於是意簡なく懷中の遠金多分を出して是を取せ言を飾ていへ我過急の所用ありて晝夜を辨せぬ旅行なればかゝる奇禍に遭と自得るの宿業たり仍て一言を反さず我等が意に任せり夫ながら我に財の余分なければ此上如何とも身を立べき備なし盃くの汝等が黨に交り此業を努べし此事許諾あらば我 祥是に過ずといふ賊徒の中彌弟といふものは是を聞て一命にも易がたき膏血の貨を失ひ左こそ思ふも 理なり我首領へ吹撃をなし其事を計べしと自後東太郎を偕行木根を傳ひ岩角を攀り峯を越洞を回て一箇の茅屋に至りけるに梁 樹木も

苦むして棟上に葎生出簷の妻も落葉に埋れ寂々たる閑居の中座上には賊首太郎寛然と酒杯を傾居たりければ彼賊徒等東太郎を率て奪取し圓金を出し其とを具に語る太郎固より面体も見覺ざれば左右なく許容し 盃を搦て是に存む東太郎拜謝して推寄と見へしが一刀を抜て忽太郎を切倒す反す刀に賊徒二人を左右に断神人鬼没の 働に殘る賊黨一支もせず逃走る東太郎欣然と雷聲を轟していふ十七年以前賊首が爲に横死を遂たる女が警敵岩城東太郎成茂爰に來つて報するなりと首領太郎にとゞ先をささ之於 是年來の積鬱故じ女が變 報 既になんぬと心靜に以前の圓金有所を需て奪返し旅亭に歸て其とを語しと去にても東太郎が絶勇萬夫不啻と謂べし少女が墳今に宇津の山の草茅に存せりといひつたふ寔に奇怪の珍説なり

○野于靈妙

語曰積惡の家には余殃あり積善の家には必餘慶ありとかや此に紫陌堀川の邊に岩淵右内といへる浪士あり累年何某殿の營中に仕たりしが多病に仍て其職を辭し逸民と成て市中に居す一日暇隙のあまり小室嗟峨の曠野に遊行し己に歸路を需んとするに一人の少婦道路に倒伏て泣居たり右内是を異み其故を問ふにかの女いふ妾のこのわたりに栖む野于なり父なるもの狩人の手に活捉れ今や死地につきはべりぬわはれ君仁惠を垂たまひて父が危難を救し先ぬといふ岩淵更に信用せず汝妄言を吐て我を 誑んと欲するや身き畜獸の身として何ぞ孝節の義をしらん狐いふ君しらすや畜類固より痴に生て愛着の念に倍せり君疑惑しぬふも去をながら實に其事に預るのみ 自 獵人の家に至りてさましく嘆 訴ゆるといへ共肯はず今は俱に死に赴くの外侍らずと大に悲傷し更に進退を 辨ざれば岩淵いふ汝其事實事たらば獵人の家居に偕り我助命を計ひ得させんといふ野于悦びさあらば案内しまいらすべしと草莽の經路をたどり一箇の斃室にいた



り鬼をいかに野干が言に違はず庭前に志願を縛して國人公然と踏みぬれり岩淵獵人に向つていふ汝一狐を得たる由速に我に與よ褒賞は其意に任ん獵人これを開て又もや野干の形を變じ我を狂かすならんと大に嘲笑ていふ通方自在を得し老狐すら我手下に打倒せり其先蹤にも曉らずさて汝人間に形容を變此に來るは自業自得にあたりと命を断事を勞むが故に是を扶んと思ふのみなりふ汝妄に言となかれ我曾而野干にあらざるもの、命を断事を勞むが故に是を扶んと思ふのみなり辭に方金を貯もてり汝是にその狐を交易よといふ貪欲愚昧の獵人忽利欲に眼くらみさわらば君の意に任せんと方金數兩を得て大に歡喜し頓て狐の縛を免す右内是を率て草中に追放ければ以前の女右内と伏拜み拜謝して行方しれず於是右内右陰徳を惜ひ既に家居に歸けるが其後一子千松なるもの聊風疾の氣味ありて深窓に打臥しけるに夜に至而躰全身に物を生ト發熱衣服調度すべて物の色の赤を擲で新調す然るに不出義なる哉かの一子物の赤きを思嫌ひ白きを好で自手掛を返て被りければ右内是を見て大に嘆じ物惣而異變なるハ長久の沙汰にあらざる問刺法論曰人虛なれば神其守を失ふが故に邪鬼外より是を于す就中肝膽を病厥陰陽氣の不及に運ば白戸鬼是を犯すといふ痘神に赤色を以すること故例なるに白を愛は彼白戸鬼の爲に犯さるゝものならん是全く實の痘瘡にあらざれば淫鬼をして祀るに足らずと忽痘神の棚を破却し野外に是を棄さしむ其夜岩淵が夢中に白衣を着せし白狐頭枕上にて告て曰嚮に岩淵下の厚情によりて九死の難を免たり是を謝せんが爲過日より此に來れり今我千載を経し初縁の功を報たれば普く神通の靈妙を得て字加神の免許を蒙り痘瘡神の運類に首領として其事に預るなれ既に足下の幼稚をしてその症を受さしむ白色を以て専とする事清淨を潔とし給ふ真神の加護なり

る故なり赤色は陽にして白色は則陰なり狐固より陰獸なる故此に據由縁にして強て奇とするにもあらずさるべし君あへて愛給ふな幼稚の痘瘡我に預る所なれば努々疎略のあるべからず告畢て神去ぬ右内夢覺て大きに悦喜し僕に命じて棚をつらしめ白紙を断て幣帛となし再び痘瘡の神を祭去にても痘神の白色を好事奇なるに似て奇にあらざ下俗の白きを忌事は葬式の具に用る故にやされぬ婦の懷孕満月にいたりて其臥内の壁上悉白紙を以て張塞事すべて大小の國の守なきの家格に豁然として其例あり白きハ色の本原なる故其理明なり於是一子千松旬餘を歴ずして痘瘡瘡完く本に復しければ右内全家の怡び小樹ならず庭園に宮地を儲かの野干をして此に祀るその夜右内が夢中に再び白狐現じていふ君いかなる機縁に因てか斯迄も我をして扶助し給はると是を謝するに詞尽す今世所に示す事あり君不慮にして劍難の相を儲けり是を省んに其は武門を捨てて商賈に移り米を鬻ぎ生業とし給ふべし我扶護と成て富貴万福を祈べし因に其證を呈するなりと白衣の袖より白紙一枚を取去るは去と覺て夢は悟ぬ岩淵希意の思ひをなし枕上をみるに實に白紙一枚あり夜明て夢想の有増宅眷にも語聞せかの白紙を熟覽するに文字の形有が如く故こそあらめと旭影に蒙て點檢し何月何の日米穀高直となり何月何日下直なりと凡半年斗の間米穀直段の高下を誌せし奇瑞に駭岩淵大に感稱し去にても畜獸の所業一片の白紙何の用をか期すべしと弄思ひし某却て愚に似たり斯も意味深甚なる野干の賜是を以て推しは我に劍難ありと未前を察する觀相の明なる事此に於て認ざるのみと自後岩淵帶刀を棄て其任なきに移住し米穀を交易して藥とし白狐が與へし一紙に依て高下を計り診に百發中ずといふ事なく金銀財寶日々に増し月々に倍して忽富貴の身となりける其後岩淵用有て東山邊に至りけるが黃昏に追ひ家路に歸る道すがら四條日たりの茶店に入て稍く氣息を休る水



に究竟の壯士或人續て入岩淵に向つていふ初々世には似たる人も有もの哉我くが尋る仇敵何  
 某なるもの面骨柄足下に少きも違ふ事なま由是過刻より跡を追來り既に一討と刀に手は掛  
 つれを退て以爲に彼ものは頑心堅硬にして須臾も兩刀を放す事なし足下漸く短刀を挾で正  
 老く町家の逸民と見詰たるに心附て其とを寛たりわはや帯刀の武士たらば足下不慮にして我々  
 が手下に打踏されんものを借も危しと打笑て語けるに岩淵是を聞て白狐の考相符合した  
 るを心中にふかく感し武門を捨省たる故にてそかゝる災害を宛たるはやくも家居に歸りけ  
 るが扱しも道は淫に禍し善に福す此に上件の獵人形容憔悴して身には襤褸を纏ひ廿余りの少女  
 に介抱せられ或日岩淵が門戸に立岩淵是を見て近く寄汝我を見知りたるやかの者大に驚き寒に  
 君をよくしれりと涙をばらりと流し扱く世に恨べき天然の獸報なり舊惡消滅の一助たれ  
 ば因に懺悔いたすべし我く年比田獵を生業とし生る物の命を取さへ強惡の所業なるにいつぞ  
 や一狐を捕置て是なる娘の親狐なりと君を謀り多分の謝金に交易きたる其罪逃る、所あらんや  
 頼に親子奇疾を愁家財も残す活却なし今は身を佗べき一樹の蔭もはへらずと前禍を悔紅涙に沈  
 ければ岩淵聞て寔に狐なりと我を偽欺きし小女か面体も覺あり一旦業惡に沈るといへ共懺悔  
 の功德は廣大なり於是我汝等に恨なし且今かく慮ざるの僥幸に居ると一狐が報ふ所にして  
 其原は汝等に欺られしに依てなりしかれば却て謝せずんば有べからずと經過分を取せければ兩  
 人心魂に徹して感慨し威々然として頼て門戸を立去ける寔や善惡の巧拙は禍福の違ひ斯のごと  
 し獵人が貪欲仰で弓と射るがごとく終には其身に歸依する例下俗の鄙言に人を呪咀ば穴ふたつ  
 といへる事宜なる哉此心を法華經普門品に  
 呪咀諸毒藥所欲害身者  
 念佛觀音力還着於本人

去にても忍べく仰べきの天報なるをや

○造化の怪異

郭璞 山海經に序して曰物自ら異とせず人よりこれを異とすとされば天地の間あやしむべく  
 驚くべきと少なからずと覺ゆるい我がみる所いまだしきゆへなるべし爰に國初の時とかや東  
 郭牛込の邊に河合義平といふ兵學師南の人あり元來甲州の士にして孫吳甲越諸家の流に於て  
 就はざる所なく弓矢とりては天が下に恥る所なけれとも勝べからざるものは窮鬼にして朝夕の  
 燈もたへくならずなりしが此人ふと吉原の娼婦玉河といへる名高き美人を見初めしより及ばざる戀  
 に心を焦し遂に病となりけるがせめては其人の筆の跡なりとも見て自ら思んと書をきた、め  
 てしばらく玉河が許へ遣はしければ當時全盛の名街に溢ふる美人なれば敢て手にだに  
 輪ざりけるゆへいよ病もあがりけるが邊に住る一人の道人あり常に賣卜して義平が家の  
 軒に日々胡床を構へ往來の人の死生廢興をうらないこれを以て衣食をなし義平と甚だ睦じかり  
 けれども義平兵學師南の人なれば高く構へて卜筮の間は談せざりしが或時道人義平に向ていふ  
 い足下智勇をかね古今の事跡等に明らかなる人にきて何して美人を手に入る手段に窮り給ふや  
 百万の軍は手足の如に使一人の美人を得とは龍のあぎとの玉を取るも難と云ば世の人足下の兵  
 學を何とか謂むと見洞す如く云ければ義平大に驚今何をか包まん推察の通り吉原の娼婦に心  
 をかけ斯く疾いとまで成れりいかにもして此戀の叶ひなば天下にわめて我外に慕ふをなし願  
 くは道人妙術をば傳へ給へといふ道人笑てそれこそいと易となりて叶へて參らせんと  
 はな紙に呪文を書て火ばちにてくゆらせけるが初は細き煙の立登り三尺ばかり上にて東西へひ  
 らけけるが後には此煙次第に大になり四五尺程に凝りて一團の雲となりしが不思議や其中に玉



河が姿あらわれ出て煙のうへに落く無入たるありさ義平はもはず横手を打立寄んとすれば道人押退めて是は我が招魂の術之今さはらば其人の命立どころに絶ふべし先づ我に任せ給へ足下の書給へる事のあらは今此火ばちへ入給へども義平こころへ玉河へあくらんと詠れさし歌のありしを短冊に書て火ばちに入れば其煙立登りて玉河か姿を覆ひ又元の一團の煙とぞ成ける道人が曰もはや足下執心の念を美人の神魂に染せたり足下今焼たる歌を扇面に書て玉河に示し給へばそぎ吉原へ往給へといふ義平が曰道人の志 忝なれども一片の金だに無れば往べきやふなしといふ道人しばらく思案末て斯まで懸焦れ給ふ心をむげになさんとも友たるの道ならねば金をも進じ参らせんと軒に出て金二兩の重ある石を拾ひ来り懐よりなちぐろのごとき石をとり出し哭文を唱へて彼石をすりけるが不思議なる哉此石黄々たる金と成てければ義平奇意の思ひをなし扱く足下は神仙の人なり抑 是は何人にか傳授ありしぞと問ふ道人が曰これを語ればななきと入まづく足下の疾を療給へといふ義平大に悦んでかの金を判金貳兩に賣りて頼て吉原へ遊びける玉河は過し晝の假寐に雲に乗りて天に登んとしけるが忽ち美男兒の聲を聞き下し窺へば一首の歌をぞものしける

玉河の深き流にかけけり

人もまられぬ夢のうきはし

いかなる人ぞと問ひんとすれば五色の煙立へた、り影も形も見へわかず残り多やと思ふとはや悟て悔しき夢のうちの歌をば吟じ返しつ、一ト日二タ日も過けるが或日某の家より玉河に相見んとといへる客ありとて一ツの扇面を持来る開きみれば去りし日の夢にありく聞か歌なればいまだ容貌は見ども既に心はゆるしてけり斯て義平は道人か術を以て幾とせか懸焦し玉河に逢ひ

てふかき契を結びこれよりしばらく吉原へ通ひけるが常に道人に就て金を調度しける程に初めに引かへて今は衣服大小も美麗を極め當世風の男とぞなられける人の生はかぎりあれども人の欲は涯なしと壯子の詞も宜なる哉義平終に玉河をうけ出さん望を起し或る時道人に玄かこのよし物語り八百兩の無心をぞかけしる道人頭を振て肯んせず一度に二兩の金だにもしばくすれば道に背くに八百金を一時に得んとは天恐しきをいやるもの哉と氣色をかふれば義平も怒り汝か携る所の金を請はいかにも否むべきと今汝は術を以て造り出す金なればいと易きことなるを勿躰ふること奇怪なれと刀の柄に手を掛れば今迄席に在りし道人いづくへ去りしか行かた知れず義平は只記をらかして金を得んと工みしとなれば大に後悔ま道人の宅へ往き謝せんとするにもはや上かたに用ありとて金隣の人に暇乞して立去けるにぞ今はせんかたもなく金なければ吉原へもかよはれずとはうにくれて居たりけるが或日葎草の邊りを過けるに黒き石の道に遺いたるを取揚みれば彼道人が所持せし石なり大に喜んて持かへりしばらく試みければも咀文なければ金と化せずさるにても此石の再び得べきものならねは深く珍識して人にも示さずりしが或夜門を叩く者あり誰ぞと答むれば道人なりしは果たる姿にて内へ通りければ義平も後悔の折から冥間にて佛に逢し心地して互に前日の非なりしとを相謝し以後の彌陸敷せんと又交をぞ結び定めける道人の曰足下前日拾ひたるものあらん我に歸し給へ左あらば法に過たるとなれとも三百金を遣り参らせんといふ義平心にきつと思案まいかにも冷ひたり斯く深く交を結ぶうへ争か否み中さんと彼石を渡しければ道人二百兩ばかりのかさむる石を拾ひ来り座側此石礎の有けるに石をのせて咀文を唱へけるに義平ひそかに後へまはり琢んとする道人の手をひつとらへて恥しはづさせ彼石礎を琢ければ怪哉一尺四方の石礎忽ち變じて金となる道人



石と投擧て大に慟哭なげア、我れ人を知らずしてかゝる天刑てんけいを犯せり我か命いのちをことしに盡つたるなりと大に叫こび悲かなみければ義平ぎへいも甚はなはだ後悔こうかいし自害じがいせんとすれば道人だうじんふし留とどめて今足下いまあしもと死したりとも我に於おて益えきなし我に益えきあらしめんぞ我もは、別に手段てんでんあり今此石礎いしそんを判金はんぎんに易かへば幾いく百万兩ひゃくまんりやうといふに至いたるべし然しかは望のぞみの通り玉河たまがわを請出まねだえ我が爲ためには一手ひとてに三百人の衣食いしょくを施ほし世の獲と々としき者を救すくひ給たまは、是こゝに増ましたる功德くつとくとなしといひてかき消けせやうに失うければ義平ぎへいは是こゝより恐おそしき心付こゝろて道人だうじんが詞ことばを守りける去程きょじやうに義平ぎへいは日頃ひごとの望のぞみ成就じゆじゆして日ひを經へずして玉河たまがわを受出うし大なる居宅いぢやくをかまへ龍りゆうの雲うんを得えたる勢いきほひ肩かたを並ならぶる者ものをけれども倉廩くらりん盈みちて榮辱えいじやくを知るしるや道人だうじんが詞ことばを忘れず年に六百人の衣食いしょくを施ほこし敢あて騙だまれる氣色きしきなく身を慎しんみて行なを正ただしけるが二年にの後のち道人だうじんはやさやかなる顔色かほしきにて義平ぎへいか宅たくに來きりければ義平ぎへい夫婦ふうふは大おほに喜よろこび涙なみだをながして昔むかしの恩おんを謝あやしければ道人だうじんの曰いはさずが足下あしもとの武士ぶしなりよくも某あなか云いたるに倍はして世の人よはを救すくひ給たまへり其切き切き徳とくによりてわが罪障ざいじやうとくく消盡しょうじんし今本宅ほんたくへ歸かり再び天帝てんたいに仕つかへ奉ほうるなり我は元來もとより天帝てんたいの使つかひにして造化くわあの補佐ほさを掌つかさどる者ものなりしが過あやまりてしいらくの人間にんげんへ托たくせられたり故ゆゑに石いしを轉くるじて金かねとするは我が舊時ふるときの職しやく之法のほに過あやりて分限ぶんげんをは除のぞべからざる者ものなり然しかれバ此後こゝいよく人ひとを惠めぐむのを忘れ給たまふなといふれば一片いっぺんの白雲はくうん飛とりて乘のるぞとみへしが姿すがたは消くて再々またまたとして南天なんてんへぞ歸かりけるとかや

○鬼夜おによの佳言けんげん

夢ゆめのなかにゆめを占うふ夢ゆめを見てゆめく夢ゆめと我もはざる人の心を淺あましけれ西都さいと六條ろくじやうの邊あたに聊ちやう齋さいといへる儒生じゆせいあり諸國しよこくに門人もんじん多くして著述しやくしゆつの書しよも少すくなからず家いへも豊ゆたかに暮くしければ司馬し相如さうじよがむかしを慕しのふ心こゝろにこり馬南郡ばなんぐんが絳帷けいゐを學まなび甚はなはだ色好いろこのみにぞなれりける然しかれば聖賢せいけんの神かみは天地てんちにみちふさがりて善ぜんに福ふくし淫いんに禍わざはひするとは是非しぜいかど疑うたひしは誠まことに時ときを怨うらみたるに非あらずや其實じつは恐おそるべき天道てんたうの默報もくほう鬼神くわんじんの冥罰めいばついちじるきとのありき此先生こゝろある日沈南ちんなん鬢びんが神かみを凝こして書しよきたる美人びじんの戸かどを半かたはひらきて外と面めんへのそきたる圖ずをもとめて壁かべ上うへにかけ酒しよを把とり脇息わきいきによりてさうなかな先まかする人の誠まことに世よにあるならばと沈吟ちんぎんえて餘念よねんなかりしが何なにもなく美人びじんのかほはせ笑わらふふくみ先生せんせいと見みかはしてこぼれかされる秋波あきなみに先生せんせい忽たちち恍惚くわくごとして夢ゆめの心地こゝろとなりれもいずつかく立寄たてよれば美人びじんはづかしそうに手てをとりて一間いっけんの内うちへ伴ともへば闊然くわんぜんたる天地てんちひらけ出水すいすいの麗秀れいしゆ宮殿みやうてんの淨清じやうじやう心こゝろも詞ことばも及およばれず珠玉しゆぎよくの費金銀ひいぎんの光あかりり耀かがやく殿造てんぞうり座隅ざごには玉函ぎよくんを並ならべ三さん千世界さんせかいの圖書とくしよを藏くらめ童女どうにょ一人ひとりこれをつかさざる先生せんせい心こゝろにはひや汗あせをなかせども儒者じゆしやの歴れきものこゝにありと遠慮えんりよもなく上座じやうざに就つげば美人びじんすしんで拜ひらをなして先生せんせいにねがひしきとのい此所こゝは女にょばかり住すまへば願ねがひくは先生せんせい人間にんげんのことを忘れ給たまひ此所こゝに終邊しゆへんの志こゝろを生なし給たまひ穢けがらはしき身にみいへども妾めかけをして箕帚きしゆの役やくを奉ほうせしめ給たまは、誠まことに身に餘あまる悦よろこびにていはんといふ先生せんせい甚はなはだにづばに入いつれば近頃きんご諸侯しよこう及び將軍しやうじん家いへより度々たびたび聘へいせられどもうるさきとに思おもひて敢あて領承りやうじやうせざりき然しかるに婦人ふじんにして學まなびに志こゝろさす是こゝまた天下てんかの美談びだんなれば望のぞみにまかせ滯留ちゆうりゆうせんそれ萬卷まんくわんの書しよを誦よんずるとも規則きそく立たてずしてはむだとなり故ゆゑにのれが私智ししを出ださずして兎角とかく師しの教おしゆる所にまかするを初心こゝろの第一だいいちとすと先づ殿中てんちゆうに引ひ入れんとす美人びじん大おほに悦よろこび侍女じよにょ數十しゆじゆ人を呼よびて樂がくを奏そうじ酒しよをすし先日せんじつも既すでに暮くれば今宵こんやは月見げつみの亭ていにて伊戀いこゝろめゆさんとふたりの童女どうにょに寮内りやうないさせ先生せんせいの手てを引ひて一いつつの亭ていに入いれば玉たまの階かゝの上うへに靡なさがり左右さうぶに玉燭たまじやくを設たげ何なにとなく殿てんかにたばへて思おもはず足あしも立たてまれば美人びじんしづくと階かゝをのぼりて麗れいたかくと卷上まきあれば年としの比ひ四十しじゆばかりにして冠帶くわんたい嚴然げんぜんたる殿上人てんじやうじんの甚はなはだ怒いかれる顔色かほしきにて座ざし給たまへば先生せんせい覺おぼへず階下かゝにひれ伏ふし敢あて仰あやみ



あるとあつたはず此時隣人階上より聲をばげまきいかに聊齋當時汝氣力にまかせ世の中の人には欺ども我等をば欺き得じ今汝肺肝をきすか如く見洞したり我一人に中聞さん今汝身に徳なくして高きを羨ひ紹々なければ人に逢はず是古禮を守るに似たり見るに介をもてすればかならず費を返その禮あり今汝費を返さずして必ず介をまつはこと六ヶ志き人をさけて其の力が手にあふ者ばかりを延て管中の見をうらんが爲なり是其罪一なり人に對して己れか知らさると見ざる書は氣力に任せていひはぐし反つて是を見識と見て六藝の間も日本の爲にならぬ書は讀で甲斐なしといひ日本の古今治體を誦ればそれは跡なり跡の糟粕といひしからば何事か尤學ぶべきと問へば心術と答ふ心術いかに問へば言語には述べがたし自ら悟るに在といふ馬が九船頭とはちていはざる所なり是其罪二門人に子孫をとへば口へ出次第に鷲を鳥にいしくろめ當座の恥をつくろひて内に自ら愧とをしらず是其罪三なり道をしらす徳をつまらず自ら英雄豪傑と稱す是其罪四なり金多き不智なるもよく待ひ錢なき人をは英才をも棄て問はず商人根性と謂つべし是其罪五なり黨を立て類を結びおのれは從はざる者をばさんく誹謗する是其罪六なり富貴に陥らひ權勢に媚び既に死るの人を非る是其罪七なり利を見ては義を顧みず其のれか勝手によきとば非をも理とし古へを引て證を立て不義をなす是其罪八なりこれその大なるものにて其小なる罪は僕をかふとも敷へ盡かたしア、汝口には仁義道徳を唱へ胸には穿徹の 盜 を置し聖人出給ハハ大に嘆き給はんむかし孟子は好て人の師となるとを戒め給へり今汝は好て人の師となりて金銀多き弟子をは字を稱す古禮に違ひ實傳に背く是汝が罪九なり諸生を携て妓館に遊び門人の學問料を以て其のれが放逸の娛をなす是汝が罪十なり罪母と成て百罪これより更に彼人の子を賊せると誠に誅を容れず汝返答あらば一々官上奉れこれなる

は忝も黄備の大臣なり今に至て我が國の學者を守護し給ひ汝か如き姦賊をば其間に立を給はず速に刑官に就して逆ぼつつけにせよとの仰なりとするべき詞に聊齋は五体すくみて戰慄し只アツクといふばかり一言の返答も出さりけれハ美人腰を下して宣はく汝今刑官へわたをべき者なれとも大臣の仁心を以て再ひ陽間へかへし給ふこれより心を更めて仁義道徳の教へを守り人を欺き罔ひずんば罪の消滅なるを日を待べし若又心を改めずハ日あらずして捕吏を遣はし此地にゐて頭足處を殊にせしめん汝さきに將軍より聘せらるるといひしも妄なり何ともして將軍家に仕へよ衣食足らば自から妄言をも出すまじ刑官どもはや引立よと聲のうち數十の獄卒出來り首をむじつかんで門外へ投出せど覺しが忽然として夢はさめて前なる酒もいまだ冷ず衣は汗に濡れたりける聊齋再び生たる心地して美人の畫も恐しくなりければあどなく疾と成勢々然として居けるが或る寺に大徳の禪師ありと聞て杖にすがりて參禪し始終の事を懺悔していかなるもへぞと問奉れば禪師の曰幽明もな心にありされば幻は心より生ず元來心は悪をなすへからざるものなり強て悪をなすが故に其のれか心を戕賊す戕賊の物と精神と相戦ふて幻を生じ狂を生じ地獄を生し惡魔を生して終に本性を喪ふなり故に心正しく生れの儘なれい幻怪の生すべき道なしと語られければ聊齋再び夢の覺たるとく本心と知り得て疾ひ立處に平癒しこれより性命のと鬼神の説を信じて終に老成人となりて後に門下の人に此事を始終ものかたられけるとぞ

○再偶の奇説

洲に遊ぶ雌鳩は雌雄の和を貴み水に浮ぶ鴛鴦は陰陽の應を表すされば結ぶの神か曾て誓し念の磐石も徹す誠は聖さへ因て道をは立給ふ所は天の性をみる一ツの便なりぬべき爰に難波の里に鎌倉屋といふ者あり其名は既に天下る處も知らしなへて人の知たる家からにて内は輝く金銀



の光りを包む米俵四國九州大小の國の守り登り来る船は日々海門をたじわけられぬ帆柱の戰國  
 以來類ひなき大身代の人なりける此人ひとりの娘をもちまたまきり子の時よりも乳母が抱きて  
 隣所なる多葉煙屋の内へ往日も来る日も遊びしが此家の一子國藏を遊火相手の名染ぎへ三とせ  
 四とせの春を経てたがひにけらからのとくなりしが程を経て後深窓の蝶よ花よと弄ばれ門を  
 出れば乗物を見る度くくに國藏はありしむかまを思ひ出して羨しや同じ時代を生れながら  
 な面染の顔さへも見られぬ賤のあばらや住居見するも亦耻しと常々恥もひくらせしが十八  
 歳の春の頃角の戯場の大入に高座をきつと見上れば鎌倉屋の家ぞり番頭小者下女までも輝く  
 粧ひ全盛の娘れきぬがれさながほごやら殘る芙蓉の顔幾とせ見ねを忘れねは縁のつなや  
 見かはす鏡互ひに色もつ秋波もゆかしきとたに岩ふねのかぢもあらはとれもふばのり歌終れ  
 ば雨のごとく星の如くに分るれと殘る想ひひ夢うつし忘るゝひまひなかりける斯て國藏は及ば  
 ぬ戀にあこかれてふかき病となりければ兩親の愛はかたならず國藏病のひまに借し本屋の  
 草さうしを讀ける其中に紫式部いなるの祠へもふでける時北山時雨俄にふりしきければとある  
 茅屋へたちより若きれのこの獨り居けるに笠借らんと請ひしに笠はなまどてあをといへる今の  
 我の如きものをかしけるが式部歸りて後彼男一首の歌を持來り婦によりて式部へぞ出しける其  
 歌 時雨するはなりのやまののみち葉はあをかりしより思ひそめてき 式部この歌に感じてひ  
 どよの契りを許せしことのありければ國藏はよく堪かねかれは既に生れたるより武藏屋へ  
 縁組の約あれば不義なるとくれもへせもせ免ては彼と知らせなばさぞつれなくもれもふまじ左  
 あれば今の我身にも嬉しとれもふて死んものとかの乳母は久しきなまみなればたのこ一首  
 の腰れれをそ贈りける乳母はそれとも知らず國藏が重き病の内よりたのみしとなれば氣遣ふと

もなまど娘か部屋へ持行ければたきぬはかねて下心それと聞てはいたはしどひらきみるに  
 道ならぬ戀のしり道迷ふ哉しでの山路に近き身にまも 娘此歌をみるよりもればはべず兩眼に  
 位だをうかすせめて命のある内にはとれもはぬ心のしらせたく思ひけれを雲と成雨となられ  
 ぬ堂上のたましく出ればこしもとはしたこしをひの見るゆにせかれいこそ貧しふ生れなばか  
 る思ひはあるまじと一首の返しをぞおくりける 道なうぬみちとれもひそ戀草のつゆの命はあ  
 すきもるども 國藏は乳母を屈し返しの歌にたきぬがしんてい淺からぬとのこもりけるにぞこ  
 れより心いさみて日々に 快くなり終に本復をぞしたりける然るに頃日武藏屋を急々に婚體の  
 相談ありて既に興入の日も定りければ娘は驚きさま／＼事に托てのがれたくれもへども素り  
 厳しき親なればきつと堅く中付けるにそ玉のかほほせ衰へて積るれもひはありそ海の見も  
 いとゞ哀なり武藏屋には近きうち婚煙の禮行はれんと上下いさむ其なかに妻のかるは嫉妬ふ  
 かき女なるがこの噂を聞て忽ち狂氣のこくになりしによりて座敷牢を建て入れれども七日七夜  
 狂ひつめて終に半の柱を突打走り出て玄關の上に倒れ死したりける是は不吉なり外の聞へも如  
 何なりとて密にとり片付て邊の人もしらざりける既に興入の日に成ければたきぬれも悲し  
 みを乗せてかきこむびや乗物武藏屋の玄關へ入やいなや此家俄に震動しうす 腥き風花こり  
 星の如くに並へたる燭臺一度に消ると見へしが一丈ばかりの鬼女の姿あらわれ出乗物よりたき  
 ぬを引出し眞さかぬに投るとみへまが忽ち息は絶果けり家内の騒動はかたならず漸く妖怪  
 も静りければ兩家とも茫然と夢のこくにもはれてたきぬが死骸を其まじに野邊の送りを盛  
 もける煙草屋の國藏は嫁入の沙汰を聞よりも又重き病となりしがたきぬが死たる様子を聞て我  
 も今の際と成り氣息奄々としてありけるがせめては死ぬ其内にたきぬが墓を見てなりともど



思へば此世へ引戻す氣力も少し丈夫になり振ふ膝ふしやうくと杖にすがりてふるてらのおきぬか墓所へ尋ねぬもあわれなりける次第なり念力岩をどはすと世の隠も宜なる哉終に墓所へ尋ねあたりたいとを此世からいふたどて口説たどて届かぬと知りながら墓の前にうちよして人目もたもはずかきくどきしが又もふには何とそして死骸を掘出し我もともこいで死れば本望とかよわき腕にあらはかの土を杖にてちり出し堀かへす一念力のねをろしやなんなく棺を掘いだしかきあげんと一生の力を入れはやふくと上ても根の尽果てどふとねとせばキヤツと一トこゑこのもふしぎと棺のふたを叩けば内々人のこゑ心得ふたをこぢはづせば内よりすつくとねきぬが妾嫁入の粧ひ其儘に夢ではなきかど互ひにびつくりかたへの小かけへ伴ひてたがひにありしとをもをかたりあかえて前生の約束ならめと嬉しやら哀しいやらの忍び泣此上はいづくのはていかなる鄙の賤が業も共にいどはず此場より遠かた寺の暮のかねを幸に難波の里を予立退ける去程にさきぬが墓は盜のほりかへしたばこ屋隠は行方知れずと取沙汰しければ親々の哀しきまゝの追善供養いとなみける斯て三四年も過ければ鎌倉屋夫婦の者娘が後世の爲なりとて四國八十八ヶ所の拜香を志し先づ讃川の金毘羅へ参詣し麓の茶屋に腰うちかけみれば娘がよみ歌をよすまにありく尊家流これはふしぎと夫婦の者忽ち哀しく落涙し中居を呼んで此ふすまのあたらしき短冊はいかなる人のよみ歌にていぞと尋ねばされば是は上かたより多葉部屋の参りぬが此所に星をどめて其妻女は大家の娘と見へて和歌遊藝に達しぬが今は貧しくいていたはしや賤の女の業をなしたりふしは又歌なと詠て樂しまれぬ此短冊は其人の昔のよみ歌なるよし承いといふ夫婦は驚き急き其家へ尋ね行ければ折ふしにきぬは針しごと一ト目見るより走り出母親に取付て前後もまらず泣けるにそ二人の親も嬉

しなき國藏外より歸りきて見れば難波のかまくら屋これいと驚き請じ入始終の様子物語れば夫婦は夢のさめたる心地うれしき事は限りなし是ども観音大士の佛力にて親子再び大坂の店をなまて此所よ末繁昌に暮すべしと持合せの金銀にて一ツの店をいとなみ遣はしけるが程なく富貴の家となり今に至てさかふるも奇なる哉宿縁のむかし語ぞいちじるき



明治廿五年十一月廿八日印刷  
全廿五年十二月十二日出版

翻刻者  
發行所

東京府平民  
足立

立庚吉

小石川區相ヶ谷町十七番地

東京府平民

小

林

由

造

小石川區掃除町三十三番地

發行所

# 礫川出版會社

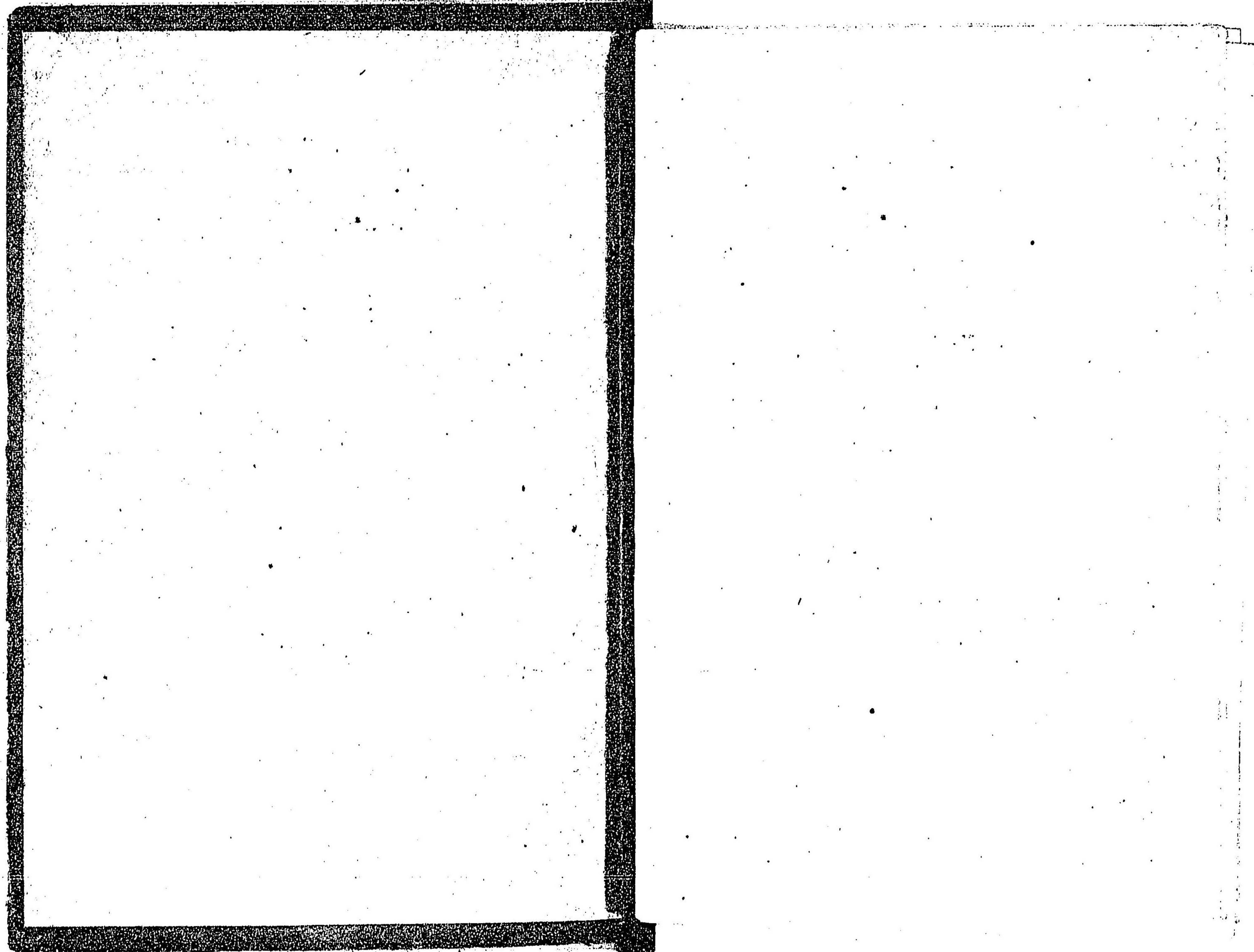
小石川區掃除町三十三番地

發行所

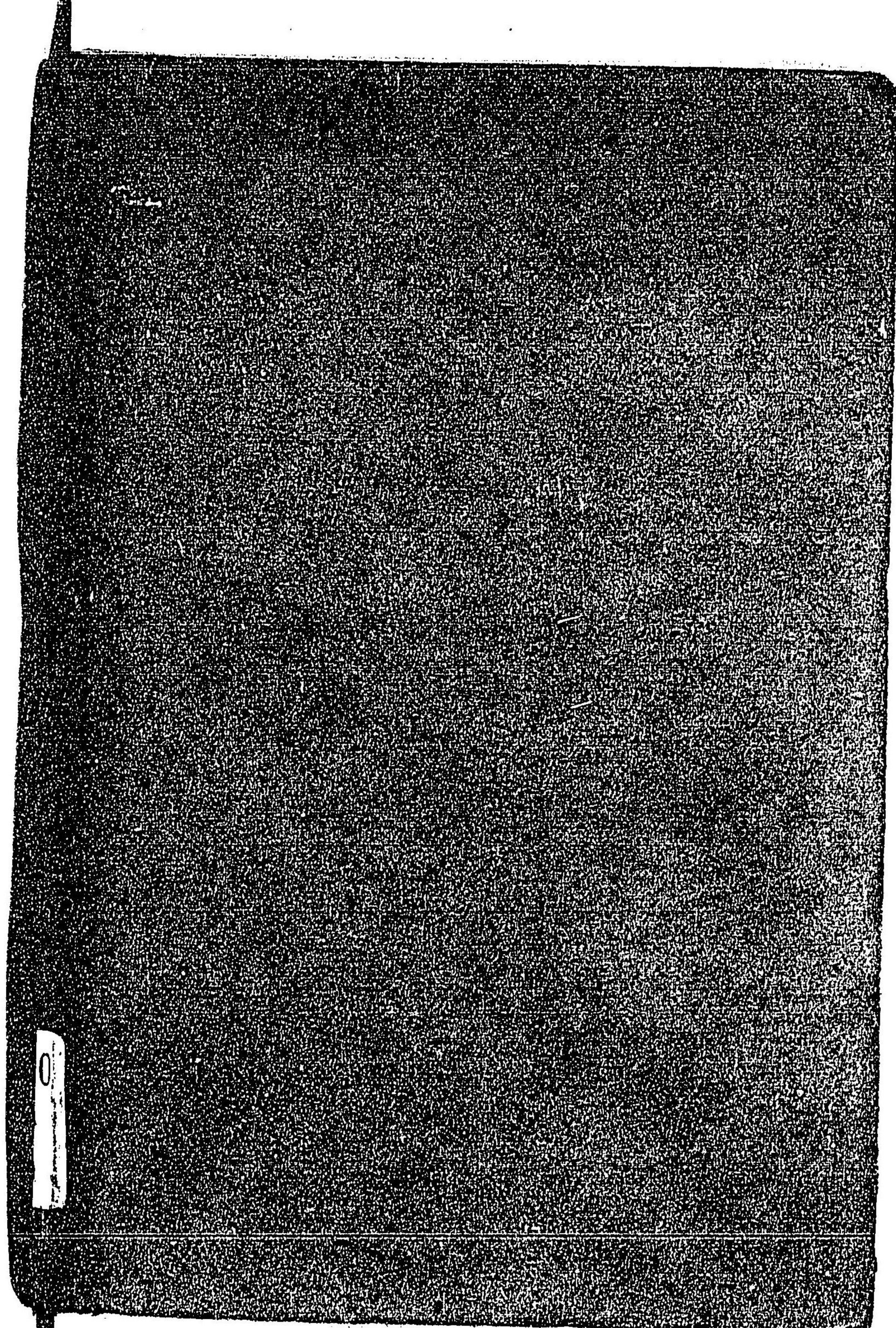
淺草區三好町  
日本橋區本石町三丁目  
全上  
全區通四丁目

大川錠吉  
覺張榮三郎  
內張豐二郎  
加我









0